

# 山口県立美術館年報

昭和 58 ~ 59 年

ANNUAL REPORT  
1983~84  
THE YAMAGUCHI PREFECTURAL MUSEUM  
OF ARTS



# 山口県立美術館年報

昭和 58 ~ 59 年

ANNUAL REPORT

1983 ~ 84

THE YAMAGUCHI PREFECTURAL MUSEUM  
OF ARTS



# 目 次

沿 革 .....	5
事 業	
I . 展 覧 会 .....	9
(1)企画展 .....	10
(2)常設展 .....	32
(3)共催展など .....	62
II . 普 及 活 動 .....	71
(1)山口県美術展覧会 .....	72
(2)現代美術展 .....	76
(3)美術講演会および講座 .....	82
(4)美術館ニュース「天花(てんげ)」 .....	84
(5)移動美術館 .....	86
III . 入 館 者 数 一 覧 .....	89
収 集 資 料	
I . 館 蔵 品 貸 出 利 用 状 況 .....	93
II . コ レ ク シ ョ ン .....	97
III . 美 術 図 書 .....	105
組 織 等 .....	119



---

# 沿 革

---

## 美術館建設の経緯

46年度 47年度	調査費計上	
48年度	調査費計上 構想案作成	指導主事 1名配置
49年度	建設基本方針策定 (49.11.30) 建設用地の測量、地質調査 (49.12) 基本設計完成 (50.3.31)	専門研究員 1名配置
50年度	実施設計作成 (51.3)	研究員 1名配置
51年度	実施設計一部修正 用地取得 (52.3)	作品審査会設置
52年度	入札、議会議決 (52.7.29) 起工式着工 (52.8.8)	研究員 1名配置
53年度	定礎式 (54.1.29) 美術館条例議会議決 (54.3.10) 完工 (54.3.25)	昭和53年4月 開設準備室設置 室長→文化課長兼任 室長補佐→課長補佐兼任 研究員 2名配置 主任主事 1名配置
54年度	美術館条例公布施行 (54.4.1) 開館 (54.10.7)	昭和54年4月 美術館組織発足 顧問会議設置 美術品収集審査会(再編)設置 学芸員 1名配置
55年度	第二次作品収集計画案策定	学芸員 1名転出(山口大学へ)
56年度		学芸員 1名配置 専門研究員 1名出向(下関市へ)
57年度		
58年度		館長 退職 専門研究員 1名転出(下関市立美術館へ)
59年度		館長(非常勤) 任用 学芸員 1名配置



## 普及事業について

山口県立美術館が創設されてまる6年が経ち、これまで実施した自主企画展は、大型の12の企画展をふくめ全体で22、また誘致した巡回展は11の回数をかぞえている。館活動に欠かせない館蔵コレクションや文献なども、少しずつではあれ確実に充実してきている。この6年間の活動を普及事業の側面から報告する。普及活動としてあげられるのは、つぎの5つの事業である。

### 山口県美術展覧会

セミプロ、プロ作家をふくめた山口県における美術活動の一般的傾向を、年に一度まとまった形でみれる機会が県美展である。県美展は、山口県の場合、戦後まもなく、おそらく他県にさきがけてはじまっており、いらい今日までつづいてきている。この県美展に大きな方向転換がくわえられたのは、昭和54年に当館のオープンとともに会場が県立博物館から美術館に移されてからである。これを機に県美展は、それまでの諸制度を抜本的に改めることで面目を一新した。改革された主なことからは、招待作家制度の廃止、審査の公正を期しての、審査員の県外からの招致（主に第一線で活躍している美術評論家など）、運営委員会の人的充実などだが、これは、ながい開催回数を経ることによって県美展にまつわり形成された地方画壇的なものから県美展を独立させ、たとえば作品審査のかたよりなど、そこから生じる旧弊を除去するために行われたものである。これによって、作品本位主義の明確な方針が打ちだされるとともに、県美展はそれまでのお祭りのものから、厳選公募制による現代美術展的性格のものへと大きく様相を一変することで再出発することになった。制度改革後、すでに開催回数は昭和59年度までに5回をかぞえるが、その成果も徐々にあらわれつつある。この延長線上で、県美展を若手作家にとっても、より魅力的で、互いに創作意欲を競いあえる場にしていくことが、今後の課題の一つである。

### 山口の現代美術・現代の陶芸

当館は、単に美術史美術館であるだけでなく、現代美術への関心をも包摂した美術館たろうとしている。したがって、その分野での活動もつづけているが、こうした活動を代表するものが、1年ごと交互に開かれている山口の現代美術と現代の陶芸展である。このうち前者は、現在までのところ、県内外で活動している山口県出身あるいはゆかりの若手作家のなかから企画担当者が数人の出品作家を選びだし、それらの作家に最近の仕事を発表してもらおうという形式をとっている。また、後者は、現代陶芸にかかわる問題提起あるいは動向紹介といった視点からテーマを設け、それに即して全国レベルで選ばれた陶芸作家の近作を紹介するものだが、昭和57年の第1回展では、7人の作家に直接会場で制作してもらうなどユニークな試みもなされた。このように企画そのものが回ごとに変則性とヴァリエティーをもつ点が、同展の魅力ともなっている。現代美術からことさら陶芸だけがとりあげられたのは、萩焼という地場一伝統産業をもつ山口県の場合、焼物にたいする関心が一般に高い事情にくわえて焼物に従事する作家が比較的によく、これらの作家に、より広い視点から陶芸を考えてもらいたいという配慮も働いている。いずれにしても、県民のあいだに現代美術の面白さや楽しさを紹介し、これに親しんでもらう雰囲気を醸成していくことが、現代美術をあつかうこの2つの企画展の目的であり、したがって県民を触発し関心をひきつける企画性、趣向や工夫がこれからの課題であろう。

### 美術講演・講座および実技講座

講座、講演活動は、県民と美術館をつなぐもっとも直接的かつ具体的な事業といえるが、これまで美術教養の習得と実技習得の2本の柱で行われてきた。前者に代表されるのは、年に1回の講演会および年に5回開かれる講座である。これは基本的には独立したものというより、それぞれの展覧会に

即して行われることがほとんどだった。講師は、展覧会のテーマとそれに対して想定される鑑賞者の関心度に応じてそのつどもっとも妥当と判断される講師を県内外から招請している。内訳は、美術史家、美術評論家、文学者、作家など。またこの他に、昭和58年度から夏期集中講座と題して年に一度、当館の学芸員による教養講座を開講している。ただこれは、開催方法やテーマの設定などに検討すべき余地がのこされており、まだ定着したとはいえない現状にある。

つぎに後者の実技講座は、はじめ初級、上級と講座を分かち、それぞれ初心者向けと指導者向けのものを実施していたが、昭和57年度からは上級だけにしぼられることになった。上級実技講座は、県内の学校教育あるいは社会教育の現場で活動している美術指導者を対象に、3講座、毎年、夏に行っている。科目は、洋画と日本画が昭和56年から連続して実施されてきているのこの3つめの講座に年ごとに新しい要素をとり入れている。洋画と日本画が毎年とりあげられるようになったのについては、洋画の場合、この講座を、地方では容易に機会が得られない裸婦デッサンの場にあてているため、また受講者に存続の希望がたかいためである。日本画の場合は、山口県でこの分野での活動が比較的弱いという理由による。最後に、のこの1講座は、受講者の関心度のたかいジャンル、あるいは県全体として基盤の弱いジャンルを調べて、毎年カリキュラムにのせている。昭和57・58年度はシルクスクリーン、エッチングを、また昭和59年度は彫塑をとりあげ、好評を得た。実技講座については、受講生の募集方法などに解決すべき問題がのこっている。

### 美術館ニュース「天花」

美術館活動の近況を随時報告する当館で唯一の機関紙である。昭和54年5月に創刊され、以来季刊紙として年4回の割りで毎回2,000部を発行しており、昭和59年度で23号までが出ている。内容は、展覧会の案内を特集としてとりあげるほか、館蔵品紹介、山口県美術家の小伝、研究ノートなどが骨子となり、またそのおりに執筆依頼した随筆なども掲載している。館の機関誌としては、このほかでは研究紀要の発刊が未着手の状態にある。今後、検討すべき課題である。

### 移動美術館

遠隔地にあつて美術館を訪ねる機会の少ない県民の方がたを対象に企画したのが、この移動美術館である。この移動美術館は、美術館に来ていただくといういわば待ちの姿勢を転じて、積極的に県下各地に出むくことによって美術館と地域社会をむすびつける試みでもある。いわば館のPRにも貢献している訳である。この事業は、館創立のあくる年、昭和55年度から実施されてきているが、毎年、周防部(瀬戸内海側)と長門部(日本海側)での各1ヶ所開催を原則に、県内の周辺地域を重点的に巡回してきた。出品作品は、年ごとに設定するテーマに即して館蔵品20~40点から構成され、会場では作品解説のパンフレットを無料配布している。また開催形式は、市町村との共同主催という形をとっている。これは予算上の共催というばかりではなく、実際の作業などについても、企画や展示といった専門的作業を別として可能な限り共同で事業を進めることを原則としている。それによって地元教育委員会の担当職員は、日ごろ関わりの少ない美術展開催の一部始終を、館員とともに身をもって経験することになるが、この経験は、つぎに市町村で独自の美術展を企画する際、効果的に生かされることで、地域社会の活性化の一助につながっていくことが期待される。地方美術館にとって移動美術館の意義はたいへん大きいと言わなければならない。

---

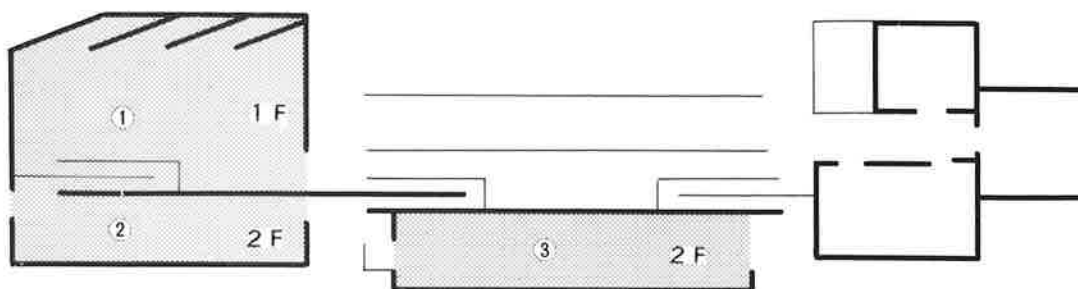
# 事業

---

## I. 展覧会

## (1) 企画展

館主催による自主企画展を毎年3本ひらいている。内訳は、予算規模に応じて大型企画展2、小型企画展1の割りで開催しているが、大型企画展ではおもに個人作家の回顧展およびテーマ展、小型企画展（普及活動）では現代美術をそれぞれとりあつかっている。会場は、基本的に企画展示室Ⅰ①・Ⅱ②を使用。内容によっては両室を別々の展覧会に利用することもあり、また大型企画展の場合、この2室に加え常設展示室Ⅱ③を併用し3つの会場を効果的に利用するなど、会場使用の原則には内容に応じて柔軟性をもたせている。



①企画展示室Ⅰ 583.298㎡（延べ面積）

②企画展示室Ⅱ 304.695㎡（ 〃 ）

③常設展示室Ⅱ 471.825㎡（ 〃 ）

※ 凡例 企画展記録は、名称・趣旨・会場構成・展観カタログ・出品作品・展評の順で編集されている。

# 1. 松林桂月

——その墨と色彩の妙——

1983(昭58)年10月22日～11月27日

月曜日休館



主催＝山口県立美術館  
会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ  
常設展示室Ⅱ



## (1)趣旨

江戸初期に中国より導入された「南宗画」は、日本における「南画」としてその風土にあうように適度に変容されながら、多くの個性的な大家を生みだし、江戸中期から後期にかけて隆盛をきわめた。しかし大いにもてはやされた南画も幕末から明治にかかる頃になると完全にパターン化の弊を生じ、当時の批判の集中攻撃をうけ、ついに画壇の主流から追い落とされる結果となった。すでに江戸期の南画家たちが観念的な画論の中で説く精神主義や人格主義だけでは近代日本画の変革の波を泳ぎきれなくなっていたわけで、必然的に南画家自身の制作内容そのものの変化を迫られたわけである。つまり専門画家としての意識のもとに、展覧会出品を目的とした大会場にみあう作品制作、いわゆる「会場芸術」を描くようになっていった。明治中期以降画壇に登場するようになる松林桂月も、やはりその時代の流れにあって、南画家としての意識を保持しながらも官展（文展・帝展）をその活動母体として、その画壇における地位を築いていったのである。

桂月は南画とはいっても、渡辺華山、椿椿山といった写実的要素をより多く含む関東南画の系譜につながる画家である。明治以降日本画壇にひろがる写生重視の傾向を考えた場合、桂月が南画の系譜上にありながらも、若い時代に華椿系のリアリズム傾向を持つ南画を吸収したことは、日本画の近代性という土俵の中で、他の近代日本画家と伍していくための素地を充分養う結果となったのではないだろうか。

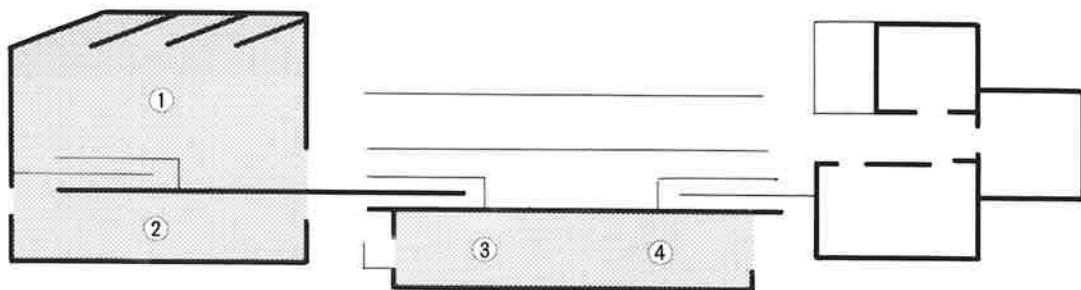
桂月の作画期を大きく区分してみると修業期（野口幽谷へ入門から文展開設まで）、明治末から大正期、昭和前期、昭和後期（戦後）の4つに分けられるようである。修業期を考える上では、この頃さかんに描いたと思われる多くの模本類が手がかりとなる。これらには、南画はむろんのこと、円山派、狩野派、中国画とかなり広範に勉強した跡がうかがえ、桂月はこうした古絵画研究の上に、野口幽谷から受けつぐ華椿系花鳥画の影響を強くうけた作風を展開した。明治末から大正期になると新たに開設された文展が、桂月の活躍の主舞台となる。ここで桂月は大きな画風転回をはかり、強勁な描

線と、鮮麗な色彩をもった大会場に圧倒されない大作、いわゆる「会場芸術」たる南画をめざすようになる。しかし大正期なかばをすぎると、しだいに強勁な描線にかわって柔らかい筆致が、また鮮麗な色彩にかわって墨をいかした淡い色調が顕著となってくる。

桂月スタイルとでも呼べるような独特の左下がりの構図や細くからまるような描線は昭和にはいつから確立されたかといつてよい。この頃の作品は、構図における余白や空間に対する意識も強くなり、さらに淡彩や柔軟な筆致を顕著にさせることにより、いっそう画面に枯淡の趣きを加味させていった。戦後となると桂月は彩色画も多く描く一方で、墨画への傾斜をより深めていく。そこでは晩年に入ってさらに深く追求された墨の濃淡の階調が、いかんなく発揮され、桂月の到達した筆技の精妙さをおかすことができる。

本展は桂月の初期から晩年までの代表作とともに絵付陶器や写生類などの関連資料も展示し、その画業の全貌を回顧するとともに、桂月の初期の画風関連を考えるため幽谷、椿山、華山、さらに松林雪貞といったその系譜に関係ある作家の作品も同時に展示した。その内容については、とくに桂月画風の今日性という観点から、その墨と色彩の妙味、あるいはその独特の筆致を示す作品などを中心に構成し、この機会に現代における新たな視点で、桂月の芸術性を見つめなおしてみようことをめざした。

## (2)会場構成



主に制作年順に展示 ①明治～大正の作品 ②大正～昭和初期 ③昭和初期～晩年 ④系譜関連作家

## (3)カタログ

責任編集 菊屋吉生

内容

ごあいさつ

松林桂月展に寄せて 河北倫明(京都国立近代美術館長)

図版

松林桂月—その墨と色彩の妙— 菊屋吉生

年譜・資料・模本、小下絵・参考図版・作品カタログ

落款、印譜・関連作家略歴・文献目録 菊屋吉生

出品目録(邦文・英文)

●A4版 167ページ ●アート紙 110kg / 4色オフセット

32ページ モノクロ64ページ

●上質紙90kg / オフセット71ページ



## (4) 出品作品

番号	作品	作者	材質	形状	寸法(cm)	制作年	所蔵
1	桃花双鶺鴒図	松林桂月	絹本彩色	軸	133.0×50.2	明治28(1895)年	
2	怒濤健鷗図	〃	絹本彩色	軸	147.3×69.0	明治30(1897)年	
3	達磨図	〃	絹本淡彩	軸	128.8×65.6	明治32(1899)年	西来寺
4	秋塘真趣図	〃	絹本彩色	軸	188.0×112.0	明治40(1907)年	
5	松柏山水図	〃	絹本墨画	軸	158.0×70.4	明治40(1907)年	
6	山水図	〃	絹本彩色	軸双幅	各171.4×50.5	大正年間 (1911~1926)	防府毛利報公会
7	山樓銷夏図	〃	紙本墨画	軸	248.0×91.3	大正3(1914)年	萩市郷土博物館
8	秋景山水図屏風	〃	絹本淡彩	屏風6曲1双	各166.0×373.0	大正9(1920)年	目黒雅叙園
9	松林山水図屏風	〃	絹本彩色	屏風6曲1双	各168.5×362.4	大正11(1922)年	
10	群雁図屏風	〃	紙本淡彩	屏風6曲1双	各168.5×362.4	大正13(1924)年	
11	山水図屏風	〃	絹本淡彩	屏風6曲1双	各170.0×377.0	大正13(1924)年	
12	秋溪山雉図	〃	絹本彩色	軸	200.0×100.3	大正14(1925)年	防府毛利報公会
13	潭上餘春図	〃	絹本彩色	軸	251.3×84.0	昭和元(1926)年	宮内庁
14	威振八荒図	〃	絹本彩色	額	253.9×140.6	昭和2(1927)年	宇部ゴルフ観光棟
15	長門峡図	〃	紙本墨画	軸	289.9×131.8	昭和4(1929)年	東京国立博物館
16	千山暮色図	〃	紙本墨画	軸	209.0×97.2	昭和4(1929)年	高岡市立美術館
17	仙峡聽泉図	〃	紙本墨画	軸	221.9×61.4	昭和4(1929)年	山口県立美術館
18	鶺鴒図	〃	絹本彩色	軸	118.5×145.2	昭和8(1933)年	目黒雅叙園
19	喜鵲八哥図屏風	〃	絹本彩色	屏風6曲1双	各168.2×373.8	昭和8(1933)年	
20	十声詩意図巻	〃	紙本彩色	画卷	28.3×825.7	昭和9(1934)年	
21	山居図屏風	〃	紙本墨画	屏風6曲1双	各167.5×348.5	昭和10(1935)年	東京国立博物館
22	溪山春色図屏風	〃	裏金彩色	屏風6曲1双	各177.3×396.6	昭和10(1935)年	東京国立博物館
23	愛吾廬図	〃	絹本彩色	軸	243.8×127.8	昭和11(1936)年	山口県立美術館
24	秋園図屏風	〃	裏金彩色	屏風6曲1双	各168.0×367.2	昭和13(1938)年	宇部興産棟
25	春宵花影図	〃	絹本墨画	軸	119.3×134.5	昭和14(1939)年	東京国立近代美術館
26	晚秋図	〃	絹本彩色	軸	175.5×166.7	昭和16(1941)年	東京芸術大学
27	天保九如图	〃	絹本彩色	軸双幅	各161.5×50.8	昭和19(1944)年	
28	海の幸図	〃	絹本彩色	軸	57.9×70.6	昭和21(1946)年	
29	山の幸図	〃	絹本彩色	軸	57.9×70.6	昭和21(1946)年	
30	秋山閑居図	〃	紙本墨画	軸	161.5×52.5	昭和21(1946)年	
31	溪山閑居図	〃	紙本墨画	額	60.0×168.7	昭和22(1947)年	
32	春溪孤鶴図 秋汀孤雁図	〃	絹本彩色	軸双幅	各136.0×42.2	昭和22(1947)年	
33	白衣観音図	〃	絹本彩色	軸	137.8×41.5	昭和22(1947)年	
34	秋色図	〃	絹本彩色	軸	160.9×50.8	昭和22(1947)年	
35	蔬菜図	〃	絹本彩色	軸	45.0×51.5	昭和22(1947)年	
36	松泉図	〃	紙本墨画	軸	206.0×104.0	昭和22(1947)年	東京都美術館
37	長江遠望図	〃	絹本彩色	軸	135.6×42.5	昭和22(1947)年	
38	溪山幽趣図	〃	紙本墨画	軸	164.9×52.7	昭和23(1948)年	
39	王羲之愛鷺図	〃	絹本彩色	軸	133.0×41.5	昭和24(1949)年	
40	松菊猶存図	〃	絹本彩色	軸	69.0×86.0	昭和24(1949)年	
41	長門峡図	〃	紙本墨画	額	92.0×116.0	昭和26(1951)年	
42	香檳図	〃	絹本彩色	軸	49.0×57.0	昭和27(1952)年	東京都美術館
43	暗香浮動図	〃	紙本墨画	軸	68.8×86.0	昭和28(1953)年	
44	紅葉図	〃	絹本彩色	軸	68.0×86.0	昭和28(1953)年	
45	虎図	〃	絹本淡彩	軸	44.8×51.2	昭和30(1955)年	
46	雨後図	〃	絹本墨画	軸	113.5×140.5	昭和30(1955)年	

番号	作品	作者	材質	形状	寸法(cm)	制作年	所蔵
47	柳陰双鷺図	松林桂月	絹本彩色	軸	67.2×86.5	昭和25～30 (1950～1955)年	
48	竹林幽趣図	〃	紙本墨画	軸	169.0×92.0	昭和31(1956)年	
49	欧陽修秋声賦図	〃	絹本彩色	軸	69.2×86.1	昭和35(1960)年	栃木県立美術館
50	深林図	〃	紙本墨画	軸	160.5×94.5	昭和36(1961)年	東京国立近代美術館
51	富嶽図	〃	紺紙金泥	額	96.1×73.2	昭和36(1961)年	
52	白梅紅梅図屏風	〃	金地彩色	屏風2曲1双	各168.5×186.8	昭和37(1962)年	
53	夜雨図	〃	絹本墨画	額	90.0×112.0	昭和37(1962)年	
54	黄雀窺蜘蛛図	渡辺華山	絹本彩色	軸	39.8×55.8	天保12(1841)頃	出光美術館
55	花籠図	椿椿山	絹本彩色	軸	137.9×69.2		栃木県立美術館
56	翠竹群雀図	〃	絹本彩色	軸	110.6×44.7		
57	南天図	〃	絹本彩色	軸	152.1×68.3	天保13(1842)年	
58	蔬果図	〃	絹本彩色	軸	113.5×43.5	嘉永2(1849)年	
59	寒香之図	野口幽谷	絹本彩色	軸	48.0×55.5	明治3(1870)年	
60	菊花図	〃	絹本彩色	軸	200.6×75.4	明治15(1882)年	東京国立博物館
61	白衣観音図	〃	絹本彩色	軸	114.0×47.5	明治29(1896)年	
62	老樹幽禽図	〃	絹本彩色	軸	152.0×37.5	明治31(1898)年	
63	雁来紅朝顔図	松林雪貞	絹本彩色	軸	178.1×71.4	大正4(1915)年	山口県立美術館
64	牡丹図	〃	絹本彩色	軸双幅	各141.2×42.0	大正12(1923)年	
65	薔薇図	〃	絹本彩色	軸	168.2×70.5	昭和11(1936)年	
66	菊花図	〃	絹本彩色	額	69.0×86.0		
67	大皿(蘭図)				口径 35.7 高さ 6.9		
68	丸皿(ふぐ図)				口径 36.6 高さ 5.3		
69	茶碗(富嶽図)				口径 14.3 高さ 9.0		
70	火鉢(梅・竹その他)				口径 28.0 高さ 27.0		
71	馬上杯				口径 6.0 各高さ 7.5		
72	魚貝類写生図巻		紙本淡彩	画卷	17.8～36.3 ×29.7～78.2		山口県立美術館
	小下絵類						
	模本類						

## (5)展評など

### 新聞(報道記事をのぞく)

#### 展評

松林桂月展 墨と色彩の妙生かす 読売新聞(西部) / (秋) 58・10・26

多面的な作家だった 県立美術館の松林桂月展 読売新聞(県内) / (小林) 58・11・13

墨と色彩の心「松林桂月展」をみて 中国新聞 / (寺本) 58・11・14

点摘 初期から晩年までの作品70点集めて山口で松林桂月展 朝日新聞(西部) / (四ノ原) 58・11・12

#### エッセイ

随想 画業とその芸術 桂月展によせて 菊屋吉生 朝日新聞(県内) / 58・11・16

#### その他

消息 県美術館学芸員 菊屋吉生さん 読売(県内) / 58・11・20





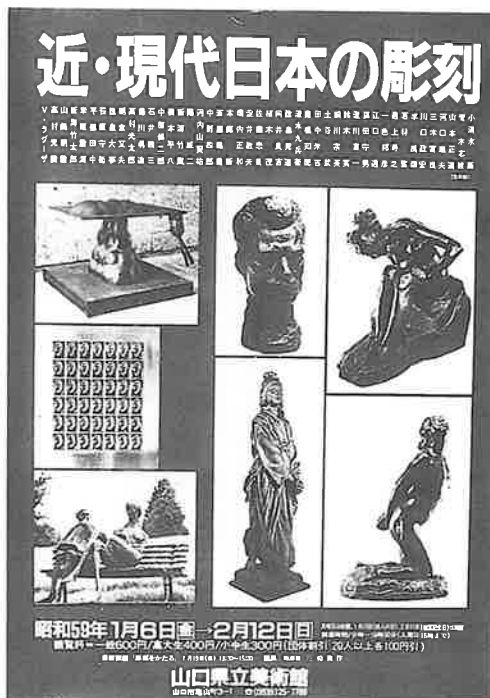
## 2. 近・現代日本の彫刻

1984(昭和59)年1月6日～2月12日

月曜日休館



主催＝山口県立美術館  
会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ  
常設展示室Ⅱ



### (1)趣旨

わが国に洋風彫刻が移植されたのは、明治9(1876)年、国内はじめての官設の美術教育機関として創設された工部美術学校においてだった。同校で教授にあたったのは、イタリアから招聘された彫刻家ヴィンチェンツォ・ラグーザで、彼によってはじめて粘土による塑像表現、鑄造技法、大理石の彫像技法などが伝えられた。このラグーザのもとからは20人の卒業生が出ている。これらの人びとが、わが国の近代彫刻史の第一歩を記した世代にあたりとっていい。そののち、近代彫刻は、互いに関連しあいながら並行する二つの線の上で展開していくことになる。一つは、ヨーロッパからもたらされたこの洋風彫刻の領域での展開、もう一つは、江戸と連続する伝統木彫の領域での展開である。出発が異なる以上この二つは解決すべき課題をそれぞれ異にしていたように考えられる。つまり、前者のテーマは、それまで知られていなかった異質な素材、発想法、あるいは形態のとらえ方といったものを、いかにわが国の風土になじませ、内発性をもつ独自の日本の彫刻表現に転化しうるかといった点に収束し、また後者では江戸からひきつがれた伝統木彫に、いかに近代(西洋)的要素を取り入れ、これを新時代に対応するものとして再生しうるかというテーマから出発したように考えられる。この洋風彫刻と伝統木彫の関係は、それらがとりくんだテーマの類縁性のうえからも、絵画の分野における洋画と日本画のそれに比定できる。実際、それらはよく似た様相をしめしながら、明治・大正・昭和へと展開してきたのである。

ところで、彫刻史にとって一大転機となったのは、今次大戦であろう。戦後彫刻は、なかば伝統と化した戦前の展開をふまえて再出発することになるが、さらに、戦前には知られなかった未知の空間や素材にたいする認識のひろがり、それに風土、現実、世界などにたいする新しい関係の仕方、作家の国際交流の活発化など、これまでにない諸傾向をバックにきわめて多様な展開をみせ、今日にいたっている。

今回の彫刻展では、こうしたわが国の近・現代彫刻の流れを、主にブロンズ、木、金属など単一素

材による約50点の作品で概観し、明治はじめの塑像造形から現代の立体造形までその展開のあとをたどることで、①近・現代彫刻の一面を展望するとともに、②三次元表現における日本の特質といったものを考えてみようとした。

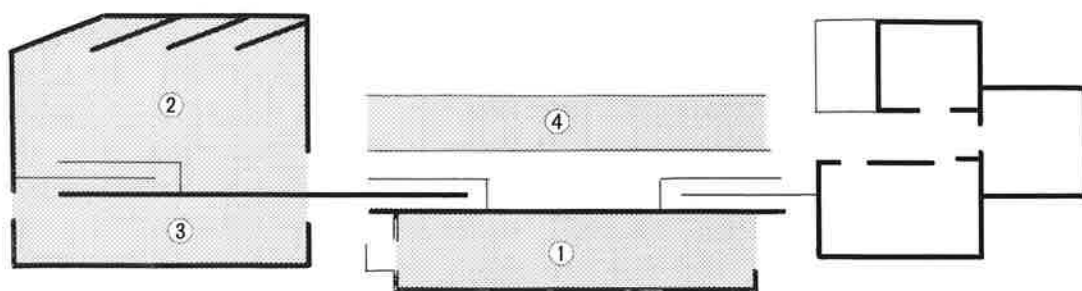
展示については、3つの展示室とロビーの計4ヶ所を使用し、それぞれの室に特色をつけた。工夫を加えたのは、導線で、これまで慣例となっていた企画展示室(I)一同(II)―常設展示室(III)の導線を逆転させ、常設展示室(III)を最初の会場にあてたことである。これは、スケールも形態も巨大・多様化した現代彫刻の展示に、展示室ではもっとも広くまた天井も高い企画展示室(I)をあてようと考えたため、このためロビーへの展示延長も可能となった。以下、会場について記録すると、会場Ⅰでは「明治期から大正・昭和初期までの彫刻」とタイトルし、この時期の、そのほとんどが誰れからも知られた名品とっていい具象作品を展示した。具体的には、ラギーザからはじまり朝倉文夫、建皇大夢などにつづく官展系具象表現の系、ロダンの影響から出発した荻原守衛、高村光太郎、中原悌二郎、などのグループをはじめ、二科会の藤川勇造などにつづく在野系の具象表現の系、それに高村光雲にはじまる伝統木彫の系。これには山崎朝雲、米原雲海に、日本美術院の平櫛田中、石井鶴三、新海竹蔵などがつづいた。このほか第1室の作家には、構造社で活躍した陽成二、日本美術院に出品した橋本平八など早逝したが異色の才能をしめした作家、また山口県出身あるいはゆかりの作家もふくまれている。つぎに会場Ⅱでは「戦後の彫刻①―抽象のはじまり / 具象の変容」と題し、本郷新、植木茂、豊福知徳の50年代の作品からはじめ、具象系では塑像の淀井敏夫、佐藤忠良、一色邦彦、細川宗英、木彫の鈴木実、また抽象系では堀内正和、篠田守男、若林奮、三木富雄の作品を展示した。以上諸氏の作品をとおして具象表現では、形態処理やタッチのうえで戦前とは大きく趣を異にした新しい傾向を、また抽象では、形態そのものの本格的な出現とともに、それが鉄、アルミなどの素材によって多様に展開しつつある様相を紹介した。最後に、会場Ⅲ（企画展示室(I)とロビー）では、「戦後の彫刻②―彫刻から立体造形へ」と題し、量塊としての彫刻と周囲の空間とを対立的にとらえるそれまでの彫刻観からはなれて、空間をとりこんだり、空間と親和しあう抽象造形のいくつかを展示するなどして形態、素材とも著しい多様化をしめす70年代から80年代の状況の一端を紹介した。展示されたのは、斎藤義重、向井良吉、建皇覚造、清水九兵衛、田中米吉、土谷武、澄川喜一、江口遇、川口政宏、最上寿之、李禹煥、河口龍夫、山本正道、菅木志雄、小清水漸、の諸氏の作品である。

ところで、以上のような代表的な現役あるいは物故作家の出品によって、近・現代の日本彫刻史を通観したとき、わが国の三次元表現の特色としてどのような点があげられるだろうか。

興味ぶかく、また示唆的だったのは、本展カタログに執筆依頼した3つの論文である。巻頭の三木論文は、明治いらいのわが国の彫刻史を概観するという趣旨①に対応するもので、近・現代彫刻の通史的記述である。この論文は、出品作品の時代的背景をたどるのに絶好の懇切で専門的なガイダンスとなった。彫刻史のながれをふまえて、そこに何か一貫した特質をさぐるという趣旨②に対応するのは、これにつづく中原、杉本論文である。このうち杉本論文は、わが国における詩の表現の歴史的推移と彫刻表現のそれとをとりあげ、そのあいだに構造的アナロジーが成立するとして、表現一般において近代と現代を区別する根拠を論じている。要約すると、詩では高村光太郎と現代詩の入沢康夫、彫刻では高村光太郎と李禹煥をとりあげ、その比較から、一方の高村光太郎と他方の入沢、李とのあいだには、表現の契機として自然にたいする実体信仰のソウ失という決定的な変化がみられ、それにはソシュールによって明らかにされた言語の恣意性、あるいは自然との無縁性への認識がふかく関わっていること。この認識にたいする反応が、現代詩と現代彫刻にそれぞれ共通したあるいは似通った発想をあたえている。といった指摘がなされている。この指摘は、日本にかぎらず、汎世界的傾向のものとして世界の現代美術にも通用するものといえ、またこれからの表現傾向の展開を考えるうえでも興味ぶかい示唆を与えてくれた。ところで、杉本論文がわが国の彫刻表現を、いわば共時的普遍的側面から論じているのにたいし、これを通時的個別的側面から論じているのが中原論文である。中原論文は、

わが国の近・現代彫刻に通じるものとして「親ディテールの特性」をあげ、これをさまざまな側面から明らかにしている。たとえば、形態そのものよりも、形態の表面といった細部へのこだわりが先行するという点では、明治期の彫刻も現代の抽象彫刻もそれほどはなはだしい相違はないという。この「親ディテールの特性」は、当然とくに素材についていえ、細部への技巧の関心をさまたげる石よりも、これを助長してくれる木への偏愛、戦後あらわれた鉄、真鍮、ステンレスあるいは木、合板などさまざまな新しい素材を利用しながらも、それらを作品をつくりだす単なる物質的手段としてではなく、たとえば生地を生かすといった具合に、素材そのものを作品にとって形態と同様にきわめて本質的要素とみなす傾向をあげ、これらを近・現代彫刻に一貫した特質として指摘している。この指摘は、近・現代彫刻にも、伝統的日本人の美意識が生きつづけていることを示唆するもので、それはこの親ディテールの傾向について、「あるいは、それは形態というものは不動の絶対的なものではないという(日本人の)意識にもとづいているものかもしれないと思う」という論者の末尾の文章からもうかがえる。

## (2) 会場構成



- ①会場Ⅰ ▶明治期から大正、昭和初期までの彫刻
- ②会場Ⅱ ▶戦後の彫刻①—抽象のはじまり・具象の変容
- ③～④会場Ⅲ ▶戦後の彫刻②—彫刻から立体造形へ

## (3) カタログ

責任編集 安井雄一郎

内容

ごあいさつ

謝 辞

日本近・現代彫刻の史的展望 三木多聞(美術評論家・文化庁  
企画官)

日本の彫刻の特質について 中原佑介(美術評論家)

現代彫刻と詩における反自然性 一高村光太郎から李禹煥へ—  
杉本春生(詩人・文芸評論家)

近・現代  
日本の彫刻

山口の彫刻家 安井雄一郎

English Summary / A General Historical View of Sculpture in Modern Japan ( Miki Tamon ), Characteristics of Modern Japanese Sculpture ( Nakahara Yūsuke. ), Anti-naturalism in Poetry and Sculpture—From Takamura Kōtarō to Lee U-Fan—( Sugimoto Haruo), Sculptors of Yamaguchi—Ken—1867 to the Present — (Yasui Yūichirō), translated by Alexander Bruce.

図版

作家カタログ 安井雄一郎

出品目録 安井雄一郎

●A 4版 128ページ ●アート紙 110kg / 4色オフセット・48ページ

●上質紙90kg / 文字活字80ページ

#### (4)出品作品

番号	作品	作者	制作年	規格(cm)	材質	所蔵
1	日本の俳優	ヴァンチェンツォ・ラグーザ	c1880 明治13年ごろ	75.5 (高)	ブロンズ	東京芸術大学
2	老猿	高村 光雲	1893 明治26年	110 (高)	木	東京国立博物館
3	坑夫	萩原 守衛	1907 明治40年	47 (高)	ブロンズ	福岡市美術館
4	大葉子	山崎 朝雲	1908 明治41年	105 (高)	木	東京国立近代美術館
5	藝守	朝倉 文夫	1910 明治43年	176 (高)	ブロンズ	福岡市美術館
6	女	萩原 守衛	1910 明治43年	99 (高)	ブロンズ	東京芸術大学
7	ながれ	建畠 大夢	1911 明治44年	90 (高)	ブロンズ	東京国立近代美術館
8	旅人	米原 雲海	1914 大正3年	49 (高)	木	東京国立博物館
9	裸婦坐像	高村光太郎	1917 大正6年	28 (高)	ブロンズ	神奈川県立近代美術館
10	手	高村光太郎	1918 大正7年	42.3 (高)	ブロンズ	
11	若きカフカス人	中原悌二郎	1919 大正8年	42.5 (高)	ブロンズ	福岡市美術館
12	裸婦立像	中野 四郎	1928 昭和3年	169 (高)	木	埼玉県立近代美術館
13	ある休職軍人の顔	陽 咸二	1929 昭和4年	44.2 (高)	ブロンズ	東京国立近代美術館
14	花園に遊ぶ天女	橋本 平八	1930 昭和5年	121.7 (高)	木	東京芸術大学
15	裸婦坐像	藤川 勇造	1934 昭和9年	39 (高)	ブロンズ	神奈川県立近代美術館
16	鏡獅子試作裸像	平櫛 田中	1938 昭和13年	106.1 (高)	木・彩色	東京芸術大学
17	砧	新海 竹蔵	1939 昭和14年	83.5 (高)	木	東京国立近代美術館
18	島崎藤村像	石井 鶴三	1951 昭和26年	45 (高)	木	東京芸術大学
19	立像C	河内山賢祐	1952 昭和27年	170.5 (高)	ブロンズ	山口県立美術館
20	トルソ	植木 茂	1956 昭和31年	152.3×59×31.6	木 (シオジ)	
21	漂流'58	豊福 知徳	1958 昭和33年	221×71×288	木	北九州市立美術館 寄託
22	哭	本郷 新	1959 昭和34年	133 (高)	木	彫刻の森美術館
23	犬から出る水蒸気	若林 奮	1968 昭和43年	74×92×90	鉄	神奈川県立近代美術館
24	円筒をななめに通り抜けるもう一つの円筒	堀内 正和	1970 昭和45年	153.5×35.7×35.7	ブロンズ・石	神奈川県立近代美術館
25	24の部分からなる円筒体	河口 龍夫	1972 昭和47年	12×12×12	鉛	
26	耳 WA 32	三木 富雄	1972 昭和47年	72×60×3	アルミニウム	原美術館
27	帽子・夏	佐藤 忠良	1972 昭和47年	106.5 (高)	ブロンズ	

番号	作品	作者	制作年	規格(cm)	材質	所蔵
28	道元	細川 宗英	1972 昭和47年	1774. (高)	F. R. P.	
29	12の部分からなる円錐体	河口 龍夫	1974 昭和49年	16×15×15	鉛	
30	テンションとコンプレッション 4415	篠田 守男	1975 昭和50年	38×67.5×67.5	アルミニウム・真鍮・ステンレススチール	南天子画廊
31	ドッキング No.29	田中 米吉	1976 昭和51年	59×100×150	アルミ合金・鉄	北九州市立美術館
32	アフィニティの継続	清水九兵衛	1976 昭和51年	55~260 (高)	アルミ合金	彫刻の森美術館
33	ランララチンチンオトコノコ	最上 寿之	1976 昭和51年	165×137×59	木 (合板)	
34	無題	河口 龍夫	1977 昭和52年	189×4.5×12.3	鉛	
35	ローマの公園	澁井 敏夫	1977 昭和52年	120 (高)	ブロンズ	
36	風	土谷 武	1977 昭和52年	280×270×130	鉄	京都国立近代美術館
37	古代への夢	山本 正道	1977 昭和52年	35×270.2×84.5	ブロンズ	
38	11の部分からなるマスタバ	河口 龍夫	1977 昭和52年	11.5×16×9.8	鉛	
39	作品F シリーズ	川口 政宏	1978 昭和53年	152×154.3×154.3	ステンレススチール・真鍮・鉄・モーター	
40	16の部分からなる楕円	河口 龍夫	1978 昭和53年	15×18.5×15.5	鉛	
41	反対称、正四面体 プラトンの多面体	斎藤 義重	1978 昭和53年	155 (各辺) 128 (高)	木 (合板)	東京国立近代美術館
42	作業台一桐の枝一	小清水 漸	1979 昭和54年	160×120×90	木	
43	アンダーグラウンド2	建畠 覚造	1979 昭和54年	40×90×90	木 (合板)	福岡市美術館
44	アンダーグラウンド3	建畠 覚造	1979 昭和54年	40×90×90	木 (合板)	福岡市美術館
45	そりのあるかたち 9-27	澄川 喜一	1979 昭和54年	153×365×22.6	木・鉄	山口県立美術館
46	ヴァイオリン・チェロ	向井 良吉	1979 昭和54年	82×140×58	真鍮・鉄	国立国際美術館
47	花かんざし	一色 邦彦	1979 昭和54年	136×85×54	ブロンズ	
48	作品H シリーズ	川口 政宏	1980 昭和55年	123×101×70	ステンレススチール・真鍮・鉄・モーター	
49	家族の肖像	鈴木 実	1981 昭和56年	196~180.5(高)	木 (ラワン)	
50	飛翔のはじまり	江口 週	1981 昭和56年	203×57×53	木 (クス)	
51	界の仕切り	菅 木志雄	1982 昭和57年	179×665×179	木 (サワラ)	東京都美術館
52	関係項一 3個の石と3枚の鉄板の関係	李 禹煥	1982 昭和57年	25×430×137.5	鉄・石	
53	作業台一曲水一	小清水 漸	1983 昭和58年	70×120×120	木・水	

## (5)展評など

新聞 (報道記事をのぞく)

### 展評

美術・文物展相つぐ九州・山口 地方独自の企画も 読売新聞 (西部) / 58・1・6

明治から現代まで一6日から県立美術館で彫刻展 中国新聞 / 58・1・4

巨匠の彫刻目の前に一2つの彫刻展 読売新聞 (県内) / 58・1・22

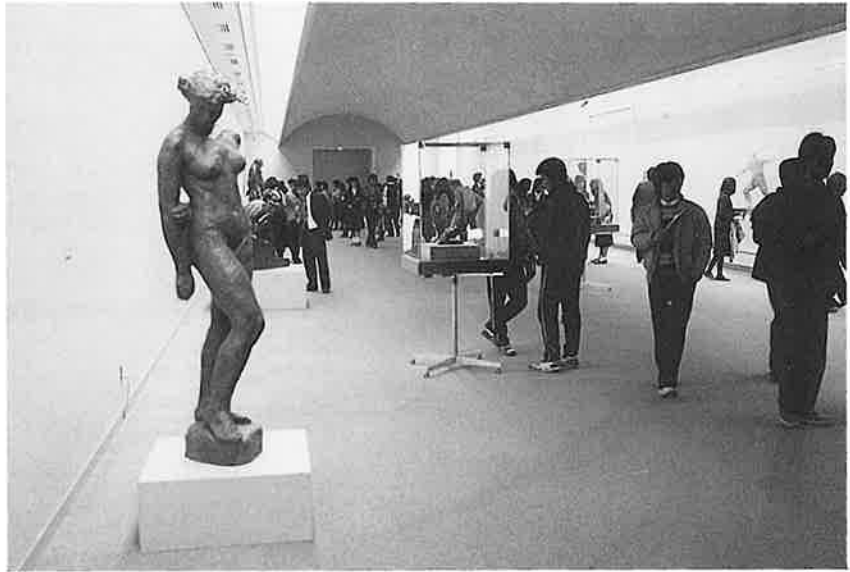
シリーズ

彫刻の魅力 西日本新聞（県内）

1. アルミを素材に一「ドッキングNo.29」田中米吉（58・1・18）
2. その背に何の重み一「女」荻原守衛（58・1・19）
3. 量塊としての力強さ一「老猿」高村光雲（58・1・20）
4. その手は何を語るか一「手」高村光太郎（58・1・21）
5. 時間という要素が一「花園に遊ぶ天女」橋本平八（58・1・22）
6. 戦後の混とんから一「トルソ」植木 茂（58・1・24）
7. 食べ飽きぬ茶漬けの味一「帽子・夏」佐藤忠良（58・1・25）
8. 多くの耳と謎を残して…「耳WA 32」三木富雄（58・1・26）
9. 野外に出た具象彫刻「ローマの公園」淀井敏夫（58・1・27）
10. 自然に触れたときの安らぎ「作品F シリーズ」川口政宏（58・1・28）

エッセイ

現代彫刻の在り方一二つの彫刻展から一川口政宏 西日本新聞 / 58・2・8



### 3. 雲谷等顔と桃山時代

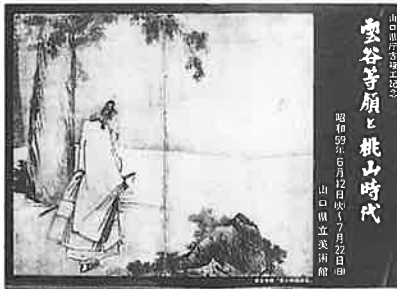
1984(昭59)年6月12日～7月22日

月曜日休館

主催＝山口県立美術館

会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ

常設展示室Ⅱ



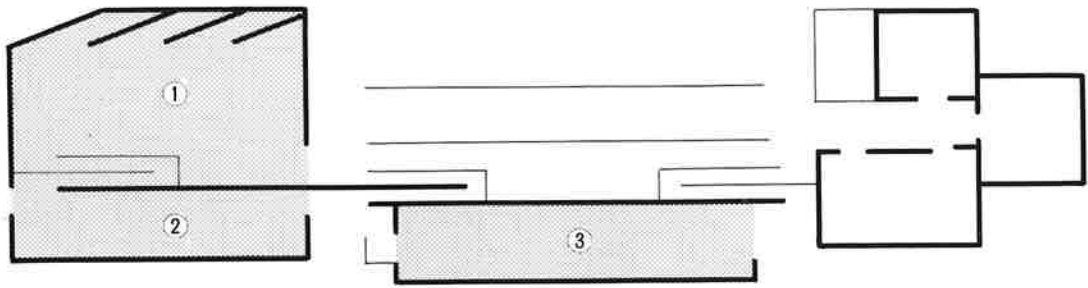
#### (1)趣旨

仏画が栄えた時代、絵巻物が流行した時代、詩画軸が愛好された時代など、それぞれの時代にその趣向にあった絵画形式や主題が主役をつとめることがある。そのような意味からすると、桃山時代は、まさに障屏画の黄金時代であったといえよう。この時代には、織田信長・豊臣秀吉の天下統一の気運を反映して、「絢爛豪華」というにふさわしい障屏画の名品が壮大な城郭や寺院に数多く制作された。その中心的役割を演じたのが、永徳をはじめとする狩野派であり、また狩野派の流派体制を学び、別に新たな流派を組織した長谷川等伯、海北友松、曾我直庵、雲谷等顔ら漢画系の画人たちであった。かれらは、互いに影響しあいながら、桃山画壇にあってめざましい活躍を示した。

本展覧会は、そのひとり雲谷等顔に焦点をあて、かれの画業の展開を、代表作や新出作品および文献資料等によってとらえてみようという試みであった。そして、ただ等顔の作品だけでなく、永徳や等伯ら同時代画人の作品をあわせて展示することによって、等顔画と他の桃山絵画とを比較検討する機会をもちたいというねらいがあった。そのために等顔作品は、いわば時代の主役であった障屏画面を中心に選択し、他に等顔画の画域を知るために画卷や掛幅など数点を加えた。また同時代画人の作品は、花鳥画、人物画、風俗画など、等顔画と比較しやすいように画題的に関連性のあるものを選んだ。以上が本展の基本構成である。展示にあたっては、次のねらいのもとに会場を構成した。まず第一企画展示室では、桃山絵画(画壇)に共通した特色と等顔画の独自性をみるために、等顔作品と同時代画人の作品を花鳥画、人物画、風俗画など画題別に展示した。次に、第二企画展示室では、等顔作品の大半を占める一連の山水図屏風によって等顔画の様式編年を試みた。第二常設展示室では、等顔画の拡がりを見るために、人物図、群馬図の他、達磨図などの小品を展示し、また等顔の後継者等益の作品もならべることによって等顔画との時代的差異をみた。



## (2) 会場構成



①会場Ⅰ ▶ 桃山時代の障屏画と等顔作品 ②会場Ⅱ ▶ 等顔様式の展開 ③会場Ⅲ ▶ 等顔画の拡がり

## (3) カタログ

責任編集 山本英男

内容

ごあいさつ

カラー図版

モノクロ図版

桃山画壇と雲谷等顔 武田恒夫(大阪大学教授)

雲谷等顔伝 影山純夫(山口大学講師)

等顔様の展開についての一考察 山本英男

年譜 菊屋吉生

資料

落款・印章

文献目録

出品目録

● A 4版 200ページ ● アート紙 110kg / 4色オフセット24ページ 2色オフセット 124ページ

● 上質紙90kg / オフセット52ページ



## (4) 出品作品

◎は国宝 ○は重要文化財 ○は重要美術品を示す

番号	作品	作者	材質	形状	寸法(cm)	所蔵
1	山水図	雲谷等顔	紙本淡彩	6曲屏風1双	各146.8×346.0	
2	竹林七賢図	〃	紙本淡彩	6曲屏風1双	各156.1×365.4	永青文庫
◎ 3	竹林七賢・山水図	〃	紙本墨画	襖全16面のうち4面 襖全14面のうち4面	各179.6×141.5	大徳寺黄梅院
4	山水図	〃	紙本淡彩	6曲屏風1隻	149.9×357.6	山口県立山口博物館
◎ 5	山水図	〃	紙本淡彩	6曲屏風1双	各151.5×359.6	
6	山水人物図	〃	紙本淡彩	6曲屏風1双	各152.6×343.6	東京国立博物館

番号	作品	作者	材質	形状	寸法(cm)	所蔵
◎7	帰去来・唐人物図	雲谷等顔	紙本淡彩	襖全8面のうち4面 襖全8面のうち4面	各179.4×93.0	東福寺善門院
8	山水人物図	〃	紙本淡彩金泥引	6曲屏風1双	各147.5×312.0	
9	群馬図	〃	紙本淡彩金泥引	6曲屏風1双	各149.5×360.0	京都国立博物館
10	群馬図	〃	紙本淡彩	6曲屏風1双	各146.0×335.8	菊屋家住宅保存会
11	山水図	〃	紙本淡彩	6曲屏風1双	各153.7×357.0	熊谷美術館
12	西湖図	〃	紙本淡彩金泥引	6曲屏風1双	各152.5×349.6	金沢市立中村記念美術館
○13	山水図	〃	紙本淡彩	6曲屏風1双	各157.6×355.2	京都国立博物館
14	唐人物図	〃	紙本淡彩	2曲屏風1隻	146.6×172.4	
15	騎驢人物図	〃	紙本淡彩金泥引	6曲屏風1双	各155.1×358.6	
16	群馬図	〃	紙本淡彩	6曲屏風1双	各153.5×354.0	
◎17	花見・鷹狩図	〃	紙本着色金泥引	6曲屏風1双	各142.0×347.0	MOA美術館
◎18	梅に鴉図	〃	紙本金地着色	襖全6面のうち4面	各166.5×156.5	京都国立博物館
◎19	春夏山水図	〃	紙本金地着色	6曲屏風1双	各152.8×354.4	
◎20	四季山水図巻模写	〃	紙本淡彩	画卷	39.1×165.0	防府毛利報公会
21	山水図	〃	紙本墨画	画卷	25.0×281.6	
22	達磨図	〃	紙本着色	軸	98.1×42.9	徳隣寺
23	達磨図	〃	紙本墨画	軸	102.5×41.6	
24	達磨図	〃	紙本墨画	軸	99.0×49.0	大徳寺三玄院
25	天神図	〃	紙本淡彩	軸	105.5×51.2	防府天満宮
26	蛭子和尚・山水図	〃	紙本墨画	軸3幅対	各115.0×48.1	十念寺
27	五位鷺図	〃	紙本墨画	軸	53.0×28.9	山口県立美術館
◎28	四季花鳥図	狩野永徳	紙本墨画金泥引	襖全16面のうち4面	各175.5×142.5	大徳寺聚光院
29	四季花鳥図	狩野松栄	紙本着色金泥引	6曲屏風1双	各144.3×351.4	山口県立美術館
30	牧馬図	長谷川等伯	紙本着色	6曲屏風1双	各156.5×343.5	東京国立博物館
◎31	花鳥図	〃	紙本着色	6曲屏風1隻	149.5×360.0	妙覚寺
32	陶淵明愛菊図	〃	紙本墨画	2曲屏風1隻	165.4×180.0	
◎33	波濤図	〃	紙本金地墨画	軸全12幅のうち4幅	各185.0×140.5	禪林寺
◎34	松竹梅図	海北友松	紙本墨画金泥引	襖全12面のうち8面	各173.0×117.5	建仁寺禅居庵
◎35	飲中八仙図	〃	紙本墨画	6曲屏風1隻	148.0×358.0	京都国立博物館
36	松柏に鷹図	曾我直庵	紙本金地墨画	8曲屏風1双	各153.5×369.8	
37	琴棋書画図	雲谷等益	紙本着色金砂子	6曲屏風1双	各161.4×362.4	熊谷美術館
38	瀟湘八景図	〃	紙本墨画金泥引	6曲屏風1双	各149.5×350.0	北野天満宮

[資料]

1	雲舟筆「四季山水図」に関する跋文	卷子	防府毛利報公会
2	関関録 雲谷等鶴	冊子	山口県文書館
3	講録 原治兵衛直儀家講録 雲谷等徴家講録	冊子	山口県文書館
4	分限帳 八箇国時代分限帳 慶長十年頃一組切分限帳 慶長末年元和三年分限帳	冊子	山口県文書館
5	毛利氏四代実録考証論断 慶長十二年	冊子	山口県文書館
6	慶長十四年霜月十八日御連歌写	冊子	山口県文書館

## (5)展評など

### 新聞（報道記事をのぞく）

#### 展評

前例がない質と量 山口市で雲谷等顔と桃山時代展 朝日新聞（西部） / （源）59・6・16

進取の感覚キラリ 「雲谷等顔と桃山時代」展 読売新聞（西部） / （秋）59・6・18

「雲谷等顔と桃山時代」をみて 中国新聞 / （寺本）59・7・3

ナゾの絵師の芸業たどる 雲谷等顔と桃山時代展 毎日新聞（西部） / （三田）59・7・12

#### シリーズ

桃山の巨匠たち 西日本新聞（県内）

〈1〉「四季花鳥図」狩野永徳（59・6・23） 〈2〉「波濤図」長谷川等伯（6・24） 〈3〉「飲中八仙図」海北友松（6・26） 〈4〉「松柏に鷹図」曾我直庵（6・27） 〈5〉「花見・鷹狩図」雲谷等顔（6・28） 〈6〉「四季山水図巻模写」雲谷等顔（6・29） 〈7〉「山水図」雲谷等顔（6・30） 〈8〉「梅に鴉図」雲谷等顔（7・3） 〈9〉「竹林七賢図」雲谷等顔（7・5） 〈10〉「琴棋書画図」雲谷等益（7・6）

#### エッセイ

「雲谷等顔と桃山時代」展に寄せて 山本英男 西日本新聞 / 59・6・26

日本画の印章 「雲谷等顔と桃山時代」によせて 山本英男 中国新聞 / 59・7・15

防長評論 加藤良臣 毎日新聞（県内） / 59・7・16

#### 美術雑誌

雪舟の陰から現われた雲谷等顔 豊福知徳 芸術新潮 / 59・8



## 4. 小林和作・須田国太郎

1985(昭和60)年1月5日～2月10日

月曜日休館



主催＝山口県立美術館  
会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ  
常設展示室Ⅱ



### (1)趣旨

奔放な筆致と豊麗な色彩によって、四季おりおりの変化に富んだ日本の自然を描き続けた小林和作の世界は、私たちの日常的な喜びや驚きを基底に据えたものであるといえ、またその表現的特質は、「南画的フォーヴ」とも呼ばれるように、油彩による日本的感性の表出にあると考えられる。京都市立美術工芸学校および絵画専門学校で日本画を学び、文展に入選した実績をもちながら、30歳を過ぎてから洋画に転向。やがて春陽会会員となり、ヨーロッパ体験をふまえたのち、独立美術協会へ移った小林和作。そしてまず、その昭和10年代という時期が画家の画業を画する重要な時期であるのは、東京から尾道に移り住むことになったという画家の個人的な事情もさることながら、西洋画を取り入れた明治期以来何回か繰り返されてきた洋画の日本化傾向の潮流とのかかわりにおいてである。とはいえ、小林和作は積極的にそのような動向とかがかかわっていたのではなかった。長く日本画を学び、かつてその形式ばった表現に飽きたらず、また逆に洋画においては、セザンヌに私淑しながらもその徹底した客観主義には絶望にも等しい隔りを覚え、結局自らの周辺に徹するしかないと考えようになったことが、必然的にそのような道をたどらせたのであった。

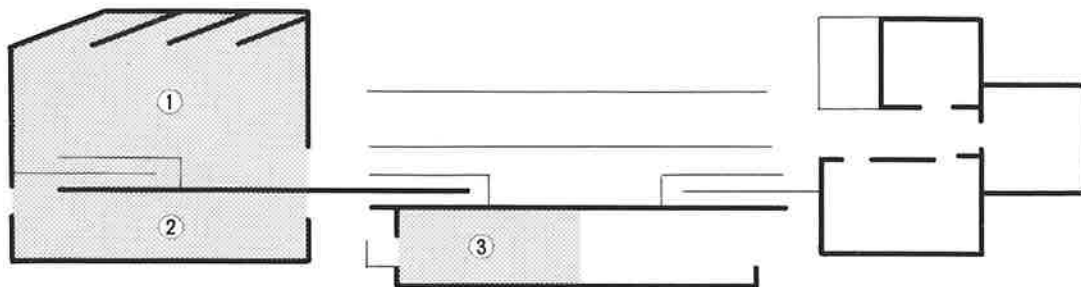
ところで、同じ年に独立美術協会の会員となった須田国太郎は、京都帝大で美学美術史を学び、のちヨーロッパに留学してバロック芸術を中心に研究を重ねながら、自らもその技術研究を実作に生かすべく地道な活動を展開していた画家であった。須田も、まったく別な角度からではあったが、これまでの画壇の「切り花」的な体質を排さなければならないと考え、独自のスタイルによって日本の現実を見据えようとしていたので、このことが、ある意味ではまったく対照的ともいえる小林と須田とを結びつける太い絆となりえたのかも知れない。

それにしても、両者の画家としての歩みは際立っている。手早い筆致で色彩を重ねることによって、対象と一体になった感覚的表現を達成していった小林は、昭和30年代の最も充実した作品群に向けてきわめてゆっくりと変化していったのに対し、昭和20年代後半にやや象徴的な色彩を使って微妙な変

化を見せた須田は、ほとんど一貫して対象の存在性に深くかかわった表現を追求したからである。

本展は、このふたりの画家の活動を回顧するとともに、まったく異なって表われたかに見える両者の表現の基軸を考察するものである。

## (2) 会場構成



①小林・須田 戦前期 ② 同 戦後期 ③ 同 晩年期

## (3) カタログ

責任編集 高田美規雄

内容

ごあいさつ

小林和作と須田国太郎 河北倫明(京都国立近代美術館長)

図版(カラー・モノクロ)

須田国太郎の東洋的水墨画的の精神とその展開 原田平作

(京都市美術館学芸課長)

小林和作について 高田美規雄

年譜 菊屋吉生・高田美規雄

参考図版・資料・文献目録 高田美規雄

出品目録

●A 4版 168ページ ●アート紙 110kg / 4色オフセット24ページ モノクロ72ページ

●上質紙 110kg / オフセット72ページ



## (4) 出品作品

番号	作品	作者	制作年	技法・材質	寸法(cm)	所蔵
1	山の池	小林 和作	1925	油彩・麻布	41.0× 53.1	
2	上高地3	〃	1926	油彩・麻布	48.5× 71.3	山口県立美術館
3	アマルフィ風景	〃	1928	油彩・麻布	60.0× 71.6	東京国立近代美術館
4	アルルカンに扮するコーカサス人	〃	1928	油彩・麻布	69.8× 49.8	
5	人形を持つ娘	〃	1928	油彩・麻布	88.2× 58.0	東京国立近代美術館
6	画室にて	〃	1928	油彩・麻布	116.7× 90.9	

番号	作 品	作 者	制作年	技法・材質	寸法(cm)	所 蔵
7	カプリ島	小林 和作	1928	油彩・麻布	60.0×72.5	
8	カプリ島 2	〃	1928	油彩・麻布	55.5×66.5	
9	カプリ島 3	〃	1928	油彩・麻布	63.3×72.5	尾道市立美術館
10	薔薇咲くカプリ島	〃	1928	油彩・麻布	61.0×72.5	愛知県文化会館美術館
11	エクス風景 1	〃	1929	油彩・麻布	54.0×80.6	
12	エクス風景 2	〃	1929	油彩・麻布	60.2×72.7	山口県立美術館
13	秋郊(京都)	〃	1929	油彩・麻布	60.6×72.7	
14	果 樹 園	〃	1931	油彩・麻布	61.3×73.0	
15	洋 梨 の 畑	〃	1931	油彩・麻布	53.6×72.9	
16	秋郊(松永)	〃	1934	油彩・麻布	42.3×73.4	尾道市立美術館
17	梅	〃	1935	油彩・麻布	60.5×72.7	尾道市立美術館
18	日 照 雨	〃	1935	油彩・麻布	64.2×116.7	尾道市立美術館
19	通 り 雨	〃	1935	油彩・麻布	66.4×194.4	愛知県文化会館美術館
20	尾 道 風 景	〃	C.1935	油彩・麻布	30.3×71.8	
21	潮 流	〃	C.1935	油彩・麻布	45.6×53.4	
22	東尋坊風景	〃	1937	油彩・麻布	50.0×72.6	
23	備後山野峡の秋	〃	C.1937	油彩・麻布	52.3×99.8	
24	春と小鳥台	〃	C.1940	油彩・麻布	53.0×45.5	
25	春	〃	C.1940	油彩・板	29.3×38.3	
26	春	〃	C.1940	油彩・麻布	31.0×72.8	
27	伯耆大山の秋	〃	C.1942	油彩・麻布	33.8×61.2	
28	干 潮	〃	C.1942	油彩・麻布	51.2×99.6	
29	秋 山 雲 烟	〃	C.1942	油彩・麻布	51.5×100.0	
30	漁 村 の 夕	〃	C.1942	油彩・麻布	51.5×100.5	
31	海	〃	1943	油彩・麻布	61.0×73.0	
32	鳩	〃	1943	油彩・麻布	90.8×116.6	京都国立近代美術館
33	啄 木 鳥	〃	1944	油彩・麻布	72.4×60.2	
34	夕暮れの海	〃	C.1944	油彩・麻布	60.6×72.8	
35	荒 海	〃	C.1950	油彩・麻布	51.2×99.9	
36	ゆ く 春	〃	1951	油彩・麻布	50.5×99.0	東京国立近代美術館
37	春 の 山	〃	C.1951	油彩・麻布	52.0×100.5	
38	春 郊	〃	C.1951	油彩・麻布	51.5×100.0	尾道市立美術館
39	荒海(秋穂)	〃	C.1952	油彩・麻布	51.5×100.0	広島県庁
40	海	〃	C.1952	油彩・麻布	51.5×100.0	
41	海	〃	C.1952	油彩・麻布	52.0×100.0	広島県立美術館
42	海 辺 の 丘	〃	1953	油彩・麻布	51.3×100.0	
43	高 原	〃	1953	油彩・麻布	52.0×100.0	
44	初 冬 の 山	〃	C.1953	油彩・麻布	52.0×100.0	
45	磐梯山秋元湖の秋	〃	C.1953	油彩・麻布	52.0×100.0	
46	みずたまりと海	〃	1954	油彩・麻布	52.0×100.5	
47	秋 山	〃	1954	油彩・麻布	80.3×100.0	
48	海	〃	C.1954	油彩・麻布	112.0×163.5	広島県庁
49	英彦山中	〃	C.1954	油彩・麻布	52.0×100.0	
50	山 湖	〃	1955	油彩・麻布	80.5×100.0	
51	通 り 雨	〃	1955	油彩・麻布	80.2×100.0	
52	秋 山	〃	C.1955	油彩・麻布	80.5×100.2	
53	秋 晴	〃	1957	油彩・麻布	80.7×100.4	山口県立美術館

番号	作 品	作 者	制作年	技法・材質	寸法(cm)	所 蔵
54	上高地明神池附近	小林 和作	1957	油彩・麻布	80.7×100.5	
55	白馬山下の春	〃	1957	油彩・麻布	51.8×100.0	尾道市立美術館
56	高 原	〃	1958	油彩・麻布	80.5×100.7	
57	海 (紀州)	〃	1959	油彩・麻布	80.5×100.0	
58	秋 山	〃	1961	油彩・麻布	80.5×100.0	岡山県総合文化センター
59	海	〃	1961	油彩・麻布	80.8×100.0	山口県立美術館
60	早春の山	〃	1962	油彩・麻布	80.5× 99.6	
61	秋山雨後	〃	1963	油彩・麻布	80.7× 99.6	
62	海	〃	1964	油彩・麻布	80.3×100.3	山口県立美術館
63	風 濤	〃	1965	油彩・麻布	80.4× 99.6	
64	秋の山湖	〃	1965	油彩・麻布	80.7×100.4	愛知県文化会館美術館
65	北国の春	〃	1966	油彩・麻布	80.5×100.0	東京国立近代美術館
66	海 辺	〃	1967	油彩・麻布	80.5×100.0	
67	春 の 山	〃	1967	油彩・麻布	80.0×100.0	広島県立美術館
68	伯耆大山の秋	〃	C.1967	油彩・麻布	52.0×100.0	広島県立美術館
69	紀州の海	〃	C.1967	油彩・麻布	80.3×100.0	広島県立美術館
70	溪 流	〃	1968	油彩・麻布	80.5×100.0	
71	隠岐白島	〃	1968	油彩・麻布	80.0×100.0	広島県立美術館
72	木曾御嶽の春	〃	1969	油彩・麻布	80.2×100.0	山口 県 庁
73	越中の山の春	〃	1969	油彩・麻布	80.5×100.0	岡山県総合文化センター
74	白馬山下の春	〃	C.1969	油彩・麻布	72.7×100.0	広島県立美術館
75	木曾御嶽の秋	〃	C.1969	油彩・麻布	80.5×100.0	
76	海	〃	1973	油彩・麻布	80.7×100.4	
77	春 の 海	〃	1974	油彩・麻布	80.7×100.3	山口県立美術館
78	トマール全景	須田国太郎	1920	油彩・麻布	60.6× 91.0	
79	ルイザ・バルバラ	〃	1922	油彩・麻布	82.0× 65.5	
80	発 掘	〃	1930	油彩・麻布	110.0×191.5	京大文学部人文科学研究科
81	グレコ・イベリアの首	〃	1931	油彩・麻布	53.0× 72.5	
82	花山天文台遠望	〃	1931	油彩・麻布	64.5× 90.5	
83	蔬 菜	〃	1932	油彩・麻布	61.5× 81.0	東京国立近代美術館
84	夏日農村	〃	1932	油彩・麻布	64.5× 90.0	
85	城南の春	〃	1933	油彩・麻布	60.0× 90.5	京都国立近代美術館
86	夏 の 朝	〃	1933	油彩・麻布	60.5× 91.0	東京国立近代美術館
87	夏の午後	〃	1933	油彩・麻布	62.5× 88.0	中野美術館
88	夜の清水	〃	1933	油彩・麻布	90.5×116.0	
89	早 春	〃	1934	油彩・麻布	165.0×230.0	京都市美術館
90	雨後 (水間村)	〃	1935	油彩・麻布	65.2× 80.3	
91	三輪の山なみ	〃	C.1935 ~61	油彩・麻布	60.5× 80.0	京都市美術館
92	工場地帯	〃	1936	油彩・麻布	127.0×210.0	兵庫県立近代美術館
93	村	〃	1937	油彩・麻布	94.0×128.0	京都市美術館
94	冬の漁村	〃	1937	油彩・麻布	48.5× 59.7	
95	筆石村	〃	1937 ~40	油彩・麻布	60.0× 80.0	
96	水 田	〃	1938	油彩・麻布	112.0×162.0	
97	修 理 師	〃	1938	油彩・麻布	110.5×161.2	
98	筆石村	〃	1938	油彩・麻布	97.0×145.5	
99	卓上静物	〃	1940	油彩・麻布	72.0×116.0	
100	黄 比 叡	〃	1940	油彩・麻布	130.0×162.0	

番号	作 品	作 者	制作年	技法・材質	寸法(cm)	所 蔵
101	隼	須田国太郎	1940	油彩・麻布	72.5× 91.0	
102	歩む鷺	〃	1940	油彩・麻布	128.0×160.5	東京国立近代美術館
103	ベルシャア猫	〃	1940	油彩・麻布	50.0× 60.6	
104	葛城山	〃	C.1940 ~61	油彩・麻布	65.0× 80.5	京都市美術館
105	芍薬	〃	1941	油彩・麻布	90.0× 72.0	
106	戸外静物	〃	1941	油彩・麻布	98.0×132.0	京都府立総合資料館
107	夜桜	〃	1941	油彩・麻布	64.5× 90.5	京都国立近代美術館
108	樹上の鷺	〃	1942	油彩・麻布	72.5× 90.5	
109	大同雲崗大仏寺第19洞	〃	1942	油彩・麻布	65.0× 52.0	
110	校倉(甲)	〃	1943	油彩・麻布	92.0×118.0	京都国立近代美術館
111	校倉(乙)	〃	1943	油彩・麻布	92.0×118.0	京都国立近代美術館
112	石組	〃	1943	油彩・麻布	53.0× 65.2	
113	石組(保国寺)Ⅰ	〃	1944	油彩・麻布	80.0×117.0	京都市美術館
114	石組(保国寺)Ⅱ	〃	1944	油彩・麻布	73.5× 90.0	京都市美術館
115	石組(保国寺)Ⅲ	〃	1944	油彩・麻布	66.0× 92.0	京都市美術館
116	嵐峡	〃	1946	油彩・麻布	64.5× 53.0	
117	浜(室戸)	〃	1949	油彩・麻布	90.0×115.5	大原美術館
118	入江(浜田)	〃	1950	油彩・麻布	50.5× 61.0	
119	山陰風景	〃	C.1950	油彩・麻布	50.3× 60.5	和歌山県立美術館
120	溜池	〃	1950	油彩・麻布	91.0×116.5	
121	犬	〃	1950	油彩・麻布	90.5× 73.0	東京国立近代美術館
122	鶉	〃	1952	油彩・麻布	71.5× 90.0	京都国立近代美術館
123	動物園	〃	1953	油彩・麻布	60.0× 80.0	
124	走鳥	〃	1953	油彩・麻布	89.5× 71.5	京都市立芸術大学
125	真名鶴	〃	1953	油彩・麻布	59.5× 66.0	
126	樹下	〃	1954	油彩・麻布	73.0× 91.5	
127	八幡平	〃	1954	油彩・麻布	61.0× 73.0	京都市美術館
128	杉	〃	1955	油彩・麻布	59.0× 83.5	
129	窪八幡	〃	1955	油彩・麻布	59.0× 83.5	東京国立近代美術館
130	るりみつどり	〃	1956	油彩・麻布	65.0× 91.0	広島県立美術館
131	ある建築家の肖像	〃	1956	油彩・麻布	74.0× 92.0	
132	阿蘇	〃	1956	油彩・麻布	60.6× 72.8	
133	偶感	〃	1958	油彩・麻布	50.0× 60.5	
134	鉦山	〃	1959	油彩・麻布	65.3× 80.0	

## (5)展評など

新聞(報道記事をのぞく)

展評

対照的な作風を対比させる「小林和作・須田国太郎展」朝日新聞(西部)/ (源)60・1・16  
 あくなき絵画への挑戦「小林和作・須田国太郎展」をみて 中国新聞/ (寺本)60・1・21  
 日本の洋画の境地開く 小林和作・須田国太郎展 読売新聞(西部)/ (秋)60・2・6

シリーズ

光とかげと 小林和作展から 高田美規雄

西日本新聞(県内)

〈1〉極めて日常的な(60・1・24) 〈2〉切り詰めたら15号(60・1・25) 〈3〉日本画的な油絵



(60・1・26) 〈4〉花鳥画的な情趣性 (60・1・27) 〈5〉伸び伸びした開放感 (60・1・29)  
〈6〉美意識に支えられ (60・1・30) 〈7〉一気に感情を塗り込む (60・1・31) 〈8〉「アタリマ  
への絵」(60・2・1) 〈9〉「花咲か爺」論を实践 (60・2・2) 〈10〉自然と深く手を結ぶ (60・  
2・3)

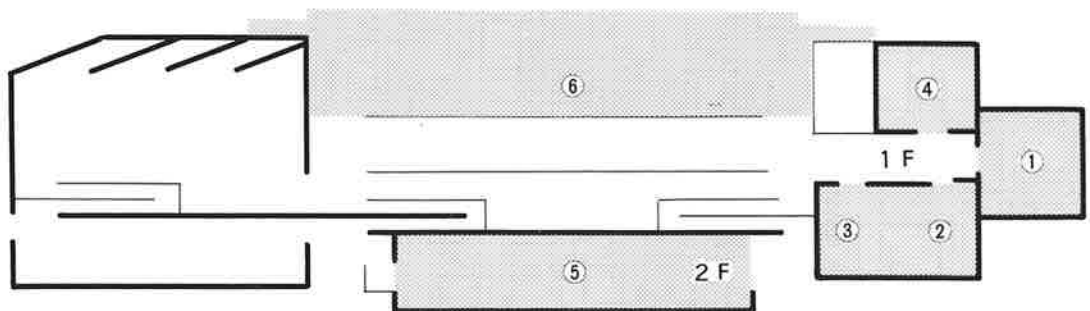
エッセイ

小林和作の世界 小林和作・須田国太郎展に寄せて 高田美規雄 中国新聞 / 60・2・1



## (2) 常設展

館藏品（借用品をふくむ場合もある）の常時公開の場として常設展示室を設け、年4回でいどの展示替えてテーマを設定して館藏品を紹介している。常設展示のエリアは、図に示されるように5つの室からなっており、このうち4室が1階フロア、1室が2階フロアに設置されている。前4室を常設展示室Ⅰと総称し、それぞれの室は特定の展示内容にかぎられている。すなわち、①絵画展示室Ⅰが香月泰男、②同Ⅱが小林和作、③資料展示室が版画・素描・画稿などの第2次資料、④郷土工芸室が萩焼および赤間硯の展観にそれぞれ利用されている。一方、2階フロアは⑤常設展示室Ⅱと称し、館藏品全般から選ばれた作品紹介の場として利用されており、常設ⅠとⅡは相互補完的に機能し全体として偏りのない展示となるよう配慮されている。この他に戸外には⑥野外展示場が設けられている。ここは、館内展示が不可能な立体造形の紹介・展観の場として現代彫刻数点が設置されているが、鑑賞の合間の休憩の場としても利用されている。



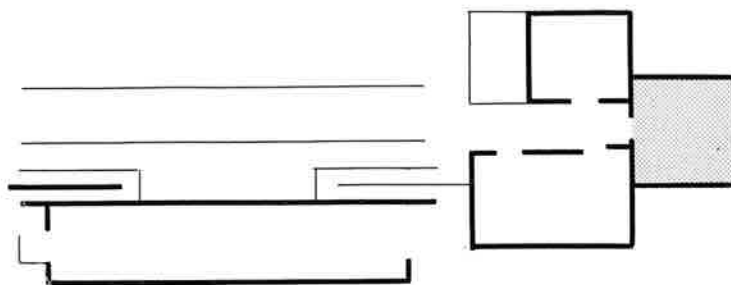
常設展示室Ⅰ (①～④)	462.309m <sup>2</sup> (延べ面積)
常設展示室Ⅱ (⑤)	471.825m <sup>2</sup> ( 〃 )
野外展示場 (⑥)	1,370m <sup>2</sup> ( 〃 )

※ 凡例 常設展示記録は、各展示室に即して整理し、また、個々については、名称・趣旨・出品目録の順に編集されている。

## 常設展示室 I

### 絵画展示室 I

(香月泰男)



## 1. シベリア・シリーズ I 一応召からハイラル駐屯まで一

1983(昭56)年4月26日～7月24日

### 趣旨

「シベリア・シリーズ」は、洋画家香月泰男の出征から復員までの従軍体験(1943～47)をシベリア抑留期を中心に57点の連作で、絵画化したものである。復員後まもなく制作に着手され没年までつづけられた同シリーズ(1947～74)は、浜田知明の「初年兵哀歌シリーズ」などとともに戦争絵画で美術的に成功した数少ないもののひとつといえ、香月個人のライフワークとして重要であるばかりでなく、戦後日本洋画史のうえでも異例の収穫とされている。今回から4回にわたり、館蔵のシリーズ54点すべてを紹介しながら、そのシベリア体験の軌跡をたどる。

### 出品作品(すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	雲	1968
2	別	1968
3	雨(牛)	1947
4	海拉爾	1973
5	道	1973
6	煙	1969
7	青の太陽	1969
8	雨	1968
9	朝陽	1965
10	黒い太陽	1961
11	朕	1970
12	護	1969

## 2. シベリア・シリーズ II 一移動・敗戦・シベリアへの輸送一

1983(昭58)年7月26日～10月30日

### 出品作品(すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	避難民	1960
2	奉天(右)	1970
3	奉天(左)	1970

番号	作 品	制作年
4	業火	1970
5	1945	1959
6	北へ西へ	1959
7	凍土	1965
8	アムール	1962
9	運ぶ人	1960
10	乗客	1957

### 3. シベリア・シリーズⅢ ー収容所時代ー

1983(昭58)年11月1日～1984(昭59)年1月8日

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作 品	制作年
1	埋葬	1948
2	雪	1963
3	涅槃	1960
4	海〈ペーチカ〉冬	1966
5	雪〈窓〉	1963
6	列	1961
7	左官	1956
8	星〈有刺鉄線〉夏	1966
9	囚	1965
10	荆	1965
11	凍河〈エニセイ〉	1966
12	穴掘人	1960
13	餓	1964

### 4. シベリア・シリーズⅣ ー帰国・復員ー

1984(昭59)年1月10日～2月19日

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作 品	制作年
1	ダモイ	1959
2	バイカル	1971
3	ナホトカ	1961
4	点呼(右)	1971
5	点呼(左)	1971
6	絵具箱	1972
7	渚〈ナホトカ〉	1974
8	日本海	1972
9	復員〈タラップ〉	1966
10	〈私の〉地球	1968
11	私〈マホルカ〉	1966

番号	作品	制作年
12	雪山	1972
13	月の出	1974
14	日の出	1974

## 5. 常設特別展示 一香月泰男一

1984(昭59)年2月21日～5月6日

### 趣 旨

昭和49年3月8日に〈シベリア・シリーズ〉を中心に活躍していた香月泰男が逝去してから、まる10年を経ようとしている。今日その〈シベリア・シリーズ〉は、故郷三隅町にアトリエを構え、生涯をそこで過した氏の代表作として本館の重要なコレクションになっているが、これは、戦後の美術史上においていくつか大切な点を含んでいると考えられる。

戦争・虜囚体験という具体的歴史的テーマを選んでいること、戦後的表現として半具象で独自の表現を打ちだしていること、その情趣性や宗教的感情に特異な境地をきりひらいていること、などがその主な内容といえるが、しかもそれは、単なる私小説的な表現にとどまらない大きなスケールで展開されていることが最大の特徴となっている。

ところで、ひとりの作家の歩みをたどってみると、戦争・虜囚体験そのものが直接的な契機であるとはいえ、本格的にシリーズ作品が発表されるようになるのは復員後約10年のちであった。それまでには、後・印象派風のものからはじまって、立体構成的作品、平面構成的作品へと移り、色彩の方でも、原色並置的なコントラストのつよいものから、色数を抑制した静謐な(叙情的といえるかもしれない)ものへと変化していた。よく知られる香月様式は、1950年代末からのいわゆるカーボン・エポックにはじまり、これがテーマとしてのシベリア体験と表裏一体となって展開していった。木炭と方解末を使った独特のマチエルは、単純化され部分的には抽象化された形象と相まって、ことばで説明される具体性を超えてまさに絵画的な世界を構築している。そこでは、誰れ彼れといった特定の個人ではなく、広い意味での「人びと」の歴史が独自の形象で綴られているとともに、平面化され、様式化された絵画として空間が展開されているといえよう。また、月、陽、雨、雲などの自然がモチーフに選ばれていることも、人間的出来事の対比が象徴的に示されているといえるかもしれない。ゆるやかな時間の流れ、静的でありながら永遠の時間を感じさせるモメントも見逃せない。

そうした点において、いわば日本人の油絵として香月泰男の芸術をふりかえってみることもできるのではあるまいか。

### 出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	石と壺	1940
2	釣り床	1941
3	水鏡	1942
4	波紋	1943
5	雨〈牛〉	1947
6	風	1948
7	埋葬	1948
8	水浴	1949
9	昼	1949

番号	作 品	制作年
10	室内	1950
11	夏	1951
12	仕事場	1952
13	ペンキ職人	1953
14	鹽舟	1954
15	牡牛	1954
16	青年	1954
17	新聞	1955
18	山羊	1955
19	左官	1956
20	乗客	1957
21	北へ西へ	1959
22	ダモイ	1959
23	1945	1959
24	避難民	1960
25	穴掘人	1960
26	運ぶ人	1960
27	ホロンバイル	1960
28	涅槃	1960
29	黒い太陽	1961
30	ナホトカ	1961
31	列	1961
32	アムール	1962
33	雪〈窓〉	1963
34	雪	1963
35	鋸	1964
36	伐	1964
37	餓	1964
38	囚	1965
39	荆	1965
40	朝陽	1965
41	凍土	1965
42	私〈マホルカ〉	1966
43	凍河〈エニセイ〉	1966
44	海〈ペーチカ〉冬	1966
45	星〈有刺鉄線〉夏	1966
46	復員〈タラップ〉	1966
47	別	1967
48	雨	1968
49	雲	1968
50	〈私の〉地球	1968
51	青の太陽	1969
52	護	1969
53	煙	1969
54	業火	1970
55	朕	1970
56	奉天(右)	1970

番号	作品	制作年
57	奉天(左)	1970
58	点呼(右)	1971
59	点呼(左)	1971
60	バイカル	1971
61	-35℃	1971
62	日本海	1972
63	雪山	1972
64	絵の具箱	1972
65	海拉爾	1973
66	道	1973
67	デモ	1973
68	渚<ナホトカ>	1974
69	月の出	1974
70	日の出	1974

※一部の作品は5月27日まで展示。

## 6. シベリア・シリーズ

1984(昭59)年5月29日～8月26日

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	雲	1968
2	別	1968
3	護	1969
4	雨<牛>	1947
5	雨	1968
6	朝陽	1965
7	黒い太陽	1961
8	煙	1969
9	青の太陽	1969
10	朕	1970
11	ホロンバイル	1960
12	海拉爾	1973
13	道	1973
14	避難民	1960
15	1945	1959
16	奉天(右)	1970
17	奉天(左)	1970

## 7. 香月中期作品

1984(昭59)年8月28日～11月4日

## 趣 旨

1940年から50年代にかけての20年間は、中期様式が生まれ定着する時期と、後期様式（シベリア・シリーズ）への過渡的様相をしめす時期に大きく分けられる。中期様式は、茶や青をトーンにした心象性のつよい画面が特徴であるが、50年代になると画面はしだいに構成化の度合いをつよめ、さらに後半では白の使用がめだってくる。60年代のシベリア・シリーズと比較してみると、その変化が、香月泰男の戦争体験（1943～47）を境に進行していることが理解される。

### 出品作品（すべて油彩・キャンバス）

番号	作 品	制作年
1	釣り床	1941
2	波紋	1943
3	風	1948
4	水浴	1949
5	昼	1949
6	朝	1949
7	室内	1950
8	夏	1951
9	仕事場	1952
10	牡牛	1954
11	盃舟	1954
12	青年	1954
13	山羊	1955
14	二人	1955

## 8. シベリア・シリーズ

1984(昭59)年11月6日～1985(昭60)年1月13日

### 出品作品（すべて油彩・キャンバス）

番号	作 品	制作年
1	左官	1956
2	乗客	1957
3	1945	1959
4	北へ西へ	1959
5	穴掘人	1960
6	運ぶ人	1960
7	ホロンバイル	1960
8	ナホトカ	1961
9	列	1961
10	雪	1963
11	雪〈窓〉	1963
12	餓	1964
13	伐	1964
14	鋸	1964



## 9. シベリア・シリーズ

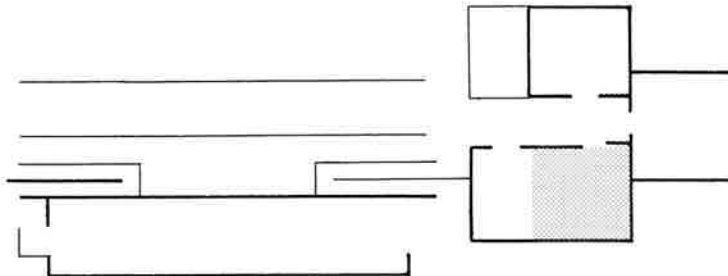
1985(昭60)1月15日～3月31日

出品作品(すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	凍土	1965
2	朝陽	1965
3	囚	1965
4	荊	1965
5	凍河〈エニセイ〉	1966
6	復員〈タラップ〉	1966
7	星〈有刺鉄線〉夏	1966
8	雲	1968
9	雨	1968
10	護	1969
11	煙	1969
12	奉天(右)	1970
13	奉天(左)	1970
14	業火	1970

## 絵画展示室Ⅱ

(小林和作)



### 1. 小林和作の世界

1983(昭58)年4月26日～7月24日

#### 趣旨

県下秋穂町出身の洋画家小林和作は、豊麗な色彩と独特なタッチで調和的な自然観を表現した。かれの油彩画は、油彩であることによって色の塗り重ねや即興性が生かされている一方、描き出された空間の構築的要素は、空間を切りひらきながら、脱主観的ともいわれるゆえんであり、自然と一体となりながら和作が追求した絵画的世界のありようをそこに見ることができる。

また和作自身、油彩画に本領を発揮するかたわら、メモがわりの多くの水彩画スケッチ、余技的な日本画や陶器の絵付けなど、数々の興味深い小品を残している。その他に、ユーモアあふれる随想執筆や自分の審美眼を唯一のよりどころとするコレクションの形成は、和作の人間的魅力をいっそう深くするものであり、そうしたことを通じて蓄積されたエネルギーが次々と生み出される新たな作品に

たたきつけられている姿は、そのような和作芸術のなりたちを別の側面から顕在化させる。

## 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	上高地(其3)	小林和作	油彩・キャンバス	1925
2	伊太利カプリ島風景	〃	〃	
3	エクス風景	〃	〃	1929
4	佐渡の海	〃	〃	
5	春の海	〃	〃	1974
6	春	〃	〃	
7	海	〃	〃	
8	海	〃	〃	
9	海	〃	〃	
10	海	〃	〃	
11	日の岬	〃	水彩・紙	
12	隠岐国賀	〃	〃	
13	桜島	〃	〃	
14	室戸	〃	〃	
15	富士山	〃	陶画(皿)	
16	富士山	〃	〃	
17	富士山	〃	陶画(茶碗)	
18	春の花	〃	〃	
19	波と燕	〃	〃	
20	由布岳	〃	陶画(鉢)	
21	龍	梅原龍三郎	書	

## 2. 小林和作とその周辺

1983(昭58)年7月26日～10月30日

## 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状
1	婦人像	小林和作	油彩・キャンバス
2	海	〃	〃
3	秋山	〃	〃
4	秋果	〃	〃
5	海	〃	〃
6	ノートルダム	林 武	水彩・紙
7	椿	中川一政	紙本彩色・額
8	婦人の顔	青山熊治	油彩・キャンバス
9	カプリ島風景	山脇信徳	〃
10	フロレンス夕映	西山英雄	紙本彩色・額
11	慶長時代風俗画遊楽之図		紙本彩色・軸
12	寛永時代風俗人物画		〃
13	豊国風立美人図		〃
14	久米仙人図	平 岸	絹本彩色・軸

番号	作 品	作 者	材質・形状
15	美人画	宗 寿	絹本彩色・軸
16	美人画(双幅)	月岡雪鼎	〃

### 3. 小林和作の世界Ⅱ

1983(昭58)年11月1日～1984(昭59)年1月8日

#### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	海	小林和作	油彩・キャンバス	
2	春の海	〃	〃	1974
3	上高地〈其3〉	〃	〃	1925
4	エクス風景	〃	〃	1929
5	初冬の山	〃	〃	
6	隠岐浄土ヶ浦	〃	水彩・紙	
7	隠岐国賀	〃	〃	
8	大山	〃	〃	
9	鎌手	〃	〃	
10	果物	〃	紙本彩色・軸	
11	きつつき	〃	〃	
12	桃鳩	〃	〃	
13	檜鳥	〃	〃	
14	山茶花と青鳩	〃	〃	
15.	南画風山水	〃	絹本墨画彩色・軸	

※10～15番は11月15日より展示。

### 4. 雪舟と雲谷派

1983(昭58)年11月1日～11月13日

#### 趣 旨

中世絵画史を語るうえで、雪舟の存在を抜きに考えることはできない。かれは中国(明)の地を自らふんで絵を学び、帰国後は豊後・周防などに画室を構えて独自の画風を確立し、晩年にいたるまで全国をめぐる写生の境地を深めていった。このようなひたむきな作画態度は、後世の幾多の画人たちの規範となり、多くの追従者をだすことになった。

山口を中心に流派を形成した雲谷派もそのひとつであり、毛利家の庇護のもとで精力的な活躍を示した。始祖雲谷等顔をはじめとして、等益・等与などといった有力画人を多数輩出し、幕末まで存続した。

今回は、雪舟ならびに雲谷派の作品を展示し、雪舟の画業をしのぶとともに、雪舟の雲谷派に与えた影響を考える。

#### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	牧牛図	雪 舟	紙本淡彩・軸	

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
2	牧牛図	雪舟	紙本淡彩・軸	1474
3	山水小巻	〃	紙本墨画・画卷	
4	唐子遊戯布袋図	等碩	紙本淡彩・軸	
5	鷺図	雲谷等顔	紙本墨画・軸	
6	樓閣山水図	雲谷等益	紙本淡彩・軸	
7	布袋図	雲谷等与	紙本墨画・軸	
8	対月図	雲谷等爾	紙本淡彩・軸	

## 5. 小林和作のコレクション

1984(昭59)年1月10日～2月19日

### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状
1	慶長時代風俗画遊楽之図		紙本彩色・軸
2	寛永時代風俗人物画		〃
3	豊国風立美人		〃
4	久米仙人	平岸	絹本彩色・軸
5	美人画(双幅)	月岡雪鼎	〃
6	フローレンス夕映	西山英雄	紙本彩色・額
7	カプリ島風景	山脇信徳	油彩・キャンバス
8	婦人の顔	青山熊治	〃
9	ノートルダム	林武	水彩・紙
10	椿	中川一政	紙本彩色・額
11	海	小林和作	油彩・キャンバス
12	海	〃	〃
13	婦人像	〃	〃

## 6. 常設特別展示 —香月泰男—

1984(昭59)年2月21日～5月6日

## 7. 小林和作の世界

1984(昭59)年5月8日～8月19日

### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	上高地〈其3〉	小林和作	油彩・キャンバス	1925
2	伊太利カプリ島風景	〃	〃	1928
3	エクス風景	〃	〃	1929
4	婦人像	〃	〃	
5	佐渡の海	〃	〃	
6	海	〃	〃	1964

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
7	春	小林和作	油彩・キャンバス	
8	春の海	〃	〃	
9	隠岐浄土ヶ浦	〃	水彩・紙	
10	日の岬	〃	〃	
11	隠岐国賀	〃	〃	
12	隠岐白島	〃	〃	
13	果物	〃	紙本彩色・軸	
14	きつつき	〃	〃	
15	桃鳩	〃	〃	
16	檜鳥	〃	〃	
17	南画風山水	〃	絹本墨画彩色・軸	
18	山茶花と青鳩	〃	絹本彩色・軸	
19	白椿	〃	〃	

※13～19番は6月12日～7月22日をのぞき展示。

## 8. 特別展示 —雪舟と雲谷派—

1984(昭59)年6月12日～7月22日

### 趣 旨

自主企画展「雲谷等顔と桃山時代」(6月12日～7月22日)との関連性を考え、当館蔵の雪舟作品および江戸時代の雲谷派の作品を展示。

### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	牧牛図	雪 舟	紙本淡彩・軸	
2	牧牛図	〃	〃	
3	山水小巻	〃	紙本墨画・画卷	1474
4	布袋図	雲谷等与	紙本墨画・軸	
5	布袋図	雲谷等作	〃	
6	雪景山水図	雲谷等爾	〃	
7	破墨山水図	雲谷等哲	〃	

※1～3番は途中展示替。

## 9. 小林和作のコレクション

1984(昭59)年8月21日～11月4日

### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状
1	ノートルダム	林 武	水彩・紙
2	フローレンス夕映	西山英雄	紙本彩色・額
3	濃彩人物画	福沢一郎	油彩・板
4	カプリ島風景	山脇信徳	油彩・キャンバス

番号	作 品	作 者	材質・形状
5	秋果	小林和作	油彩・キャンバス
6	秋晴	〃	〃
7	海	〃	〃
8	山湖の秋	〃	〃
9	海	〃	〃
10	慶長時代風俗画遊楽之図		紙本彩色・軸
11	寛永時代風俗人物画		〃
12	扇面山水	浦上玉堂	紙本墨画・軸
13	美人画(双幅)	月岡雪鼎	絹本彩色・軸
14	久米仙人	平 岸	〃

## 10. 小林和作の水彩画

1984(昭59)年11月6日～1985(昭60)1月13日

### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状
1	上石見	小林和作	水彩・紙
2	比婆山	〃	〃
3	山陰上石見にて	〃	〃
4	大佐山	〃	〃
5	松山附近	〃	〃
6	隠岐浄土ヶ浦	〃	〃
7	日の岬	〃	〃
8	大山	〃	〃
9	川治湖	〃	〃
10	隠岐国賀	〃	〃
11	出雲簸川上流	〃	〃
12	日の岬	〃	〃
13	桜島	〃	〃
14	隠岐国賀	〃	〃
15	鎌手	〃	〃
16	隠岐浄土ヶ浦	〃	〃
17	日の岬	〃	〃
18	隠岐国賀	〃	〃
19	隠岐白島	〃	〃
20	果物	〃	紙本彩色・軸
21	きつつき	〃	〃
22	桃鳩	〃	〃
23	檜島	〃	〃
24	南画風山水	〃	絹本墨画彩色・軸
25	山茶花と青鳩	〃	絹本彩色・軸
26	白椿	〃	〃

## 11. 小林和作の世界

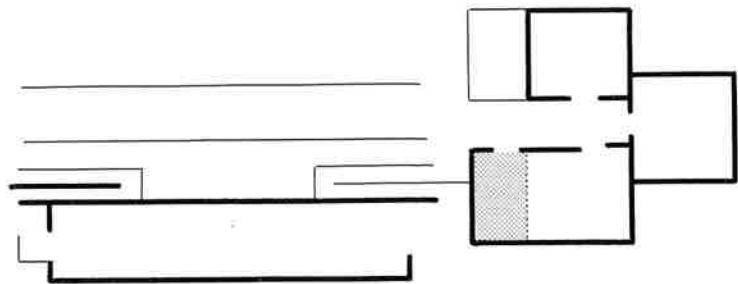
1985(昭60)年1月15日～3月31日

### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状
1	隠岐浄土ヶ浦	小林和作	水彩・紙
2	日の岬	〃	〃
3	隠岐国賀	〃	〃
4	隠岐白島	〃	〃
5	大山	〃	〃
6	上石見	〃	〃
7	山陰上石見にて	〃	〃
8	坊ノ津燈台附近	〃	〃
9	隠岐浄土ヶ浦	〃	〃
10	鎌手	〃	〃
11	隠岐国賀	〃	〃
12	出雲簸川上流	〃	〃
13	日の岬	〃	〃
14	桜島	〃	〃
15	由布岳	〃	陶画(鉢)
16	富士山	〃	陶画(皿)
17	〃	〃	〃
18	〃	〃	陶画(茶碗)
19	波と燕	〃	〃
20	春の花	〃	〃

### 資料展示室

(美術史資料ほか)



## 1. 中本達也の銅版画

1983(昭58)年7月26日～10月30日

### 趣旨

戦後の洋画界において、大島郡出身の中本達也の存在は大きな意味をもっている。彼の場合、人間の根源的な生きる姿が大きなテーマであったといえるが、絵画的にそれを実現する意味において、力のこもった線や、象の皮膚のように厚いマチエル、それらをつきぬけるような色彩などは、まさに生

命力そのものの表現であった。彼の銅版画は、その線的な要素を抽出したものと考えられ、技術的には腐食銅版（エッチング）だが、直彫（ドライポイント）的な要素の強い銅版画であり、彫り刻んだ線はなまなましいほどに作家の息づかいを伝えている。

#### 出品作品（すべて銅版・紙）

番号	作品	制作年
1	鳥	1959
2	野の花	1959
3	潮	1960
4	作品	1960
5	西瓜	1960
6	少女	1960
7	網	1960
8	南の実	1961
9	地底の花	1961
10	化石(葉)	1961
11	卵と実	1961
12	生き物	1961
13	壁の人	1962
14	巢	1962
15	海	1962
16	春	1962
17	野	1962

## 2. 中本達也の銅版画

1984(昭59)年5月8日～8月19日

#### 出品作品（すべて銅版・紙）

番号	作品	制作年
1	鳥	1959
2	少女	1960
3	ザクロ	1960
4	黒土	1960
5	森	1960
6	西瓜	1960
7	青い実	1960
8	小さな花	1960
9	潮	1960
10	網	1960
11	卵と実	1961
12	生き物	1961
13	南国の実	1961
14	一つの葉	1961
15	鳥の巢	1961
16	壁の人	1962



### 3. 香月泰男のカット絵原画

1985(昭60)1月15日～3月31日

#### 趣 旨

香月泰男は、シベリア抑留から昭和22年に帰国すると、さっそく旺盛な制作活動を再開するが、その活動の一環として新たに着手されたのがカット絵である。昭和26～27年頃に始まり晩年にいたるまで続けられたこの仕事は、単に独立した仕事として秀れているばかりでなく、彼の本業である油絵に影響を与えている点においてもきわめて大きな意義をもっている。

#### 出品作品 (すべて鉛筆・墨・紙)

番号	作 品
1	新・人国記 (山口県略図)
2	〃 (八代のツル)
3	〃 (錦帯橋)
4	〃 (エビ養殖場)
5	〃 (ザビエル教会)
6	〃 (常栄寺)
7	〃 (尚日園)
8	〃 (常盤池)
9	〃 (松下村塾)
10	〃 (捕鯨古図)
11	〃 (青海島)
12	〃 (防府市)
13	〃 (秋芳洞)
14	〃 (長門峡)
15	〃 (長門市)
16	〃 (大内人形)
17	〃 (たこ・ふぐ)

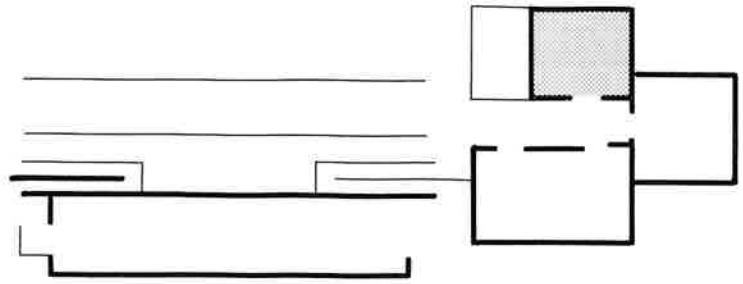


絵画展示室 I



絵画展示室 II

# 郷土工芸室



## 1. 萩焼と赤間硯

1983(昭58)年5月10日～8月21日

### 出品作品

番号	作品	作者	制作年
1	麦文壺	吉賀大眉	1946
2	花器「暁雲」	〃	1973
3	萩井戸茶碗	〃	
4	萩魚文壺	坂高麗左衛門	1975
5	萩茶碗	〃	1975
6	萩筆洗切茶碗	三輪休和	1975
7	萩編笠水指	〃	1973
8	萩茶碗	三輪休雪	1978
9	萩水指	〃	
10	萩水指	12代 坂倉新兵衛	
11	萩刷毛目茶碗	〃	
12	萩御本手茶碗	〃	
13	萩とじめ水指	14代 坂倉新兵衛	
14	萩水指	坂田泥華	1978
15	萩茶碗	〃	1979
16	萩水指	田原陶兵衛	1978
17	萩割高台茶碗	〃	1979
18	萩花文割俵形鉢		
19	萩茶碗		
20	萩馬上杯形茶碗		
21	萩筆洗形割高台茶碗		
22	赤間硯「ビルディング」	堀尾卓司	1970
23	〃 「累柿研」	〃	1950
24	〃 「すみすり」	〃	1979

## 2. 個人コレクション展Ⅱ—江戸時代の萩焼—

1983(昭58)年8月23日～12月11日

### 趣旨

個人コレクションは、たとえば国宝、重要文化財といった名品がなくとも、テーマや方向性が明らかで、ひとつのまとまった個性のようなものが感じられるものであれば意味があるといえよう。

今回は、萩焼作家所蔵の古萩を展示し、江戸時代の萩焼の特徴を概観する。

## 出品作品

番号	作品
1	萩獅子置物
2	萩割高台茶碗
3	萩茶碗
4	〃
5	〃
6	萩向付
7	萩鐘馗置物
8	萩布袋置物
9	萩琴高仙人置物
10	萩茶碗
11	〃
12	〃
13	萩四方鉢
14	萩茶碗
15	萩祭器形鉢
16	萩鉢
17	萩瓜形向付
18	萩割高台茶碗
19	萩茶碗
20	〃
21	〃
22	萩割俵形鉢
23	萩牡丹文手洗
24	萩飛獅子置物

## 3. 萩焼展

1983(昭58)年12月13日～1984(昭59)年2月26日

## 出品作品

番号	作品	作者	制作年
1	萩筆洗切茶碗	三輪休和	1975
2	萩編笠水指	〃	1973
3	萩水指	三輪休雪	
4	萩茶碗	〃	1978
5	花器「暁雲」	吉賀大眉	1973
6	萩井戸茶碗	〃	
7	萩水指	坂高麗左衛門	1975
8	萩茶碗	田原陶兵衛	1978
9	萩灰被耳付花入	〃	1979
10	萩水指	坂田泥華	1978
11	萩平水指	14代 坂倉新兵衛	1974

- 番号 作品  
 12 萩筆洗形割高台茶碗  
 13 萩花文割俵形鉢  
 14 萩茶碗

#### 4. 郷土の陶芸Ⅱ —岩国の陶磁器—

1984(昭59)年2月28日～5月13日

##### 趣旨

現在では萩焼一色に塗りつぶされた感のある山口県の陶芸も、近世においてはさまざまな窯が各地に築かれ、さかんに陶芸活動がいとなまれていた。「シリーズ・郷土の陶芸」は、そういった陶磁器を紹介し、山口県の陶磁史を概観しようとするものである。

##### 出品作品

番号	作品	所蔵
多田焼・皿山焼		
1	多田茶碗	岩国徴古館
2	多田花入	〃
3	〃	〃
4	多田平茶碗	〃
5	多田鯉耳花入	〃
6	多田小碗(2点)	〃
7	多田三島写茶碗	〃
8	多田向付(2点)	〃
9	皿山染付布袋文鉢	〃
10	皿山染付碗(3点)	〃
吉向焼・岩国山焼		
11	黒楽茶碗	岩国徴古館
12	〃(馬上杯形)	〃
13	黄釉龍文茶碗	〃
14	鳳凰風炉	〃
15	緑釉水盤	〃
16	朝顔文四方平鉢	〃
17	染付唐草文水指	〃
錦屏山焼		
18	染付七賢人図鉢	岩国徴古館
19	染付花卉文鉢	〃
20	染付鯉文鉢	〃
21	染付山水文皿	〃
22	染付山水文碗(2点)	〃
資料		
23	皿山採集破片類	岩国徴古館

#### 5. 萩焼と赤間硯

1984(昭59)年5月15日～8月19日

## 出品作品

番号	作 品	作 者	制作年
1	萩壺	三輪休和	1960頃
2	萩茶碗	〃	1975
3	萩筆洗切茶碗	〃	1975
4	萩茶碗	三輪休雪	1979
5	萩水指	〃	1981
6	麦文壺	吉賀大眉	1946
7	萩井戸茶碗	〃	
8	萩魚文花器	坂高麗左衛門	1979
9	萩茶碗	〃	1970
10	萩刷毛目茶碗	12代 坂倉新兵衛	
11	萩水指	〃	
12	萩花入	14代 坂倉新兵衛	1974
13	萩茶碗	〃	1974
14	萩灰被耳付花入	田原陶兵衛	1979
15	萩割高台茶碗	〃	1979
16	萩茶碗	坂田泥華	1977
17	萩水指	〃	1978
18	鉢「雷童」	三輪龍作	1981
19	赤間硯「蘭花研」	堀尾卓二	1956
20	〃 「双体」	〃	
21	〃 「すみすり」	〃	1979

## 6. 現代の陶芸

1984(昭59)年8月21日～11月25日

### 趣 旨

単に、伝統的拘束のつよい陶芸という分野において新しい造形の可能性を探るというだけでなく、逆に新しい表現を求めるために土と火という素材を選んだともいえる作家たちにとって、もはやジャンルの枠は存在していないのかもしれない。荒木高子、伊藤公象、鯉江良二、里中英人、星野暁、三島喜美代、三輪龍作の、現代陶芸を代表する7人の作家の作品によって、その造形するところの意味を考える。

### 出品作品

番号	作 品	作 者	制作年
1	砂の聖書	荒木高子	1980
2	起土一魚形の仮説一	伊藤公象	1982
3	スパーク・スパーク・アーム	鯉江良二	1982
4	証言	〃	1973
5	赤ちゃんのヘルメット	里中英人	1973
6	Appearance・Substance	星野 暁	1982
7	コピー'82	三島喜美代	1982
8	ラブ	三輪龍作	1969

番号	作 品	作 者	制作年
9	花Ⅱ	三輪龍作	1977
10	予感	〃	1977
11	LOVE(ハイヒール)	〃	1980

※1番は10月6日から展示。4番は10月4日まで展示。

## 7. 萩焼 ―古萩と現代―

1984(昭59)年11月27日～1985(昭60)年2月17日

### 出品作品

番号	作 品	作 者	制作年
1	萩茶碗	12代 坂倉新兵衛	
2	萩茶碗	14代 〃	1974
3	萩編笠水指	三輪休和	1973
4	萩水指	三輪休雪	
5	萩割高台茶碗	田原陶兵衛	1979
6	萩茶碗	坂田泥華	1979
7	萩井戸茶碗	吉賀大眉	
8	萩花文割俵形鉢		
9	萩筆洗割高台茶碗		
10	萩茶碗		
11	萩馬上杯形茶碗		
12	萩茶碗		
13	萩牡丹唐草文手洗		
14	萩飛獅子置物		

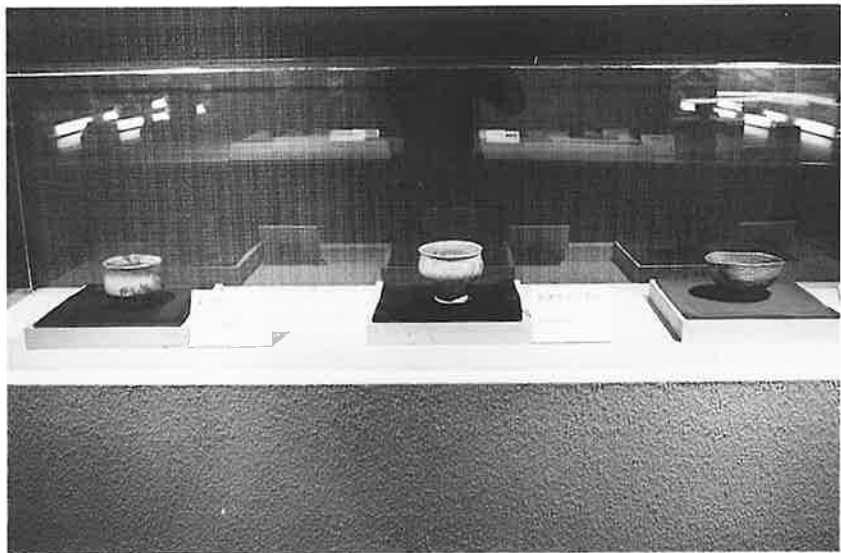
## 8. 郷土の陶芸Ⅲ ―須佐焼―

1985(昭60)年2月19日～5月19日

### 出品作品

番号	作 品	所 蔵
1	獅子置物	山口県立山口博物館
2	香炉	〃
3	獅子置物	須佐町中央公民館
4	龍文花入	〃
5	松鶴亀文花入	〃
6	花文鉢	〃
7	〃	〃
8	鉢	〃
9	耳付花入(須佐町指定文化財)	〃
10	花入	
11	大德利	
12	大水注	

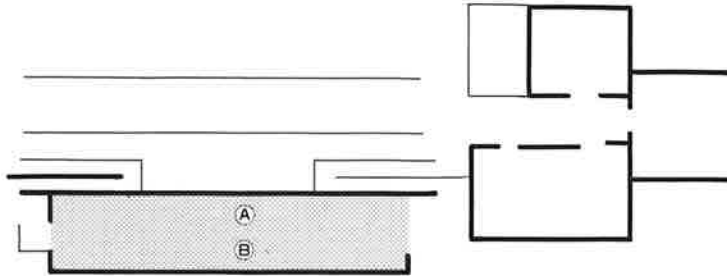
番号	作 品	所 蔵
13	波兔文鉢	
14	三島写茶碗	
15	〃	
16	茶碗	
17	油注(文化12年銘)	
18	〃	
19	壺(昭和8年銘)	
20	水注	
21	茶碗	
22	鉢	山口県埋蔵文化財センター
23	香炉	〃
24	すり鉢	〃
25	破片類	〃



郷土工芸室

## 常設展示室Ⅱ

※ 展示エリア①②はともに石膏ボードによるパネル壁面からなっているが、このうち展示エリア②の壁面は可動壁面となっており、この壁面の奥には固定ケースが設置されている。したがって、このエリアは壁面として油彩等の展示に利用されるほか、これを取払い、固定ケースで日本画等の展示も可能である。このため、同時期に①②を使い分け、別趣旨の常設展示を併設する場合が多い。



### 1. 花鳥画の世界

1983(昭58)年5月31日～7月29日

#### 趣旨

日本画の分野において花鳥というモチーフは、山水画や人物画などと同様に確固としたジャンルとして古来より描きつづけられている。しかしその描かれる花鳥も単に身のまわりに存在する自然風物を描いたものというよりは、描く作者の心に内在する風物を再構成したものと考えの方が妥当であろう。

たとえば昭和の文展などで活躍した兼重暗香の「梅にかささぎ」においても、象徴的に描かれた大きな梅の老木とその長くのびた枝々に止まるかささぎ、それは単に梅とかささぎの実写以上の内容を含んでいる。その構成は明らかに作者の心象風景であり、その組み合わせ自体の中にも作者の創造性が発揮される大きな要素がある。

花鳥という身近の具体的事物の写生とその象徴化は、描く作者の自然憧憬と不可分のものといえるだろう。

#### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	四季花鳥図屏風	狩野松栄	紙本彩色・6曲1双	
2	花鳥図屏風	森 寛斎	紙本彩色・6曲1双	
3	梅にかささぎ	兼重暗香	絹本彩色・軸	1930
4	白鷺図	福田翠光	絹本彩色・軸	1932
5	紅園	〃	紙本彩色・額	1952
6	鷺のいる風景	藤田隆治	紙本彩色・6曲1双	
7	懐壁	西野新川	紙本彩色・額	1962

### 2. 近代洋画の流れ

1983(昭58)年5月31日～7月29日・8月13日～9月13日



## 趣 旨

わが国の近代洋画は、黒田清輝の帰朝（明治26年）を大きな節目として経過しながら、しだいに絵画世界の主流になるほどに飛躍的な展開をとげてきたが、いまだに描き方の問題の底を探る作業が十分でないために、日本画は日本画、洋画は洋画といった考え方があり、洋画も具象と抽象、平面と非平面という考え方の枠のなかで揺れ動いてきている。

時代的な流れをみきわめながらも、それを組み替えて考え直すことも必要かもしれない。

## 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	鴨図	高橋由一	油彩・キャンバス	1877
2	少女像	永地秀太	〃	
3	絞り	〃	〃	1913
4	女	里見勝蔵	〃	
5	星空の富士	長谷川三郎	〃	1934
6	風	香月泰男	〃	1949
7	罨	中本達也	〃	1960
8	残された壁(女)	〃	油彩・紙・キャンバス	1967
9	作品	桂 ゆき	油彩・紙・板	1958
10	裸婦	松田正平	油彩・キャンバス	
11	踏切	山本文彦	〃	1971
12	円の光景	田中稔之	〃	1979
13	A STREET SCENE No7	吉村芳生	紙・インク・額	1978
14	A STREET SCENE No8	〃	〃	1978
15	作品1	殿敷 侃	新聞紙・シルクスクリーン・額	1981
16	作品2	〃	〃	1981
17	作品3	〃	〃	1981

## 3. 雲谷派資料展 I

1983(昭58)年8月13日～9月13日

## 趣 旨

雲谷派は、毛利家の御用絵師として幕末まで存続した流派である。「雲谷」という名称は、画僧雪舟の旧居雲谷庵に由来する。毛利輝元は、家臣である原治兵衛に雪舟の「山水長巻」を模写させたが、その出来があまりにみごとであったので、雲谷庵と長巻を彼にゆだね、姓を雲谷、名を雪舟等楊の一字をとって等顔とかえさせ、雪舟画系の継承者とした。以来雲谷家は、次代の等益をはじめとした有力画人を多数輩出したが、その地盤がおおむね周防・長門を中心としたいわば地方画派的存在であったため、等益以後の画人たちは、やがて忘れ去られ、歴史の中に埋没してしまった。

山口県下には幸い雲谷派の遺品が多数現存しており、その中には中央画壇にひけをとらぬものもけっして少なくない。今後、当館ではそういった県内の雲谷派の遺品を紹介していく予定である。

## 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状
1	山水図屏風	伝 周 徳	紙本淡彩・6曲1双
2	〃	雲谷等顔	〃

番号	作品	作者	材質・形状
3	山水図屏風	雲谷等顔	紙本淡彩・6曲1双
4	唐人物図屏風	〃	紙本淡彩・2曲1隻
5	群馬図屏風	〃	紙本淡彩・6曲1双

#### 4. 山口県近代日本画の流れ

1983(昭58)年12月6日～12月18日

##### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	牧馬図	狩野芳崖	紙本墨画・軸	
2	山水図屏風	森 寛斎	紙本淡彩・6曲1双	1868
3	梅にかささぎ	兼重暗香	絹本彩色・軸	1930
4	愛吾廬図	松林桂月	絹本彩色・軸	1936
5	春秋山水図屏風	高島北海	紙本金地彩色・6曲1双	1928
6	山葡萄	福田翠光	絹本彩色・軸	1955
7	動的な群像	藤田隆治	彩色・キャンバス	1964

#### 5. 近代洋画の人間像

1983(昭58)年12月6日～12月18日

##### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	更紗の前	永地秀太	油彩・キャンバス	1924
2	ホノルル	桑重儀一	〃	1915
3	おどけ役者	〃	〃	1933
4	欲張り婆さん	桂 ゆき	油彩・紙・板	1966
5	アダムとイヴ	〃	〃	1968
6	女	里見勝藏	油彩・キャンバス	
7	婦人像	小林和作	〃	
8	裸婦	松田正平	〃	
9	1945	香月泰男	〃	1959
10	残された壁(女)	中本達也	油彩・紙・キャンバス	1967
11	旅芸人	宮崎 進	〃	
12	昼	〃	〃	1976
13	星の園にて	山本文彦	〃	1977

#### 6. 常設特別展示 ―香月泰男―

1984(昭59)年2月21日～5月27日

## 7. 山口県近代日本画の流れ

1984(昭59)年7月31日～8月26日

### 趣旨

明治以降の近代日本画の黎明期において、山口県出身作家は美術史上に大きな足跡を残した。明治初期には狩野芳崖、森寛斎を輩出し、かれらはそれぞれ独自の画風をもって画壇をささえた。明治末期には初期文展の審査員などをつとめた高島北海、帆足杏雨に教えをうけた金子鷗雨らがいる。大正期に入ると田能村直入の弟子となり伝統的な南画の画風を堅持した田中柏陰、昭和期には、帝室技芸員となり近代南画の復興に尽力した松林桂月や鷹の描写を得意とした福田翠光、幻想的な作風をもった藤田隆治らが出、活気を呈した。

### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	四季耕作図屏風	狩野芳崖	紙本墨画淡彩・4曲1隻	
2	龍虎図屏風	森 寛斎	紙本彩色・8曲1双	1848
3	山水図屏風	巖島虹石	紙本墨画淡彩・6曲1双	
4	春秋山水図屏風	高島北海	紙本金地彩色・6曲1双	1928
5	鷺のいる風景	藤田隆治	紙本彩色・2曲1双	

## 8. 山口近代洋画の流れ

1984(昭59)年7月31日～8月26日

### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	更紗の前	永地秀太	油彩・キャンバス	1924
2	ホノルル	桑重儀一	〃	1915
3	マドモアゼルS	錦義一郎	〃	
4	赤と白の対話	桂 ゆき	油彩・板	
5	明王	松田正平	油彩・キャンバス	
6	さいはて	三浦俊輔	〃	1973
7	魚人	中本達也	〃	1958
8	雪〈窓〉	香月泰男	〃	1963
9	海	小林和作	〃	1961
10	ランドスケープ	宮崎 進	〃	1976
11	薄雪	尾崎正章	〃	1977
12	バーミヤン回想	入江一子	〃	1977
13	踏切	山本文彦	〃	1971
14	赤の地平	田中稔之	〃	1976

## 9. 芳崖と寛斎

1984(昭59)年10月16日～12月9日

## 趣 旨

長府狩野家の系譜を継いだ狩野芳崖、京都において円山派を学んだ森寛斎は、東京と京都との違いはあるものの、ともに幕末の激動期を経験し、明治以降の近代日本画の黎明期にそれぞれの地において中心的存在として活躍した。フェノロサの指導のもと、西洋画的な描法や構図を積極的にとりいれようとした芳崖に対し、応挙以来の写生の技法を受け継ぎながらも西洋画に対して保守的な態度をとりつづけた寛斎。この両者の絵画に対するとらえ方のちがいは、そのまま東京と京都の当時の絵画に対する風潮のちがいをあらわしているのかもしれない。

## 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	山水図	狩野芳崖	紙本墨画淡彩・軸	
2	呂洞賓鉄拐図	〃	〃	
3	羅漢図(双幅)	〃	紙本墨画彩色・軸	
4	公孫樹と啄木鳥図	〃	紙本墨画淡彩・軸	
5	八臂弁才天図	〃	絹本彩色・軸	
6	雪中山水図	〃	紙本墨画淡彩・軸	
7	牧馬図	〃	紙本墨画・軸	
8	四季耕作図屏風	〃	紙本墨画淡彩・4曲1隻	
9	芥川図	森 寛斎	絹本彩色・軸	
10	葡萄とりす	〃	絹本墨画・軸	1882
11	松林瀑布山水図	〃	絹本墨画彩色・軸	1868
12	森徹山像	〃	絹本彩色・軸	
13	春秋山水図屏風	〃	紙本墨画淡彩・軸	
14	森寛斎像	森 雄山	絹本彩色・軸	

## 10. 松田正平展

1984(昭59)年10月16日～12月9日

### 趣 旨

松田正平(1913～)の作品は、対象物をそのまま写すという表現のレベルでは解しがたいものがある。しかし、無造作に塗られた色彩や描線の動きにむしろわれわれはかけがえのなさといったもの、いいかえれば、抽象絵画にも似て、まさにそこにある色や線によって生みだされた絵画空間を見るのではないだろうか。これらは、いわゆるプリミティヴさによってでなく、考えぬかれたあげくにポツと飛びだした地平の厳しさと爽快さをあわせもつものなのである。

### 出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作 品	制作年	所 蔵
1	父と子		
2	高津風景	1933	山口県立美術館
3	月夜	1956	〃
4	砧風景	1958	〃
5	高萩風景	1959	〃
6	明王		〃

番号	作品	制作年	所蔵
7	裸婦		山口県立美術館
8	山		山口県立山口博物館
9	周防灘	1981	山口県庁
10	〃	1980	山口県立美術館

※9番は10月30日まで、3、4、10番は11月13日から展示。

## 11. 香月泰男のシベリア・シリーズ

1984(昭59)年10月16日～12月9日

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	日の出	1974
2	バイカル	1971
3	デモ	1973
4	日本海	1972
5	渚〈ナホトカ〉	1974
6	復員〈タラップ〉	1966
7	〈私の〉地球	1968

## 12. 山口近代の南画家

1984(昭59)年12月11日～1985(昭60)年2月17日

### 趣旨

江戸中期以降、幕末頃まで全盛を誇った南画も、明治にはいり日本画の近代化の波の中で急速に衰退しはじめた。そのような状況の中にあつて、山口県出身で江戸以来の伝統的な南画の系統をついだ画家たちがいた。帆足杏雨に学び、豊後南画の伝統を伝えた金子鷗雨。田能村直入の弟子で、やはり竹田以来の南画風を堅持した田中柏陰。とくに師承関係はないものの官吏から南画家となり、文展の審査員となった高島北海。渡辺華山の系譜をつぐ野口幽谷に師事し、文展・帝展を中心に活躍し独特な画風を確立させ、戦後文化勲章を受章した松林桂月などである。伝統的な南画の技法の枠の中で、近代化の波をうけながら表現の独自性を試みようとした各々の南画家の姿勢を、作品をとおして見つめてみたい。

出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	群仙図	金子鷗雨	紙本墨画淡彩・軸	
2	雪景山水図	高島北海	絹本墨画彩色・軸	1916
3	日本亜伯山溪図	〃	〃	1916
4	高嶺深谷図	〃	〃	1916
5	秋景山水図	〃	〃	1917
6	蓬萊瑞色図	田中柏陰	絹本彩色・軸	1921
7	緑陰水亭図	〃	〃	1919
8	樓閣山水図屏風	〃	紙本彩色金砂子・6曲1双	

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
9	仙峡聴泉図	松林桂月	紙本墨画・軸	1929
10	愛吾廬図	〃	絹本彩色・軸	1936

※3、5、8番は12月26日まで展示。

### 13. 山口近代洋画の流れ

1984(昭59)年12月11日～1985(昭60)2月17日

#### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	絞り	永地秀太	油彩・キャンバス	1913
2	星空の富士	長谷川三郎	〃	1934
3	TWO FORMS	桂 ゆき	〃	1961
4	残された壁〈女と男〉C	中本達也	油彩・紙・板	1967
5	黄色い壁	宮崎 進	油彩・キャンバス	1976
6	踏切	山本文彦	〃	1971
7	円の響応	田中稔之	〃	1976
8	作品3	殿 敷 侃	新聞紙・シルクスクリーン・額	1981
9	作品5	〃	〃	1981
10	A STREET SCENE №13	吉村芳生	紙・インク・額	1978

### 14. 藤田隆治展

1985(昭60)年2月19日～5月12日

#### 趣 旨

豊浦郡豊北町に生れた藤田隆治は、はじめ長府に帰郷中の高島北海に師事、のち上京して野田九浦について日本画を学んだ。日本画界や青龍社展で活躍、1936年のベルリンオリンピック芸術展では3等賞を受賞した。戦後は個展を中心に作品を発表、毎日新聞社主催の現代日本美術展にも委嘱出品をしている。1965年1月57歳で逝去。戦前は平明な写実を基本とした作品を描いたが、戦後は絵具の材質感を生かした幻想的な作風に移った。

#### 出品作品

番号	作品	材質・形状	制作年
1	原始太陽	紙本彩色・額	1960
2	三眠	〃	1963
3	動的な群像	彩色・キャンバス	1964
4	魚貝石	絹本彩色・額	
5	鳥と魚	〃	
6	鷺のいる風景	紙本彩色・2曲屏風1双	
7	魚のいる風景	彩色・キャンバス	
8	有明海	紙本彩色・額	
9	格子魚	〃	

## 15. 安井賞受賞作家展

1985(昭60)年2月19日～5月12日

### 出品作品

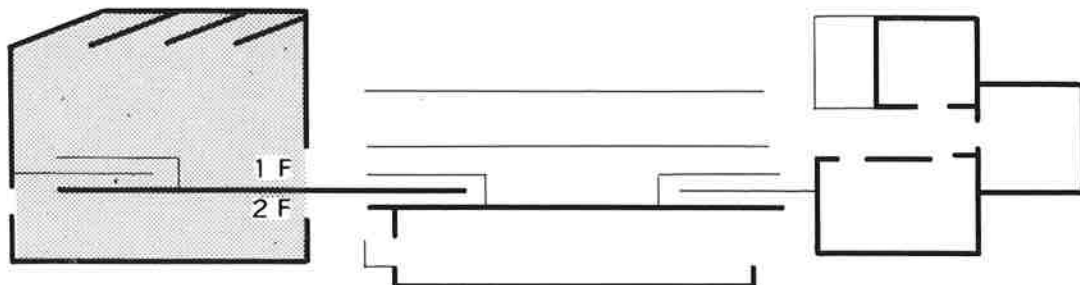
番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	憩える海人	中本達也	油彩・キャンバス	1957
2	森の声	〃	〃	1960
3	海の扉	〃	〃	1960
4	人間の声	〃	アクリルカラー・紙	1972
5	残された壁〈女と男〉C	〃	油彩・紙・板	1967
6	残された壁〈人間断片〉A	〃	コラージュ・キャンバス	1967
7	小屋	宮崎 進	油彩・キャンバス	
8	夜	〃	〃	1976
9	昼	〃	〃	1976
10	黄色い壁	〃	〃	1976
11	オートバイ	山本文彦	〃	1971
12	星の園にて	〃	〃	1977
13	木精の地(1)	〃	〃	1979



常設展示室Ⅱ

### (3) 共催展など

いわゆる共催展は、新聞社などの企画による巡回展が主なものである。原則として年2回程度開催する。展示場は、企画展示室ⅠおよびⅡを使用する。



※ 凡例 共催展記録は、名称・趣旨・展観  
カタログの順で編集されている。



# 1. 浮世絵の美

—— 錦絵の系譜・春信から清親まで ——

1983(昭58)年5月14日～6月19日

月曜日休館

主催 TYS テレビ山口・山口県立美術館

後援 山口県・山口県教育委員会

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

## 趣旨

明和2(1765)年の大小絵暦交換会をひとつの契機として、浮世絵界は飛躍的な発展をとげることになる。多色摺木版画、いわゆる錦絵の創始である。当時の浮世絵版画の技法には、墨摺絵とよばれる墨一色摺りのもの、丹絵・紅絵・漆絵とよばれる摺物に筆で彩色したもの、紅摺絵とよばれる墨の主版と紅・草の二色版とを重ねて摺ったものなどがあつたが、いずれも原始的な技法によるもので、その出来映えという点においては肉筆画に到底及ぶものではなかつた。しかし、技法の格段の進歩により肉筆画に劣らぬほどの複雑な図柄や色彩表現を可能ならしめた錦絵は、大量生産による普及効果とあいまって、肉筆画にかわり巷間に一大ブームをまきおこすことになったのである。以来錦絵は、庶民生活の変化と深くかかわりあいながら、時代とともにめまぐるしい展開を示した。

本展はその錦絵に焦点をしばり、その歴史を概観しようとするものであつた。錦絵の創始者鈴木春信をはじめとして、鳥居清長、喜多川歌麿、東洲斎写楽、歌川豊国、葛飾北斎、歌川国芳、歌川広重、小林清親など美人画、役者絵、風景画の各ジャンルにおいてそれぞれの時代に中心的な役割を果たした絵師35名の代表的錦絵170余点によって構成された。また錦絵以前の丹絵・紅絵などの初期浮世絵や、錦絵の制作過程のわかる資料も展示された。

## カタログ

編集 TYS テレビ山口

### 内容

ごあいさつ 中安閑一(テレビ山口株式会社社長)

### 図版

浮世絵について 浦上敏朗

作家略歴・作品解説 浦上敏朗

浮世絵用語解説・錦絵寸法表

出品目録



## 2. フランス近世名画展

1983(昭58)年8月9日～9月11日

月曜日休館

主催 毎日新聞社・山口県立美術館

後援 外務省ほか

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣 旨

17世紀から19世紀にかけてのフランスは、ブルボン朝の盛衰とともにあった。政治体制の確立や経済基盤の充実によって国家を安んじながら、ややたちおいていた文化領域では、たとえば美術において16世紀のフランソワ1世が国外から優れた美術家を積極的に招聘したように、宮廷美術家の優遇とアカデミーの充実によって、やがては独自の古典主義(17世紀)や華麗なロココ美術(18世紀)を生み出すようにまでなったのである。したがって近世ヨーロッパは、バロック美術として余命を保っていたイタリアやフランドル、特異な存在としてのイギリス、ドイツなど、各地にそれぞれの文化が成熟していくわけであるが、フランスにおいてこそ最も典型的な様相が展開していったと考えることができよう。それだけに絶対王制の崩壊期においても、新古典主義から浪漫主義をへて今世紀初頭にいたるまで、いわばヨーロッパの中心としてのフランスの地位はゆるぎないものであり、その優位性のゆえにまた多くの俊秀を集めることになったのである。

しかし、印象派以後の芸術には比較的親しみをもつ私たちも、その前史としての質・量ともに莫大な近世300年の伝統については、莫然とした印象しかもたないのではないだろうか。セザンヌの芸術には古典主義者ニコラ・プサンの影を認めることができ、またフォーヴィズムの旗手マチスも、シャルダン風の新古典主義から浪漫主義、印象主義(19世紀)といった重要な動きのなかで、むしろ先進的な役割を担うまでに成長していったのである。現在では、19世紀から今世紀初頭までの近代的な動向におけるフランス画壇の重要性が語られる場合が少なくないが、それに先だつ約300年のフランスの近世期の遺産とその伝統こそ、近代美術の底辺を形成した意味において再認識されなければならないだろう。なぜならば、セザンヌにおいては17世紀の古典主義静物画からスタートしたといわれるとき、近代美術が歴史を超越してはいないことを改めて認識するのである。

それはさておき、こうした歴史を鳥瞰するような企画に対して、ルーヴル美術館をはじめ、ルーアン、カーン、オルレアン、グルノーブル、モンペリエの各地の美術館が出品に協力するという現代のフランスの体制には、少なからず学ぶべきものがあるように思われる。

### カタログ

編集 神奈川県立近代美術館

#### 内容

あいさつ 毎日新聞社

メッセージ アンドレ・ロス(駐日フランス大使)

フランス絵画、栄光の300年 —17世紀から19世紀へ—

匠 秀夫(神奈川県立近代美術館長)

カーン美術館 フランソワーズ・ドベジウー(カーン美術館長)

モンペリエ・ファーブル美術館 グザヴィエ・ドシャン(モンペリエ・ファーブル美術館長)

グルノーブル美術館 —デッサン室をめぐる—

クリスティーヌ・ブルトン(グルノーブル美術館学芸員)

オルレアン美術館 ダヴィッド・オジャルヴォ(オルレアン美術館長)

ルーアン美術館 フランソワ・ベルゴ(ルーアン美術館長)

図 版

カタログ

略年表



### 3. 伝統工芸30年の歩み展

1984(昭56)年3月10日～4月15日

月曜日休館

主催 東京国立近代美術館・K R Y山口放送・朝日新聞社・山口県立美術館

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

#### 趣 旨

昭和29年、重要無形文化財(いわゆる人間国宝)の指定、認定制度が設けられ、これとほぼ同時期に日本工芸会が発足した。日本工芸会は、文化財保護委員会と共催で、「第2回日本伝統工芸展」を開催した。これは、無形文化財を紹介する目的で開催された「第1回無形文化財日本伝統工芸展」をうけたもので、第3回展は会員紹介の作家の作品も審査して展示するようになり、第7回展になって一般公募制をとり、今日に至っている。本展は昭和58年に第30回展を数えたのを機に、本展と深い関係をもつ重要無形文化財認定者の作品と、第30回までの受賞作品によって、その歩みをふりかえろうとするものである。

当初は、いわゆる日展工芸旧派集団とみられがちであった日本工芸会も、新人の登場や地方の人材の発掘などによって、活力ある制作活動を見せ、「伝統工芸」ということばのひろまりをうながすほど、戦後の工芸に大きな役割を果たした。6部門約140点の作品はいわば、そのエッセンスであり、「伝統工芸」そのものが問い直されようとしているいま、その成果と問題点をじゅうぶん提示したといえよう。

#### カタログ

編集 朝日新聞西部本社企画部

#### 内容

ごあいさつ

伝統工芸の30年 石村速雄

図版

伝統工芸と現在 鈴木健二

日本伝統工芸展と九州・山口 源弘道

用語解説

伝統工芸30年の歩み ― 年譜

日本伝統工芸展受賞作品一覽



## 4. プラハ国立美術館秘蔵名画展・Ⅲ

1984(昭59)年5月4日～6月3日

月曜日休館

主催 プラハ国立美術館・毎日新聞社・山口県立美術館・栃木県立美術館

後援 外務省・文化庁・チェコスロバキア大使館

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣 旨

チェコスロバキアは、東欧のほぼ中央に位置し、特に首都プラハは古くから交通の要所として栄えた町である。中世に栄えたモラヴィア王国は、まず東からマジャール人の侵攻にさらされ、また西から神聖ローマ帝国（のちにオーストリア帝国）に支配されるなど、長い間非スラブ民族の統制下であり、国家の独立は今世紀になってからというこうした複雑な歴史的背景が、この国の文化史の重要な要素となっていることはいうまでもない。その象徴的な出来事といえば、15世紀のフス派による宗教改革運動であり、これは単なる宗教上の運動というにとどまらず、ひいては19世紀の汎スラブ主義の精神的バックボーンになっているときえいわれている。

ところで、美術分野においては、そうした歴史によってもわかるように、ドイツ・オーストリア文化圏としての要素と民族的な要素との混交が、現代に至るまで連綿と展開することになる。たとえば近代では、印象派以来のフランス画壇の力を私たちは圧倒的なものと考えがちであるが、彼らにとってはまずベルリン、ミュンヘン、ウィーンが重要であり、そこで感性的な近さにおいてまず技法を学んだチェコ人たちは自らのスラブ人としての意識によって表現を深めていったといえよう。同じ印象派といったところで、ドイツ系のそれがそうだったように、彼らは必ずしもめくるめく色彩の乱舞する世界を描くわけではない。むしろ、沈静した大気のわずかな動きに心を動かされるといった抒情性にその自然主義的側面が表わされており、あるいは、オーストリア生まれだが、父の故郷プラハに愛着をもって優れた作品を多く描いた表現主義者のココシュカのように、軽やかな筆の運びの自由さと色彩の調和が生み出す世界は、いわゆる表現主義の作品にみられる暴力的な側面はなく、豊かな詩情に包みこまれた文学的な世界である。また、その生涯の多くをフランスに送った抽象作家のクブカにしても、しばしば音楽的な抒情性が特徴的であるとされたり、シュールレアリズムの作家トワイヤンでさえ、その幻想的形而上の世界は穏やかな象徴主義に支えられているといわれたりするところに、

いわばスラブ的な民族的特色といったものを見ることは可能であるかも知れない。

## カタログ

編集 竹山博彦 塩田純一 青木宏

### 内容

メッセージ ヨゼフ・シュワゲラ(チェコ文化副大臣)

メッセージ グスタフ・シュミット(駐日チェコ大使)

序文 イジー・コタリーク

『山椒魚戦争』,そして美術。 大島清次

チェコの近代絵画への洞察 ヴラスタ・チハーコヴァー

図版

カタログ

年表



## 5. パスキン展

1984(昭59)年8月3日～8月26日

月曜日休館

主催 読売新聞西部本社・K R Y山口放送・山口県立美術館

後援 外務省・文化庁・フランス大使館

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣旨

第一次世界大戦後、再び活気を取りもどしたパリには、さまざまな国からさまざまな個性をもった画家が移り住んできた。彼らは、その後二つの大戦の谷間にあたる20年代のパリで独自の個性を発揮することになるが、これらの画家を総称してエコール・ド・パリ(パリ派)の画家とよんでいる。彼らは、たとえば19世紀の印象派、さらに今世紀はじめのフォービズム、キュビズムの画家たちのように共働して新しい絵画様式をつくりだそうとした画家の一群ではなかった。したがって様式の上でエコール(派)という総称を用いることは難しいが、別の側面ではたしかに共通分母としてくり得るものをもっていた。たとえば、モンパルナスあたりに生活の場を求め、互いに交流があった点、また活気と頹廢とが交錯する戦後パリの精神的雰囲気なかで制作し、したがってそうした雰囲気が何らかの形で画面に反映している点で。しかし、とりわけ「パリ派」の画家に共通するのは、私的な生活、私的な体験に忠実たろうとする傾向、したがってまた、たとえば日常世界、みじかな女性や友人といったきわめて私的な現実にテーマを求める傾向である。逆説的だが、特定の思想を冠する運動や流派とまったく無縁な、いわば「一人称の芸術」に賭けた点に、彼らを「派」とよぶ根拠があり、エコール・ド・パリは、こうした「一人称の芸術」を集大成した、いわば多様の統一として、「派」という総称が与えられたとみることができる。

ところで、このエコール・ド・パリに共通する精神を他の誰れよりも忠実に生きた画家にパスキンがいた。

パスキンは、1885(明治18)年ブルガリアに生まれ、青年期にウィーン、ミュンヘン、ベルリンなどで美術を学んでいるが、その彼がはじめてパリに出たのは1905年20歳のときである。第一次パリ時代とよばれるこの時期のパスキンの仕事には、ムンクやロートレックの影響が色濃くあらわれた作品もあって、まだ習作期というべき時代にあっている。こののち第一次世界大戦のぼっ発とともに、彼はアメリカに移り住む。アメリカ時代(1914—20)のパスキンは、しばらくの間だが、ピカソやブラックがそれより数年まえに試みた分析的キュビズム風の絵画を描いている。これはアメリカ滞在初期の特徴ともいえるものだが、注目されるのは、このキュビズム風の試作がパスキンの具象画にも微妙な影響を及ぼしている点である。これらの一部はアメリカ時代につづく次のパリ時代に、パスキン独特の人物画が生まれる基礎となっている。

大戦が終結した二年後の1920年にパスキンは帰仏する。この年から1930年、縊死によって自ら45歳の生涯をとじるまでの10年間を、第二期パリ時代(1920—1930)とよんでいる。才能の開花期であると同時に晩年でもあったこの時期、パスキンの作風は二つの傾向に展開しているようにみえる。一つは、滞米時にはじまる傾向を延長させたもので、これは寓意性をもつ作品にみられる傾向だが、極端にデフォルムされた人体が異様にひしめきあう幻想的な画面をつくっている。もう一つは、裸婦をふくめた女性の肖像画にみられるもので、乳白色の色調をベースに透明感のある都会的で上品な画面傾向である。魂の内部にひそむ形而上と形而下のイメージの世界を反映したものととれるこの極端に分裂した二つの傾向は、明らかにパスキン自身の精神の内側から発露したものであり、そこに「私」を忠実に生きたパスキンの真骨頂がうかがえるとともに、彼がエコール・ド・パリの代表画家とされるゆえんがあると思われる。

今回のパスキン展は、彼が生涯愛しつづけた女性ルーシー・クロウグの息ギィ・クロウグ氏の協力で組織されたもので、60点近い日本初公開の作品をふくむ油彩約80点ほか、水彩、素描、版画など計140点が紹介された。

## カタログ

### 内容

あいさつ 主催者

メッセージ アンドレ・ロス(駐日フランス大使)

さすらいのユダヤ人 ジョルジュ・シャランソル(美術評論家  
・美術史家)

パスキンの芸術 武田厚(北海道立近代美術館 学芸部長)

パスキンの思い出 ギィ・クロウグ

カラー図版

モノクロ図版

カタログ ギィ・クロウグ 北海道立近代美術館

フォト・メモワール

年譜・展覧会歴・パスキンの足跡・参考文献



## 6. ボストン美術館蔵ミレー展

1984(昭59)年11月22日～12月23日

月曜日休館

主催 ボストン美術館・読売新聞西部本社・K R Y山口放送・山口県立美術館

後援 外務省・文化庁・アメリカ大使館・山口県・山口県教育委員会

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣 旨

1984年のはじめ、ボストン美術館は館蔵のミレーコレクションを公開し、回顧展を開いた。その出品作を日本で公開したのが今回のミレー展である。同館のミレーコレクションの概要が日本で紹介されたのは、これがはじめてだが、このミレー展は、主に二つの意味合いで興味をひいた。

一つは、コレクションそのものへの興味である。アメリカは、ミレーの生前(1814—75)にいち早くその真価をみとめ蒐集をはじめた経緯があるという。その中には、たとえば日本で戦前からもっとも親しまれてきた泰西名画の一つ、ルーブル美術館蔵の「晩鐘」のように、もともとはボストンの個人コレクターがミレーに制作を委嘱し、したがって本来はアメリカに帰すべきだったものが、さまざまな曲折を経て、結果的にはフランスにのこった作品もある。だが、こうした特例を除くと、アメリカにもたらされたミレーの作品の多くは、同国内に留まり、また、その多くはのち購入、寄贈をとおしてボストン美術館におさめられた。つまり、同館のミレーコレクションは、一世紀以上にわたるアメリカのミレー蒐集史を、ということ、アメリカのミレー理解の水準と歴史を要約しているといっても言いすぎではない。同館のミレーコレクションが全体として質的にすぐれているのは、そのためでもあろう。なかでもパステル画に優品が多かったのが、とくに印象ぶかった。

しかし、ミレーはなぜこうした一大コレクションができるほど19世紀のアメリカでうけ入れられたのだろうか。その一因には、国づくりの一環として大陸の開拓、拡張期にあったアメリカの時代状況も無縁ではないだろう。もちろん、それは当時のアメリカ人が、ミレーの作品から自然の中での生活、新教徒的清貧禁欲主義(ミレー自身は徹底した旧教徒だった)、労働の意義や神聖さなどをよみとり、それらを国づくりにあたる彼らの精神生活上の支えとしたという歴史的事情を仮定してのことであるのだが、もともと、ある画家のテーマの本質は、それがどのようによみとられ理解されることで歴史的現実となっていったかといったことは別の次元のものである。したがってそうした事情も十分考えられる。ところで、この問いはアメリカと同じようにミレーとの長い親交の歴史をもつ日本の場合にも成立つ。なぜ日本ではミレーがこれほど好まれてきたのか。これが二つめの興味である。

考えられる一つは、アメリカのミレー好みの一因とみなされるものと同じ理由である。わが国でミレーがはじめて紹介されたのは、明治20年代(1890年代)である。はじめ林忠正などの努力で紹介されたミレーは、その後、白樺派の文学活動を通じて一つの画家像として定着した。現代にもまだ通用するイメージ、つまり貧しさの中で農民と生活を共有しながら、人生を真摯に生きる人道的画家としてのミレー像である。貧しさの肯定、労働の奨励、そうしたものとしてとらえられることで、ミレーの作品(大半は複製)は、近代化にかかわる不特定多数の日本人に、労働の代償として、あるいは慰勞としての、いわば舶来のハイカラな精神的支えを提供してきたように思われる。

ところで、こうしたものに代表されるものを、ミレーの「テーマ」にかかわる次元のものとし、それが何らかの精神的な「支え」として作用したことがミレー好みの一因をなしたと仮定すれば、もう一つ考えられるのは、「かたち」の側面である。この画家の「かたち」にかかわる次元で、それが何らかの形で日本人に「共鳴」をよんだといった事情は考えられないだろうか。

この問題を考えるとき注目されるのは、ミレーの構図である。その基本傾向はすでにミレーがパリからバルビゾン村に移り住んだ直後の1950年代からみられるものだが、たとえば、斜線構図、あるいはヨーロッパでは比較的めずらしい、高くとられた地平線の構図（早い例では「種をまく人」'50年、以下、同じ意味で掲出）、描写内容の思いきった省略（'52年ごろのコンテ素描）、また広重をまねたホイッスラーの「バターシーの古橋—ノクターン」にも通じる詩情あふれる情景描写（'55年「洗濯女」）といった一連の構図あるいは描写の特徴は、ミレーの制作にあたって大きな影響源となったと考えられるレンブラント（明暗法）、ミケランジェロ（人体表現）、プサン（構図）など過去の巨匠からの遺産に負う要素を除去してもまだ余る部分である。したがって、その部分については、ミレーが天性の素質としてもっていた、いわばオリジナルなものが、あるいは上記以外の誰れかからの影響とみる他ないが、少なくとも言えることは、こうしたミレーの特徴は日本画、とくに浮世絵版画などにも類縁性があることである。ここで性急に、1860年代以降のジャポニズム（日本趣味）の盛行と関連づけて、ミレーをジャポニズム画家の先駆者と結論づけることは不可能だとしても、ミレーの絵画の基本をなす一部が、実は日本人の構図感覚とごく近いということは言えるのではないだろうか。ミレーが日本人の心をつかんでいる一因は、あるいは無意識のうちに視覚に訴えかけるこの構図感覚によるものかもしれない。ほぼ全生涯にわたって油彩26点をはじめパステル10点、版画12点、計67点が出品された。

## カタログ

### 内容

開催にあたって 主催者

ごあいさつ M. J. マンスフィールド（駐日アメリカ大使）

♪ J. フォンテーヌ（ボストン美術館長・正力松太郎記念部長）

♪ 小林興三次（日本テレビ放送取締役会長・読売新聞社代表取締役社長）

謝辞 A. R. マーフィー（ボストン美術館ヨーロッパ絵画副部長）

ジャン＝フランソワ・ミレーのボストンの後援者たち

S. フレミング（ボストン美術館絵画部リサーチ・アシスタント）

日本とミレー、その序論的考察 原田平作（京都市美術館 学芸課長）

カラー図版

作品解説 原田平作・小野迪孝・井出洋一郎

ボストン美術館所蔵のミレーの手紙 原田平作（訳）

ミレー略年譜 原田平作

Bibliography

和文ミレー関係文献目録 小野迪孝

カタログ





---

# 事業

---

## Ⅱ. 普及活動

## (1) 山口県美術展覧会

### 第37回山口県美術展覧会

会期 1983(昭58)年9月27日～10月12日

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ、常設展示室Ⅱ

#### ○運営委員

##### 美術作家

村上景介(日本画) 田口克己(洋画)  
田中米吉(彫刻) 三輪龍作(工芸)  
田中江舟(書) 三堀英夫(写真)  
冨永恒光(デザイン)

##### 学識経験者

杉本春生 山本二郎 齊藤武男

##### 県教育委員会

吉武康昌

#### ○審査員

日本画 乾 由明  
洋画 鈴木健二  
彫刻 中原佑介  
工芸 三木多聞

書 今関脩竹 甫田鶏川  
写真 緑川洋一  
デザイン 服部碩夫

#### ○受賞者

##### 〈最優秀賞〉

森と太陽 道中 享(洋画) 光の造形(カラー) 兵藤治雄(写真)

##### 〈優秀賞〉

石ぼとけ 近藤弘一(日本画) Fig.9 安間寛行(洋画)  
THE BUNCH OF THE BLACK REBEL 灰被陶管(1) 新庄貞嗣(工芸)  
殿敷 侃(彫刻) 夕暮の詩 難波慶信(写真)  
黄山谷詩 兼田代理子(書)

##### 〈奨励賞〉

調 元井元子(日本画) 因子創生3 山本昭博(洋画)  
A MESSAGE FROM THE SEA 陶管 加藤重美(工芸)  
濱野邦昭(彫刻) 曼珠沙華(A) 吉村孝徳(写真)  
柴舟の歌 田中 哲(書)

##### 〈佳作賞〉

アダージオ・眠りの時(右) 田中義文(日本画) 願 上村淑子(日本画)  
夏の窓辺 仲野 晃(洋画) SCENE(男と女) 吉村芳生(洋画)

ふたりB	古田真理子 (洋画)	作品1	佐森芳夫 (洋画)
FLYING	堀 晃 (洋画)	Fig.8	安間寛行 (洋画)
若い女Ⅱ	松原 茂 (彫刻)	海浜のロマン	亀本広高 (工芸)
萩茶碗	田原源次郎 (工芸)	窯変陶管	大和祐二 (工芸)
白つば	持溝重夫 (工芸)	李俊民詩	時重文生 (書)
杜甫詩	藤井恵美子 (書)	海鳴り	矢田久代 (書)
蘇東坡詩	佐貫陸子 (書)	鳴門潮瀾記春汀旅情	安平純子 (書)
黄庭堅詩	吉永 斉 (書)	論書表	井上功一 (書)
仲良し	浜田幸道 (写真)	生きる	梅田正一 (写真)
しらさぎ	藤井朝海 (写真)	冬の湖面	末松照男 (写真)
のがれて	松木幸康 (写真)	都市に於ける低層集合住宅	
絵本「かみひこうきⅡ」 No.1			小川晋一 (デザイン)
	弘中順一 (デザイン)		

○実 績

部 門	出 品	入 選	入 賞	展示合計	展 示 率
日 本 画	57 (78)	9 (13)	4 (5)	13 (18)	23% (23%)
洋 画	234 (272)	41 (47)	(9) (9)	50 (56)	21% (21%)
彫 刻	18 (20)	1 (2)	3 (4)	4 (5)	22% (25%)
工 芸	153 (182)	29 (30)	6 (7)	35 (37)	23% (20%)
書	200 (225)	37 (38)	9 (8)	46 (46)	23% (20%)
写 真	148 (113)	22 (18)	8 (5)	30 (23)	20% (20%)
デ ザ イ ン	28 (30)	4 (3)	2 (3)	6 (6)	21% (20%)
計	838 (920)	143 (150)	41 (41)	184 (191)	22% (21%)

( )は57年度

## 第38回山口県美術展覧会

会期 1984(昭和59)年9月11日～30日

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ、常設展示室Ⅱ

### ○運営委員

美術作家

村上景介 (日本画) 田口克己 (洋画)  
田中米吉 (彫刻) 三輪龍作 (工芸)  
田中江舟 (書) 三堀英夫 (写真)  
富永恒光 (デザイン)

学識経験者

杉本春生 山本二郎 斉藤武男  
県教育委員会  
吉武康昌

### ○審査員

日本画 乾 由明  
洋画 鈴木健二  
彫刻 中原佑介  
工芸 三木多聞  
デザイン 服部碩夫

書 今井凌雪 今関脩竹  
写真 林 忠彦

### ○受賞者

〈最優秀賞〉

凧 近藤弘一 (日本画) 白釉六角台皿 新庄貞嗣 (工芸)

〈優秀賞〉

湧出した夏 松本信子 (日本画) FISH-84-8 吉村芳生 (洋画)  
萩窯変刻線文壺 大野孝晴 (工芸) 秋居の病中(雑陶) 畑野都志子 (書)  
アシカ 岩本 進 (写真)

〈奨励賞〉

奏 元井元子 (日本画) cut back series I 荒瀬景敏 (洋画)  
FROM THE SKY TO THE SKY 窯変陶管 大和祐二 (工芸)  
濱野邦昭 (彫刻) 和歌二首 溝口喜代子 (書)  
路商 兵頭治雄 (写真) 絵本「シャワーのあとで」No.1～4  
弘中順一 (デザイン)

〈佳作賞〉

暁雪 森永葦彦 (日本画) 夏めく 古村裕子 (日本画)  
水蝕Ⅰ 山田みのる (洋画) TUPPARI (女) 平本成美 (洋画)

漁り火	堀 晃 (洋画)	まつ	河村純一郎 (洋画)
神楽群舞	川口健治 (洋画)	交響する食卓A	領家義夫 (洋画)
WOMAN'S TORSE II	兼原啓二 (彫刻)	THE PLASTICS (集積からの連続)	
鉄絵草文鉢	大井正則 (工芸)		殿敷 侃 (彫刻)
六面花器	近藤 守 (工芸)	茶碗	大和吉孝 (工芸)
BLACK423	持溝重夫 (工芸)	李白詩	奥屋恵子 (書)
萬首唐人絶句(韋応物詩)	藤村文雄 (書)	臨趙次閑 印款	井上功一 (書)
王維詩	嶋村宣子 (書)	ミラボー橋	小野千鶴子 (書)
御選金詩	池田フミヨ (書)	みよしの	田中 哲 (書)
坑夫	河田 貢 (写真)	波	川本 浩 (写真)
里の春	豊田 隆 (写真)	竹と雪	縄田良次 (写真)
橋と船	津森吉孝 (写真)	デイライト	水津昭登 (写真)
公共ポスター「自然を守ろう」		SUNSET-22	足立勝身 (デザイン)
	堀 義男 (デザイン)		

## ○実 績

部 門	出 品	入 選	入 賞	展示合計	展 示 率
日 本 画	59 (57)	9 (9)	5 (4)	14 (13)	24% (23%)
洋 画	232 (234)	40 (41)	8 (9)	48 (50)	21% (21%)
彫 刻	16 (18)	1 (1)	3 (3)	4 (4)	25% (22%)
工 芸	153 (153)	32 (29)	7 (6)	39 (35)	25% (23%)
デ ザ イ ン	21 (28)	1 (4)	3 (2)	4 (6)	19% (21%)
書	162 (200)	37 (37)	9 (9)	46 (46)	28% (23%)
写 真	151 (148)	26 (22)	8 (8)	34 (30)	23% (20%)
計	794 (838)	146 (143)	43 (41)	189 (184)	24% (22%)

( )は58年度

## (2) 現代美術展

### 山口の現代美術Ⅱ

1983(昭58)年4月16日～5月8日

月曜日、4月29日休館

主催＝山口県立美術館

会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ

鶴田日出夫	前川 謙一
武市 勝	矢儀 造嗣
西岡 文彦	山下 哲郎
原田 文明	吉松順一郎
堀 研	

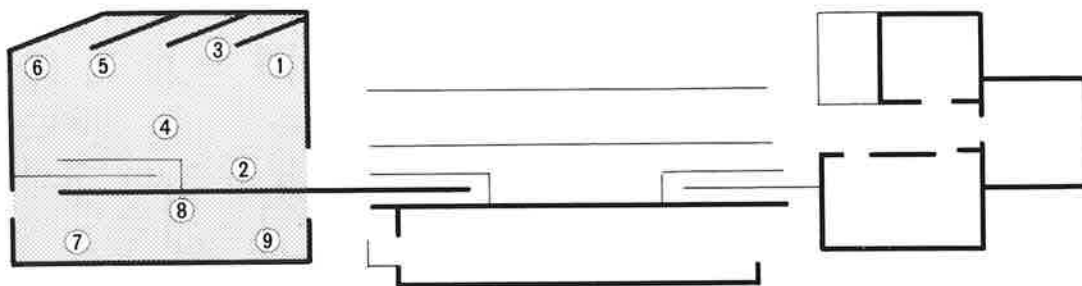
山口県立美術館  
〒753 山口市龜山町3-1  
☎0839-25-7788

#### (1)趣 旨

県ゆかりの作家たちが、いま、何をしようとしているのかを考えてみること——これが本展の目ざすところである。

ところが、個々の作家たちは、同じ時代を生きているにもかかわらず、決して同じようなことがかかずらっているわけではない。それぞれの目は、むしろまったく異なったものをとらえており、その意味では単一な美術的地平などないというべきなのかも知れないが、歴史において私たちは、たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチとラファエルとの距離を考えてみる必要があるだろう。そこでは、共通の場としての絵画という枠が想定できるとしても、その絵画的な内容はまったく違ったものであるとさえいえるものであり、とすれば、それぞれの理念がたまたま同時代的に絵画の場ですれ違ったにすぎないというべき側面をもつからである。現代美術は多様だといわれる。たしかに、レオナルドとラファエルをくくりえた絵画という枠さえ想定できないような状況はある。筆触だけの平面作品からにぎにぎしく形象の乱舞する作品まで、あるいは、ほとんど手のほどこされていらない選ばれただけの物体という作品から、建築現場の再現のような作品まで——。とはいえ、この多様さは、すべてが平均的な意味(価値)しか持ちえないということを示すものではないだろう。いずれは時間がそのへんの差異を明確にしてくれるはずだが、とりあえずの私たちは、できるだけ多くのものを吸収するほかはないのである。

## (2) 会場構成



- ①原田文明 ②矢儀浩嗣 ③山下哲郎 ④前川謙一 ⑤堀 研 ⑥嶋田日出夫 ⑦吉松順一郎 ⑧武市 勝  
⑨西岡文彦

## (3) カタログ

責任編集 高田美規雄

内容

ごあいさつ

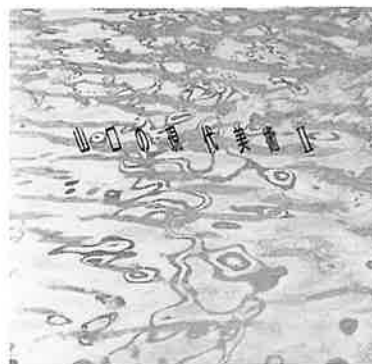
モノクロ図版

作家略歴

作家のことば

出品目録

- 大スキラ版44ページ ●アート紙90kg



## (4) 出品作品

作者	作 品	制作年	寸法(cm)
嶋田 日出男	無 題 (3点組)	1979	各180.0× 90.0
	無 題 (3点組)	1979	各180.0× 90.0
	無 題 (2点組)	1981	各130.0×130.0
	立体作品のためのドローイング	1980	18.7× 31.0
	立体作品のためのドローイング	1980	31.0× 31.0
	立体作品のためのドローイング	1980	29.7× 21.0
	立体作品のためのドローイング	1980	25.2× 14.4
	立体作品のためのドローイング	1980	16.0× 25.5
	立体作品のためのドローイング	1980	18.8× 24.0
	立体作品のためのドローイング	1980	15.8× 20.2
	立体作品のためのドローイング	1980	19.4× 20.6
	立体作品のためのドローイング	1980	19.4× 20.6
	立体作品のためのドローイング	1980	24.5× 24.5

作 者	作 品	制作年	寸法(cm)
嶋 田 日出夫	立体作品のためのドローイング	1980	25.0× 25.0
	立体作品のためのドローイング	1980	25.0× 25.0
	立体作品のためのドローイング	1980	25.0× 25.0
	平面作品のためのドローイング	1980	18.5× 34.2
	平面作品のためのドローイング	1980	18.5× 34.2
	平面作品のためのドローイング	1980	18.5× 34.2
	平面作品のためのドローイング	1981	25.0× 25.0
	平面作品のためのドローイング	1981	25.0× 25.0
	平面作品のためのドローイング	1981	25.0× 25.0
	平面作品のためのドローイング	1981	25.0× 25.0
武 市 勝	木を使ったオブジェのためのドローイング	1982	25.0× 25.0
	木を使ったオブジェのためのドローイング	1982	25.0× 25.0
	ゆめのまたゆめ II-6	1980	60.5× 51.5
	ゆめのまたゆめ III-1 帯	1981	65.0× 65.0
	ゆめのまたゆめ III-2 春狂	1981	60.0× 60.0
	みなみ風 1	1982	63.5× 91.0
	みなみ風 2	1982	63.5× 91.0
	ゆき雲	1983	60.0× 60.0
	瑞穂の国にて 1	1983	65.0× 38.0
	瑞穂の国にて 2	1983	84.5×174.2
西 岡 文 彦	瑞穂の国にて 3	1983	84.5×121.0
	夜が弾く	1978	72.0× 48.0
	右から東風	1978	72.0× 48.0
	道士像 I	1979	70.0× 45.0
	道士像 II	1979	70.0× 45.0
	道士像 III	1979	70.0× 45.0
	道士像 IV	1979	70.0× 45.0
	煉丹術の兄弟 I	1983	70.0× 45.0
	煉丹術の兄弟 II	1983	70.0× 48.0
	煉丹術の兄弟 III	1983	70.0× 48.0
原 田 文 明 堀 研	対発生	1979	56.0× 41.0
	原形態	1979	56.0× 41.0
	結界 + 北辰	1980	41.0× 28.0
	結界 + 北辰	1980	41.0× 28.0
	彦 + 姫	1980	38.0× 28.0
	彦 + 姫	1980	38.0× 28.0
	聖痕譜——水の相	1983	62.0× 42.0
	聖痕譜——火の相	1983	62.0× 42.0
	聖痕譜——天の相	1983	62.0× 42.0
	矛盾律	1983	会場制作
前 川 謙 一	風の中ゆく	1981	182.0×454.5
	大地	1982	227.0×182.0
	風の中ゆく 2	1983	227.0×182.0
前 川 謙 一	流動するもの	1979	130.5×130.5
	流動するもの	1979	162.5×162.5
	流動するもの	1980	162.5×162.5
	流動するもの	1981	162.5×162.5



作者	作品	制作年	寸法(cm)
前川 謙一	流動するもの	1982	162.5×162.5
矢儀 浩嗣	Landscape 日常	1981	162.0×162.0
	Landscape 密室	1981	162.0×162.0
	Routine	1982	162.8×162.3
	First Class	1982	97.0×193.8
	8:00 A.M. Monday	1982	112.3×194.0
	4:00 P.M. Afternoon	1982	130.5×193.8
山下 哲郎	8:00 P.M. Night	1982	130.5×162.0
	海岸物語	1982	181.7×227.0
	記憶の中 YuRa-No.3	1982	181.8×227.0
	YuRより浮島遠望	1983	182.4×227.5
	記憶の中 YuRa-No.5	1983	194.0×194.3
吉松 順一郎	3 BOXES	1978	45.0×59.0
	A—A'	1978	45.5×59.0
	Magic Box	1978	45.2×59.0
	A—a,a'	1978	45.2×59.0
	6 Strings	1978	45.2×59.0
	BIND	1981	58.5×44.8
	PASTE UP	1981	71.0×54.8
	By Myself	1982	58.3×43.0
	3 STRATA	1982	58.3×43.0
	BEHIND THE SCENES No.1	1982	58.3×43.0
	ASTRAY	1982	58.3×44.8
THROUGH	1982	130.0×96.7	

### (5)展評など

「山口文化、現代美術の概念問う」 読売新聞 / 58・4・17

「点描、地域にゆかりのある作家の活動を紹介」 朝日新聞 / 58・4・23

「山口の現代美術Ⅱ」を見て 中国新聞 / (寺本) 58・4・26



## 現代の陶芸Ⅱ

——いま、大きなやきものになにが見えるか——

1984(昭59)年10月13日～11月11日

月曜日休館

主催＝山口県立美術館

会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ

屋外



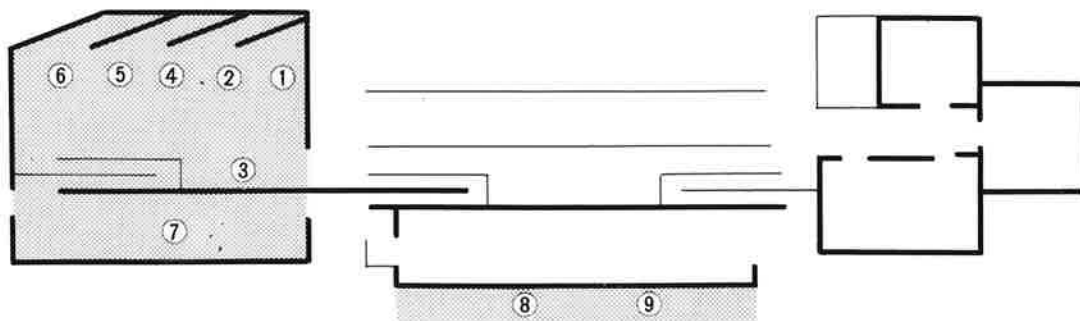
### (1)趣 旨

本展は、1982年の「現代の陶芸Ⅰ—いま、土と火でなにが可能か」をうけたものである。Ⅰが、コンセプトに空間を土と火で構成したのをうけて、今回は、「大きい」というテーマを設定した。陶芸というジャンルの現状が、小手先の技術や装飾性にはしりがちなのは、わが国の風土性ともいえる独特の陶芸観に、その原因があるのではあるまいか。「大きい」というテーマは、これに対するひとつのアンチテーゼのつもりでもある。技術や思いつきへのよりかかりのない構築力、実在感の獲得こそが、いま土と火の造形の世界に要求されているのではなからうか。

「大きい」という莫たるテーマを具体化するために美術館として、3つの作品を仕掛けた。辻晋堂の昭和30年前後の作品、ピーター・ボーコスの最新作、千葉県立千葉盲学校の生徒たちの作品64点である。

井澤、佐藤、杉浦、中村、西村、三輪の6作家はそれぞれの方法でこのテーマにいどんだ。たとえばそれは、私的構造体として館にとりつき、原色の廃物屏風となり、陶による岩石としてあらわれ、名画の新たな立体化や、木の密封燃焼による有機体化、さらには館内に陶土による道の再構成といったあらわれ方までした。そして、それらに目をこらすとき、それが陶芸とよべるかどうかの議論などは無意味であり、ただ同時代へのメッセージとしての思いがいかにか実現されているかをこそ問うべきであることに気付かされる。

## (2)会場構成・出品作品



- ①西村陽平「燃えない木」 ②ピーター・ボーコス「スタック」「プレート」「アイス・バケット」計8点  
③辻晉堂「沈黙」「山の人(山の男)」「牡牛(牛)」「寒山」「捨得」「馬と人」「巡礼者(寒拾)」  
④三輪和彦「デッド・エンド」 ⑤中村康平「草上の昼食'84」 ⑥佐藤敏「陶醉記」 ⑦千葉県立千葉盲  
学校生徒作品計64点 ⑧井澤乙也「体癖」 ⑨杉浦康益「陶による石の群」

## (3)カタログ

責任編集 榎本 徹

内容

ごあいさつ

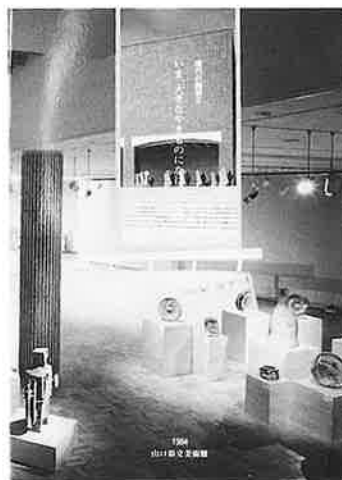
カラー図版

モノクロ図版・メッセージ

展覧会ノート ―いま、大きなやきものになにが見えるか―

榎本 徹

- A 4版52ページ
- アート 110kg / 4色オフセット4ページ、  
1色オフセット48ページ



## (4)展評など

新聞(報道記事をのぞく)

展評

“枠”取り払い現代を読む 毎日新聞(西部) / (晴) 59・10・25

ユニークで問題意識に富む自主企画 朝日新聞(西部) / 源弘道編集委員 59・10・27

雑誌

地方美術館がいま何ができる 山口県立美術館のチャレンジ

陶の可能性に挑む 大きいがゆえに見えるもの 季刊炎芸術10 / 榎本 徹 60・4・1

### (3) 美術講演会および講座

自主企画展、県美展、共催展等の展覧会事業の内容理解と普及をはかるため、下記の講演会および講座を行なった。

#### 美術講演会

日 時 1983(昭58)年10月30日(日) 13時30分～15時30分

場 所 美術館講座室

講 師 西野新川(日本画家)

演 題 師・松林桂月を語る

参集人員 120人

日 時 1985(昭60)年1月15日(火) 13時30分～15時

場 所 美術館講座室

講 師 高橋玄洋(劇作家)

演 題 小林和作を語る

参集人員 100人

#### 美術講座

(58年度)

年月日	58. 8. 21	58. 10. 2	58. 10. 9	58. 10. 9	59. 1. 15
講 師	山口芸術短期大学助教授 福田 東 亜	作家(洋画) 服 部 碩 夫	作家(書) 田 中 江 舟	作家(写真) 三 堀 英 夫	作家(陶彫) 三 輪 龍 作
演 題	フランスの絵画	県美展の出品作品 について(洋画)	県美展の出品作品 について(書)	県美展の出品作品 について(写真)	私と彫刻
参集人員	30人	60人	50人	50人	90人

(59年度)

年月日	59. 6. 24	59. 9. 16	59. 9. 16	59. 9. 22	59. 10. 13
講 師	大阪大学教授 武 田 恒 夫	作家(洋画) 服 部 碩 夫	作家(写真) 三 堀 英 夫	作家(書) 田 中 江 舟	京都大学教授 乾 由 明
演 題	桃山絵画について	県美展の出品作品 について(洋画)	県美展の出品作品 について(写真)	県美展の出品作品 について(書)	現代陶芸の動向
参集人員	90人	70人	50人	50人	70人

#### 実技講座

参加する開かれた美術館活動の一環として実技講座を次のとおり行った。

上級(58年度)

部 門	講 師	期 間	参集人員
洋 画	富 永 恒 光	7月20日(木)～25日(火)	40人
版画(エッチング)	殿 敷 侃	7月26日(水)～31日(月)	21人
日 本 画	中 村 脩	11月7日(月)～12日(土)	34人

上級 (59年度)

部 門	講 師	期 間	参集人員
洋 画	富 永 恒 光	7月20日(金)~25日(水)	39人
彫 塑	濱 野 邦 昭	7月29日(日)~8月3日(金)	12人
日 本 画	中 村 脩	8月20日(月)~25日(土)	35人



美術講演会

実技講座(日本画)



#### (4) 美術館ニュース「天花（てんげ）」

館活動の状況報告、とくに企画展の案内を中心に、年4回、12ページの構成で発行している。  
1983・84（昭58・59）年度は16号から23号まで発行された。

##### 第16号（58・7・1発行）

館蔵品紹介「四季花鳥図」狩野松栄 山本英男

フランス近世名画展 安井雄一郎

伝統の構造 ヨーロッパで考えたこと(2)

—イギリスを觀た— 殿敷 侃（美術家）

山口美術家伝(11) 十二代坂倉新兵衛 河野良輔

太陽道を吹きぬけた風

イタリア視察旅行報告(上) 高田美規雄

##### 第17号（58・11・1発行）

館蔵品紹介「愛吾廬図」松林桂月 菊屋吉生

松林桂月展—その墨と色彩の妙— 菊屋吉生

伝統の構造 ヨーロッパで考えたこと(3)

—落書きとニューヨーク— 殿敷 侃（美術家）

太陽道を吹きぬけた風

イタリア視察旅行報告(下) 高田美規雄

研究ノート 雲谷派画人メモ(二)

等顔雑考(上) 山本英男

##### 第18号（59・3・1発行）

館蔵品紹介「A STREET SCENE No.21」吉村芳生 高田美規雄

伝統工芸30年の歩み展 榎本 徹

開館五年次までの自主企画から 足立明男

研究ノート 雲谷派画人メモ(二)

等顔雑考(下) 山本英男

##### 第19号（59・3・31発行）

館蔵品紹介「カミガミトモガミ」最上寿之 米屋 優

プラハ国立美術館秘蔵名画展・Ⅲ 高田美規雄

常設展示の試み 郷土の陶芸シリーズ 榎本 徹

山口美術家伝(12) 巖島虹石 菊屋吉生

美術館この一年 1983・4～1984・3



## 第20号 (59・6・1発行)

寄託品紹介「山水図」雲谷等顔 山本英男

雲谷等顔と桃山時代 山本英男

モンパルナスの愛と死

生誕100年 パスキン展 安井雄一郎

天花二〇号のあゆみ



## 第21号 (59・10・11発行)

館藏品紹介「砂の聖書」荒木高子 山本英男

いま、大きなやきものになにが見えるか 榎本 徹

香月泰男の「祈る人」とミレー 安井雄一郎

山口県美術展覧会のあゆみI 足立明男

山口美術家伝(13) 十四代坂倉新兵衛 河野良輔



## 第22号 (60・1・1発行)

館藏品紹介「春の海」小林和作 高田美規雄

「小林和作・須田国太郎」展 高田美規雄

研究ノート 雲谷派画人メモ(三)

雲谷等益の蘆鶴図屏風 山本英男

見ることの 描くことの信憑性 それは自己

存在のリアリティ 自己存在の信憑性を勝ち

取るのです 吉村芳生 (作家)



## 第23号 (60・3・1発行)

館藏品紹介「動的な群像」藤田隆治 菊屋吉生

ピカソ展 長女マヤ・ピカソの秘蔵コレクション 安井雄一郎

山口県美術展覧会のあゆみ II 足立明男

旅の終わりに 三輪龍作 (作家)

藤田隆治評伝 影山純夫 (山口大学講師)



## (5) 移動美術館

館蔵品を県下各地で広く展覧し、美術文化の振興に寄与するという趣旨のもとで移動美術館を開催した。

### 「現代の美術」

1983(昭58)年11月2日～6日 阿武町中央公民館  
同 年11月9日～13日 玖珂町町民センター

#### (1)趣 旨

「現代の美術」をテーマに、絵画、彫刻、工芸の各分野で多様な展開を見せている現代美術の一端を紹介した。

#### (2)カタログ

大スキラ版24ページ(表紙とも) / オフセット4色2ページ・単色20ページ

#### (3)出品作品

番号	作 品	作 者	制作年	寸 法	技法・材質
1	原 始 太 陽	藤田 隆治	1960	131.6×120.7	紙本彩色・額
2	三 眠	〃	1963	91.5×182.2	〃
3	動的な群像	〃	1964	162.0×260.4	キャンバス・彩色
4	作 品	桂 ゆき	1949	131.0×161.5	油彩・キャンバス
5	異 邦 人	〃	1961	254.3×173.0	油彩・紙・キャンバス
6	つぶされた	〃	1973	131.0× 90.0	油彩・紙・板
7	作 品	〃	1979	116.5×182.2	コラージュ・板
8	動	田中 稔之	1958	183.8×251.0	油彩・キャンバス
9	地平のさすらい	〃	1965	227.3×162.3	〃
10	円の光景	〃	1979	194.0×259.5	〃
11	海 の 扉	中本 達也	161	111.0×193.0	〃
12	残された壁(女と男)C	〃	1967	166.6×181.9	油彩・紙・板
13	作 品 1	殿敷 侃	1981	160.0× 95.0	シルクスクリーン・紙
14	作 品 2	〃	〃	〃	〃
15	A STREET SCENE No.7	吉村 芳生	1978	162.3×112.0	インク・紙
16	ドッキング No.22	田中 米吉	1975	14.5×126×126	プラスチック・ グラスファイバー
17	マ ス ク	澄川 喜一	1977	67.5×26.0×18.2	木(ケヤキ)
18	そりとそぎ	〃	1980	66.5×64.8×35.9	〃
19	そりのあるかたち	〃	〃	35×200×56	〃
20	Wind of Gray	濱野 邦昭	1980	45.0×80.0×62.0	ブロンズ
21	予 感	三輪 龍作	1977	37.0× 46.0	陶
22	LOVE (ハイヒール)	〃	1980	15点組(台1組)	〃
23	花 器	〃	1982	54.2×12.0×64.0	〃
24	COPY' 82	三島喜美代	1982	10点組ダンボール (新聞・チラシ)	〃
25	赤ちゃんの帽子 <sup>ヘルメット</sup>	里中 英人	1973	7点組	〃
26	証 言	鯉江 良二	1973	51.9×52.0×24.4	〃
27	表層・深層	星野 暁	1982	7点組	〃



#### (4) 参観者内訳

日	場所	阿武町中央公民館
11月2日		397 (人)
3日		162
4日		502
5日		398
6日		586
計		2,045 (人)

日	場所	玖珂町民センター
11月9日		205 (人)
10日		847
11日		510
12日		280
13日		292
計		2,134 (人)

### 「風景との対話」

1984(昭59)年10月17日～21日

下松市立図書館

同 年10月24日～28日

錦町ふるさとセンター

#### (1) 趣旨

山、海、里、都市のそれぞれに取材しながら、時代や作家の資質に応じてさまざまな表現傾向や媒体で描かれた大正期から今日までの風景画を紹介した。

#### (2) カタログ

大スクラ版24ページ(表紙とも) / モノクロ・ダブルトーン20ページ

#### (3) 出品作品

番号	作品	作者	制作年	寸法	技法・材質
1	風景	永地 秀太		41.3×32.0	油彩・キャンバス
2	星空の富士	長谷川三郎	1934	130.0×162.2	〃
3	帰り道	桂 ゆき	1934	55.0×90.8	〃
4	風景	錦 義一郎		73.0×91.0	〃
5	月夜	松田 正平	1956	116.8×81.0	〃
6	網船	澤野 文臣	1957	187.3×127.2	紙本彩色
7	砧風景	松田 正平	1958	45.7×60.9	油彩・キャンバス
8	魚人	中本 達也	1958	105.1×131.0	〃
9	ホロンバイル	香月 泰男	1960	72.8×116.7	〃
10	野生	田中 稔之	1960	191.6×250.5	〃
11	岩の蛾	中本 達也	1961	53.2×45.6	〃
12	漁港	小野 具定	1965	181.8×258.8	紙本彩色
13	秋晴	小林 和作		80.7×100.4	油彩・キャンバス
14	海老と魚	藤田 隆治		101.3×124.4	紙本彩色
15	踏切	山本 文彦	1971	181.8×227.3	油彩・キャンバス
16	海拉爾	香月 泰男	1973	72.9×116.1	〃
17	湖底の村	西野 新川	1974	195.8×189.0	紙本彩色
18	流木	三浦 俊輔	1975	130.2×97.0	油彩・キャンバス

番号	作品	作者	制作年	寸法	技法・材質
19	ランドスケープ	宮崎 進	1976	91.0× 72.7	油彩・キャンバス
20	パーミヤン回想	入江 一子	1977	181.8×227.3	〃
21	A STREET SCENE No.21	吉村 芳生	1978	162.3×112.0	紙・インク
22	円の光景	田中 稔之	1979	194.0×259.5	油彩・キャンバス
23	周防灘	松田 正平	1980	80.4×116.7	〃
24	作品 3	殿敷 侃	1981	163.0× 81.0	新聞紙・シルクスクリーン
25	作品 4	〃	〃	〃	〃

#### (4) 参観者内訳

日	場所	下松市立図書館
10月17日		396 (人)
18日		268
19日		584
20日		603
21日		623
計		2,474 (人)

日	場所	錦町ふるさとセンター
10月24日		219 (人)
25日		413
26日		102
27日		291
28日		149
計		1,174 (人)



阿武町にて

錦町にて



---

# 事業

---

## Ⅲ. 入館者数一覧

展覧会名	開催期間	個 人							
		大 人		高 大		小 中		小 計	
		料 金	人 数	料 金	人 数	料 金	人 数		
常 設 展	58. 4. 1 ~ 59. 3.31(303)	150	19,832	100	1,508	70	2,337	23,677	
山口の現代美術Ⅱ	58. 4.16 ~ 58. 5. 8( 19)	600	1,817	400	391	300	176	2,384	
第 37 回 県 美 展	58. 9.27 ~ 58.10.12( 14)	250	4,540	200	251	150	226	5,017	
松 林 桂 月 展	58.10.22 ~ 58.11.27( 31)	600	7,862	400	213	300	362	8,437	
近・現代日本の彫刻	58. 1. 6 ~ 59. 2.12( 33)	600	3,753	400	405	300	473	4,631	
伝統工芸30年の歩み展	59. 3.10 ~ 59. 3.31 / (59. 4.15) 19	800	8,216	600	424	400	781	9,421	
浮世絵の美	58. 5.14 ~ 58. 6.19( 32)	800	24,623	600	1,735	400	2,026	28,384	
美術文化協会展	58. 6.22 ~ 58. 6.26( 5)	500	279			300	25	304	
日本現代工芸美術展	58. 6.30 ~ 58. 7.17( 16)	500	1,576	300	85	200	113	1,774	
日本国際美術家協会展	58. 7.21 ~ 58. 7.28( 7)								
全国高校文化祭	58. 8. 2 ~ 58. 8. 4( 3)								
フランス近世名画展	58. 8. 9 ~ 58. 9.11( 31)	800	36,623	600	4,531	500	8,192	49,346	
山口県学校美術展	58.12. 1 ~ 58.12. 4( 4)								
山口芸術短期大学卒業制作展	59. 2.16 ~ 59. 2.19( 4)								
山口大学卒業制作展	59. 2.23 ~ 59. 2.26( 4)								
58 年 度 計			109,121		9,543		14,711	133,375	
常 設 展	59. 4. 1 ~ 60. 3.31(302)	150	21,973	100	1,403	70	1,896	25,272	
伝統工芸30年の歩み展	59. 4. 1 ~ 59. 4.15( 15)	800	7,866	600	199	400	841	8,906	
雲谷等顔と桃山時代展	59. 6.12 ~ 59. 7.22( 36)	700	4,239	500	326	300	161	4,726	
第 38 回 県 美 展	59. 9.11 ~ 59. 9.30( 16)	250	6,440	200	196	150	310	6,946	
現代の陶芸Ⅱ	59.10.12 ~ 59.11.11( 27)	700	1,668	500	102	300	116	1,886	
小林和作・須田国太郎展	60. 1. 5 ~ 60. 2.10( 32)	700	3,561	500	169	300	217	3,947	
伝統工芸新作展	59. 4.21 ~ 59. 4.29( 8)	300	893	200	27	100	35	955	
プラハ国立美術館秘蔵名画展Ⅲ	59. 5. 4 ~ 59. 6. 3( 27)	800	30,099	600	3,792	500	4,539	38,430	
バスキン展	59. 8. 3 ~ 59. 8.26( 21)	800	6,220	600	830	400	1,339	8,389	
山口県学校美術展	59.11.15 ~ 59.11.18( 14)								
ミレ一展	59.11.22 ~ 59.12.23( 27)	900	74,957	600	7,409	400	14,459	96,825	
山口大学卒業制作展	60. 2.14 ~ 60. 2.17( 4)								
山口芸術短期大学卒業制作展	60. 2.21 ~ 60. 2.24( 4)								
二 紀 展	60. 2.26 ~ 60. 3. 3( 9)	500	985	300	116			1,101	
山口県書道連盟選抜展	60. 3.23 ~ 60. 3.31( 9)								
59 年 度 計			158,901		14,569		23,913	197,383	

团 体							計			合 計	累 計
大 人		高 大		小 中		小 計	有 料	無 料	招 待		
料 金	人 数	料 金	人 数	料 金	人 数						
120	1,579	80	37	50	1,818	3,434	27,111	410	0	27,521	27,521
500	145	300	0	200	178	323	2,707	107	280	3,094	30,615
200	127	150	218	100	119	464	5,481	90	1,707	7,278	37,893
500	1,215	300	197	200	147	1,559	9,996	212	1,707	11,915	49,808
500	44	300	402	200	495	941	5,572	98	829	6,499	56,307
600	285	400	0	200	28	313	9,734	107	1,318	11,159	67,466
600	1,078	400	35	200	3	1,116	29,500	0	12,854	42,354	109,820
							304	44	168	516	110,336
400	71	200	862	100	0	933	2,707	30	1,983	4,720	115,056
								1,433		1,433	116,489
								2,349		2,349	118,838
600	533	400	4	300	29	566	49,912	201	7,318	57,431	176,269
								3,879		3,879	180,148
								1,276		1,276	181,424
								832		832	182,256
	5,077		1,755		2,817	9,649	143,024	11,068	28,164	182,256	
120	1,046	80	11	50	1,681	2,738	28,010	743	0	28,753	28,753
600	270	400	23	200	26	319	9,225	61	2,381	11,667	40,420
600	803	400	64	200	1	868	5,594	10,010	1,407	17,011	57,431
200	376	150	255	100	56	687	7,633	98	1,327	9,058	66,489
600	249	400	0	200	88	337	2,223	96	687	3,006	69,495
600	95	400	27	200	0	122	4,069	68	952	5,089	74,584
200	29	100	44	50	92	165	1,120	30	444	1,594	76,178
600	760	400	579	300	2,000	3,339	41,769	620	9,619	52,008	128,186
600	62	400	31	200	31	124	8,513	0	4,489	13,002	141,188
								4,718		4,718	145,906
700	2,061	400	1,255	300	807	4,123	100,948	1,361	2,449	104,758	250,664
								1,200		1,200	251,864
								1,146		1,146	253,010
							1,101	174	1,621	2,896	255,906
								1,912		1,912	257,818
	5,751		2,289		4,782	12,822	210,205	22,237	25,376	257,818	



---

# 收集資料

---

## I. 館藏品貸出利用狀況

作品	作者	期間	貸出先	展覧会名等	備考
萩編笠水指	三輪 休和	58. 8.22~58. 9.30	福井県立美術館	現代日本の工芸 —その歩みと展開	
萩筆洗切茶碗	〃	〃	〃	〃	
萩茶碗	三輪 休雪	〃	〃	〃	
萩耳付水指	〃	〃	〃	〃	
予感	三輪 龍作	〃	〃	〃	
鉢〈雷童〉	〃	〃	〃	〃	
証言	鯉江 良二	〃	〃	〃	
羅漢図	狩野 芳崖	58. 9. 6~58.10.31	三重県立美術館	近代日本画の歩み展	
榛名湖	小林 和作	58. 9.24~58.11.13	群馬県立近代美術館	近代美術にみる群馬	
猿が京附近	〃	〃	〃	〃	
上州丸沼	〃	〃	〃	〃	
白根山噴火口	〃	〃	〃	〃	
萩編笠水指	三輪 休和	58.10. 3~58.10.27	朝日新聞社	人間国宝・ 三輪休和遺作展	
萩筆洗切茶碗	〃	58.10. 3~58.11.30	〃	〃	
萩沓茶碗	〃	〃	〃	〃	
萩酒盃	〃	〃	〃	〃	
日本海	香月 泰男	58.11. 9~59. 1.14	下関市立美術館	海・そのイメージ と造形	
春の海	小林 和作	〃	〃	〃	
海の扉	中本 達也	58.11.15~59. 1.14	〃	〃	
作品 1	殿敷 侃	59. 2.23~59. 3.31	福岡市美術館	明日への造形 九州第4回展	
作品 2	〃	〃	〃	〃	
作品 3	〃	〃	〃	〃	
作品 4	〃	〃	〃	〃	
作品 5	〃	〃	〃	〃	
八臂弁才天図	狩野 芳崖	59. 4. 1~59. 5.19	板橋区立美術館	近代の仏画 —もうひとりの 近代仏師たち—	
羅漢図	〃	〃	〃	〃	
星空の富士	長谷川三郎	59. 4.20~59. 7. 3	東京富士美術館	富士の名画	
明王	松田 正平	59. 6.28~59. 7.31	新潮文芸振興会	第16回日本芸術大 賞記念展	
周防灘	〃	〃	〃	〃	
餓	香月 泰男	59. 7.13~59. 8.31	福島県立美術館	生きること・描くこと 戦後の名作にみる人間像	



作 品	作 者	期 間	貸 出 先	展 覧 会 名 等	備 考
欲張り婆さん	桂 ゆき	59. 7.13~59. 8.31	福島県立美術館	生きること・描くこと 戦後の名作にみる人間像	
残された壁 (女と男)C	中本 達也	〃	〃	〃	
憩える海人	〃	〃	〃	〃	
洪 水	〃	〃	〃	〃	
風	香月 泰男	〃	〃	〃	寄託品
鳩と青年	〃	〃	〃	〃	〃
新 聞	〃	〃	〃	〃	〃
涅 槃	〃	〃	〃	〃	〃
朝 陽	〃	59. 9.28~59.12. 3	東京富士美術館	近代日本洋画200年展	
証 言	鯉江 良二	59.10. 7~59.12.21	東京都美術館	現代美術の動向Ⅲ 1970年以降の美術	
作 品 2	殿敷 侃	59.11.26~60. 2.15	福岡市美術館	九州の版画展	
作 品 5	〃	〃	〃	〃	
八臂弁才天図	狩野 芳崖	59.12.25~60. 2.20	下関市立美術館	狩野芳崖の系譜	
四季耕作図屏風	〃	〃	〃	〃	
呂洞賓鉄拐図	〃	〃	〃	〃	
羅 漢 図	〃	〃	〃	〃	
別	香月 泰男	〃	〃	香 月 泰 男	
青の太陽	〃	〃	〃	〃	
(私の)地球	〃	〃	〃	〃	
日 本 海	〃	〃	〃	〃	
冬(ペチーカ)海	〃	〃	〃	〃	
朕	〃	〃	〃	〃	
山水図巻	雪 舟	60. 1.10~60. 6.30	文 化 庁	近世水墨画展	
移動美術館作品 25点		60. 2.19~60. 2.26	岩国市教育委員会	風景との対話	本館企画の「移動 美術館」作品一括
運 ぶ 人	香月 泰男	60. 2.25~60. 8.24	国際交流基金	近代日本洋画展	



# 収集資料

## Ⅱ. コレクション

※ 凡例 以下の目録は1983(昭58)年4月から1984(昭59)年3月までに収集された館蔵品をすべて網羅したものである。作品の整理方針および個々のデータの記録法は『山口県立美術館蔵品目録1979』に準じている。すなわち、作品は日本画(J)・洋画(O)・水彩画(W)・版画(P)・工芸(C)・資料(M)の順で編集され、また個々のデータについては整理番号・作者・生没年・タイトル・制作年・素材技法・寸法(cm)・サイン等の位置・収蔵年とその経緯の順で記録されている。整理番号は『山口県立美術館年報(昭和56~57年)』につづく通し番号とした。

日本画(Japanese-style paintings)



J-79

朝倉南陵 ASAKURA, Nanryō  
1756~1843  
孔雀図 Peacocks  
1828  
絹本彩色・軸 153.0×81.1  
右下に落款・印  
昭和59年度 購入



J-80

雲谷等顔 UNKOKU, Tōgan  
1547~1618  
群馬図 Horses  
紙本墨画淡彩・六曲屏風一双  
各153.5×354.0  
各隻上端に2印  
昭和59年度 購入



J-81

雲谷等哲 UNKOKU, Tōtetsu  
1631~1683  
花鳥図 Flowers and Birds  
絹本彩色・軸(双幅) 各90.7×35.5  
各幅上部に落款・印  
昭和58年度 購入



J-82

狩野芳崖 KANŌ, Hōgai  
1828~1888  
山水図 Landscape  
紙本墨画淡彩・軸 125.4×53.3  
右上に落款・2印  
昭和58年度 購入



J-83

佐々木縮往 SASAKI, Syukuō  
1649~1734  
塞外射獵図 Hunting of the Huns  
1729  
絹本彩色・画卷 42.3×1027.5  
卷末に落款・2印  
昭和59年度 購入



J-84  
 中野弘彦 NAKANO, Hirohiko  
 1927~  
 芭蕉の雨 Rain of Bashō  
 1977  
 紙本彩色・額 245.0×180.0  
 昭和58年度 購入



J-85  
 松林雪貞 MATSUBAYASHI, Settei  
 1880~1970  
 雁来紅朝顔図  
 Amaranths and Morning Glories  
 1915  
 絹本彩色・軸 178.1×71.4  
 右上に賛・2印、左下に印  
 昭和58年度 寄贈



J-86  
 森 寛斎 MORI, Kansai  
 1814~1894  
 源義家像 Portrait of Minamoto Yoshiie  
 1885  
 紙本彩色・軸 114.0×49.8  
 右下に落款・2印  
 昭和59年度 購入



J-87  
 不詳  
 山水図 Landscape  
 紙本墨画淡彩金砂子・六曲屏風一双  
 各150.5×361.0  
 各隻端に印  
 昭和58年度 購入

J-88  
 不詳  
 雪舟様山水人物図  
 Landscape with Figures  
 紙本墨画淡彩・軸  
 124.5×263.0  
 左上に落款・印  
 昭和58年度 購入

油彩画(Oil paintings)



O-134

桂 ゆき KATSURA, Yuki

1913~

Two Forms

1961

油彩・キャンバス 126.2×204.0

右下にサイン

昭和58年度 購入



O-135

小林和作 KOBAYASHI, Wasaku

1888~1974

春の山 Mountain in Spring

1951

油彩・キャンバス 52.0×100.5

右下にサイン

昭和59年度 購入



O-136

小林和作 KOBAYASHI, Wasaku

1888~1974

山湖 Mountain and Lake

1955

油彩・キャンバス 80.5×100.0

左下にサイン

昭和59年度 購入



O-137

服部碩夫 HATTORI, Sekio

1924~

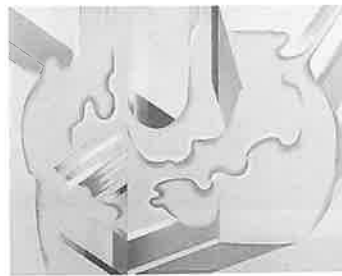
83-105-2

1983

油彩・キャンバス 182.2×227.3

下にサイン

昭和59年度 購入



O-138

服部碩夫 HATTORI, Sekio

1924~

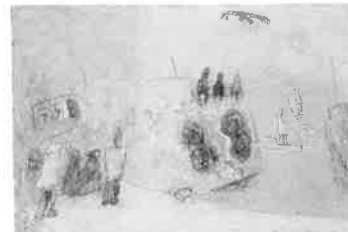
84-163

1984

油彩・キャンバス 182.2×227.3

下にサイン

昭和59年度 購入



O-139

松田正平 MATSUDA, Syōhei

1913~

周防灘 The Sea of Suhō

1980

油彩・キャンバス 80.4×116.7

左下にサイン

昭和58年度 購入

彫刻(Sculptures)



S-48

植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~1984  
トルソ Torso  
木 24×15×51  
昭和58年度 購入



S-49

植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~1984  
トルソ Torso  
木 34×19×58  
昭和58年度 購入



S-50

植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~1984  
トルソ Torso  
木 56×31×100  
昭和58年度 購入



S-51

川口政宏 KAWAGUCHI, Masahiro  
1936~  
作品Hシリーズ Work. H-Seiries  
1978  
ステンレススチール 高152  
昭和58年度 購入



S-52

中野四郎 NAKANO, Shirō  
1901~1968  
裸女立像 Statue  
1932  
木 高162.5  
昭和58年度 購入



S-53

最上寿之 MOGAMI, Hisayuki  
1936~  
カミガミトモガミ Kamigami to Mogami  
1979  
木 高170  
昭和58年度 購入

## 工芸(Crafts)



C-73

佐藤 敏 SATŌ, Satoshi

1936~

モナリザ La Giocanda

1976

土(黒陶) 50.0×51.0×10.8

昭和59年度 購入



C-74

佐藤 敏 SATŌ, Satoshi

1936~

陶酔記 Diary in the Intoxication  
of Clay

1984

木・土・スクラップ 163.5×262.0×27.0

昭和59年度 購入



C-75

杉浦康益 SUGIURA, Yasuyoshi

1949~

陶による石の群 Ceramic "Rocks"

1984

土 各50.0×60.0×100.0

昭和59年度 購入



C-76

西村陽平 NISHIMURA, Yōhei

1947~

伝道之書Ⅱ —白熱の中の崩壊—  
Ecclesiastes II

—Collapse in the White Heat—

1975

土・ヤカン・王冠・カン

各33.0×33.0×34.0

昭和59年度 購入

C-77

西村陽平 NISHIMURA, Yōhei

1947~

ペンチを侵蝕するアルミ

Aluminum Eroding Pincers

1980

アルミ・ペンチ 各27.8×23.0×17.2

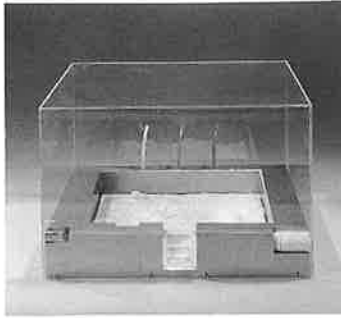
昭和59年度 購入





C-78

西村陽平 NISHIMURA, Yōhei  
1947～  
カップを破壊する石  
Stones Destroying Cups  
1982  
カップ・石 32.8×48.9×20.8  
昭和59年度 購入



C-79

西村陽平 NISHIMURA, Yōhei  
1947～  
独逸浪漫主義 —アッシジに寄せて—  
German Romanticism —Assisi—  
1982  
土・亜鉛板・木 40.0×39.7×25.3  
昭和59年度 購入



C-80

西村陽平 NISHIMURA, Yōhei  
1947～  
独逸浪漫主義 2  
German Romanticism 2  
1982  
アルミ・鉄・亜鉛板ほか 82.7×57.0  
昭和59年度 購入



C-81

西村陽平 NISHIMURA, Yōhei  
1947～  
燃えない木  
Noninflammable Woods  
1984  
木・土 27.5×18.0×20.0  
木・土(黒陶) 38.3×30.5×30.0  
昭和59年度 購入



C-82

P. ボーコス PETER, Voukos  
1924～  
プレート Plate  
1982  
土 径54.0  
昭和58年度 購入



C-83

P. ボーコス PETER, Voukos  
1924～  
スタック Stack  
1982  
土 底径61.0 高116.0  
昭和59年度 購入



C-84

不詳

萩茶碗 Teabowl

江戸時代中期

陶器 口径13.8 高8.7

昭和58年度 購入



C-85

不詳

萩牡丹唐草文手洗 Washbowl

1824

陶器 高34.0

昭和58年度 購入



C-86

不詳

萩飛獅子置物 Figure

江戸時代後期

陶器 高37.0

昭和58年度 購入



C-87

三輪休和 MIWA, Kyūwa

1895~1981

萩壺 Jar

1955

陶器 高27.8

昭和58年度 購入



C-88

三輪龍作 MIWA, Ryōsaku

1940~

鉢「早春」 Bowl

1981

陶 24.0×53.4×6.3

昭和56年度 購入

---

# 收集資料

---

## Ⅲ. 美術圖書

分類	資 料 名	著・編者	発 行	刊行年
0. 総記				
025.8	山口県内所在資料目録			
	第10集	山口県文書館	同 左	1983
	第11集	〃	〃	1984
029.2	新収図書目録			
	51.昭和58年1月～12月	山口県立山口図書館	同 左	1984
029.8	山口県文書館史料目録			
	毛利家文庫目録(三)	山口県文書館	同 左	1972
	(四)	〃	〃	1974
	(五)	〃	〃	1978
050	哲 学 第11号	関西大学哲学会	同 左	1984
2. 歴史				
210	防長寺社由来			
	第四卷	山口県文書館	同 左	1983
	第五卷	〃	〃	1984
	第六卷	〃	〃	1985
210.088	藤江家旧蔵小杉文庫目録	静岡県教育委員会	同 左	1981
210.3	銅鐸と前方後円墳	木 村 巖	木村巖測量登記事務所	1982
210.4	五山禅僧伝記集成	玉 村 竹 二	講 談 社	1983
215.6	伊勢歌舞伎資料調査報第1号	伊勢文化会議所	同 左	1984
217.7	山口県歴史資料報告書			
	第二集毛利家歴史資料目録			
	(一) 古文書、典籍編	山口県教育委員会	同 左	1983
	(二) 美術工芸編	〃	〃	1983
	第三集吉川家歴史資料目録	〃	〃	1984
	歴史の道調査報告書 山陽道	〃	〃	1983
	周防鑄銭司跡調査報告	山口市教育委員会	同 左	1978
	南原寺遺跡第一次発掘調査概報	美祿市教育委員会	同 左	1983
	徳山市社寺文化財調査概報			
	昭和56～57年度(第3年度)	徳山市教育委員会	同 左	1983
	昭和58年度(第4年度)	〃	〃	1984
	両公伝史料仮目録	山口県文書館		1984
	萩 市 史 第一卷	萩市史編集委員会	萩 市	1983
	日 置 町 史	日置町史編集委員会	日 置 町	1983

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	防長の美術と文化	白杵華臣・石原啓司	学習研究社	1983
	山口県の百年—県民百年史(35)—	小川国治・河村乾二郎 日野緩彦・梅村郁夫	山川出版社	1983
	秋芳町地方文化研究 第19号	大庭青雨	秋芳町地方文化研究会	1983
	〃 第20号	〃	〃	1984
	悠南閣文庫目録	宇部短期大学	同 左	1982
	山口県の昭和史	牧野喜久男	毎日新聞社	1982
	防長の古地図	山口県立山口博物館	同 左	1984
219.1	宝満山の地宝 —宝満山の遺石と遺物—	小田富士雄	大宰府天満宮文化研究所	1972
222.02	大汶口新石器時代墓葬発掘報告	山東省文物管理局 済南市博物館	新华書店北京発行所	1974
	中国考古学文献目録1949—1966	中国社会科学院考古研究所	新华書店	
	中国考古報告集之一 城子崖	李 濟	朋友書店	1979
	阜魯国故城	山東省文物考古研究所 他	斉魯書社	1982
271.7	四季日本の旅(12) —山陰山口—	第一アートセンター	集英社	1984
280	片山牧羊伝	塩出英雄	備後春秋	1985
290.3	中国歴史地名大辞典			
	第一巻	剣釣二 原著・塩英哲編著	凌雲書房	1980
	第二巻	〃	〃	1980
	第三巻	〃	〃	1980
	第四巻	〃	〃	1980
	第五巻	〃	〃	1980
	第六巻	〃	〃	1980
	中国名胜詞典	国家文物事業管理局	上海発行所	1981
290.38	中国分省地図 1918—1944	凌雲書房編集部	同 左	1981
371.56	同和教育推進の手びき(指導者用)	山口県教育委員会	同 左	1984
403	街の自然12ヶ月 —めぐろの動植物ガイド—	「目黒区の野草・野鳥・昆虫」 編集委員会	東京都目黒区役所	1983
488	野鳥の歳時記(4) 秋の鳥	相賀徹夫	小学館	1984
<b>5. 技術・工学・工業</b>				
521	鬼頭梓建築設計事務所 図書館建築作品集	鬼頭梓建築設計事務所	同 左	
<b>7. 芸術</b>				
702.1	日本美術史年表 奈良六大寺大鑑	源 豊 宗	座右宝刊行会	1978

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	法隆寺(一)	大田博太郎他	岩波書店	1972
	〃(二)	〃	〃	1968
	〃(三)	〃	〃	1969
	〃(四)	〃	〃	1971
	〃(五)	〃	〃	1971
	薬師寺(全)	〃	〃	1970
	興福寺(一)	〃	〃	1969
	〃(二)	〃	〃	1970
	東大寺(一)	〃	〃	1970
	〃(二)	〃	〃	1968
	〃(三)	〃	〃	1972
	唐招提寺(一)	〃	〃	1969
	〃(二)	〃	〃	1972
	西大寺(全)	〃	〃	1973
	大和古寺大鑑			
	(一) 法起寺他	太田博太郎他	岩波書店	1977
	(二) 当麻寺他	〃	〃	1978
	(三) 元興寺他	〃	〃	1977
	(四) 新薬師寺他	〃	〃	1977
	(五) 秋篠寺他	〃	〃	1978
	(六) 室生寺他	〃	〃	1976
	(七) 海住山寺他	〃	〃	1978
702.16	美術新報(全13分冊)	河北倫明編	八木書店	1983~85(復刻)
	図説万国博覧会史	吉田光邦	思文閣	1985
702.3	Propyläen Kunstgeschichte			
	1 Die Griechen und ihre Nachbarn	KARL SCHEFOLD	Propyläen	1984
	2 Das Römische Weltreich	THEODOR KRAUS	〃	1984
	3 Byzanz und der christliche Osten	JAQUELINE LAFONTAINE DOSOGNE他	〃	1984
	4 Die Kunst des Islam	BERTOLD SPULER他	〃	1984
	5 Das Mittelalter I	HERMANN FILLITZ	〃	1984
	6 Das Mittelalter II	OTTO VON SIMSON	〃	1984
	7 Spätmittelalter und beginnende Neuzeit	JAN BIALOSTOCKI	〃	1984
	8 Die Kunst des 16. Jahrhunderts	GEORG KAUFFMANN	〃	1984
	9 Die Kunst des 17. Jahrhunderts	ERICH HUBALA	〃	1984
	10 Die Kunst des 18. Jahrhunderts	HARALO KELLER	〃	1984

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	11 Die Kunst des 19. Jahrhunderts	RUDOLF ZEITLER	＊	1984
	12 Die Kunst des 20. Jahrhunderts	GIULIO C.AGAN	＊	1984
702.9	昭和57年度 大分県出身作家調査報告	大分県立芸術会館	同 左	1983
	藩政時代の絵師たち —鳥取県の自然と歴史—	鳥取県立博物館	同 左	1983
	青森県出身・在住美術家工人等名簿 (昭和58年1月1日現在)	弘前市立博物館	同 左	1983
703	新潮世界美術辞典	新潮世界美術辞典編集委員会	新 潮 社	1985
	有職故実図鑑	河 鱒 実 英	東京堂出版	1971
	美術家名鑑 (1983年版)	清 水 治	美術倶楽部	1983
	＊ (1984 年)	＊	＊	1984
	＊ (1985 年)	＊	＊	1985
	美術年鑑 (1983年版)	根 岸 秀 行	美術年鑑社	1983
	＊ (1984 年)	＊	＊	1984
	＊ (1985 年)	＊	＊	1985
	美術名典 (1983年版)	小 針 代 助	芸術新聞社	1983
	＊ (1984 年)	＊	＊	1984
	＊ (1985 年)	＊	＊	1985
	美術家年鑑 (1984年版)	森 田 文 雄	日本美術出版	1984
	美術名鑑 (1984年版)	美術名鑑編集部	美術公論社	1984
	美術館ガイドブック	下関市立美術館	同 左	1984
	芸術・美術に関する27年間の雑誌 と文献目録 (昭和23～49年)			
	Ⅲ. 彫刻・工芸	「雑誌文献目録」編集部	日外アソシエーツ	1983
	Ⅳ. 建 築	＊	＊	1983
	茨城県立美術館所蔵 美術雑誌目録	茨城県立美術館	同 左	1982
	埼玉県立近代美術館蔵書目録(Ⅰ)	埼玉県立近代美術館	同 左	1984
	根岸競馬記念公苑所蔵 古文書目録	根岸競馬記念公苑 馬の博物館	同 左	1983
	(要覧、概要書など)			
	板橋区立美術館 昭和54～56年度	板橋区立美術館	同 左	1982
	＊ 昭和57～58年度	＊	＊	1984
	茨城県立美術館 昭和58年度	茨城県立美術館	同 左	1983
	岩崎美術館	岩崎美術館	同 左	1983
	玄海彫刻の岬 恋の浦野外美術館	恋の浦野外美術館	同 左	1984
	埼玉県立近代美術館 昭和58年度	埼玉県立近代美術館	同 左	1983

分類	資 料 名	著・編 者	発 行	刊行年
	彫刻の森美術館	彫刻の森美術館	同 左	1982
	東京都美術館 昭和45年度	東京都美術館	同 左	1970
	〃 〃 46 〃	〃	〃	1971
	〃 〃 58 〃	〃	〃	1983
	〃 〃 59 〃	〃	〃	1984
	東京都庭園美術館	東京都庭園美術館	同 左	1983
	本郷新記念札幌彫刻美術館	札幌彫刻美術館	同 左	1981
	Freer Gallery of Art	Freer Gallery of Art	同 左	
	'84美術ひろしま	'84美術ひろしま編集委員会	同 左	1984
	秋 田 美 術	秋田県立美術館	同 左	1984
	白日会展覧会出品目録 第1回～59回	白 日 会	同 左	1984
703.8	ハーバード大学ホートンライブラリー蔵 アーネスト・フエノロサ資料第一巻	村 形 明 子	ミュージアム出版	1982
	〃 第二巻	〃	〃	1984
	全国美術館・博物館所蔵 美術品目録			
	絵画編一作者別	文 化 庁	同 左	1984
	〃 —美術館・博物館別	〃	〃	1984
	彫刻編	〃	〃	1984
	昭和59年度 国宝・重要文化財分類目録(絵 画)	文 化 庁	〃	
	〃 (工芸品)	〃	〃	1984
	〃 (彫 刻)	〃	〃	1984
	〃 (刀 剣)	〃	〃	1984
	〃 (書跡ほか)	〃	〃	1984
	〃 (考古資料)	〃	〃	1984
	〃 (歴史資料)	〃	〃	1984
	日本所在中国絵画目録			
	別4 寺院 編	東京大学東洋文化研究所	同 左	1982
	別6 博物館 編	〃	〃	1982
	別7 個人蒐集編	〃	〃	1983
	山口県文化財一覧表	山口県教育委員会	同 左	1984
	山口県文化財要録			
	第3集 絵画、書籍他	山口県教育委員会	〃	1977
	第4集 彫刻・工芸品	〃	〃	1978
	追 録	〃	〃	1981



分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	久留米市文化財調査報告書			
	第30集久留米藩御用絵師絵画 資料目録(一)	久留米市教育委員会	同 左	1981
	第31集           〃           (二)	〃	〃	1982
	第37集           〃           (三)	〃	〃	1984
	第38集           〃           (四)	〃	〃	1984
	戦災等による焼失文化財〔増訂版〕 美術工藝編	文化庁	便利堂	1983
	建造物編	〃	〃	1983
	秘宝 法隆寺(上)	石田茂作	講談社	1976
	〃 (下)	〃	〃	1976
	中国絵画総合図録(4) 日本編Ⅱ	鈴木敬	東京大学出版会	1983
704	東行西行	河北倫明	三彩社	1979
	兵庫県立近代美術館講演会・講座 記録書 第3集	兵庫県立近代美術館	同 左	1984
	清春芸術村〈清春白樺美術館〉 開館記念講演会記録	清春芸術村		
705	日本美術年鑑 昭和22~26年版	美術研究所		1952
	〃 昭和56年版	東京国立文化財研究所	〃	1983
	〃 昭和57年版	〃	〃	1984
	グラフィック日本画年鑑'84	高野省也	マリア書房	1983
	コピー年鑑'84	東京コピーライターズクラブ	誠文堂新光社	1984
706	独立美術協会50年	弦田平八郎他	独立美術協会	1982
	白日会史Ⅰ	白日会史編集委員会	白日会	1979
	一水会史 第一巻	池辺一郎・田坂重夫・ 田中晋弥	一水会	1983
	日展史			
	9. 帝展編(四)	日展史編集委員会	日展	1983
	10. 帝展編(五)	〃	〃	1983
	11. 帝展編(六)	〃	〃	1983
	12. 改組編	〃	〃	1984
	13. 新文展編(一)	〃	〃	1984
	本間美術館の37年	本間美術館	同 左	1984
	白鶴美術館五十年史	白鶴美術館	同 左	1984
	秋田博物館10年のあゆみ	秋田県立博物館	同 左	1984
	京都市立芸術大学百年史	京都市立芸術大学百年史編 集委員会	京都市立芸術大学	1981
	T a o 25周年記念	T a o 事務局	同 左	1982
	画商五十年	関慶三郎	三彩社	1982

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	長府博物館50年の歩み —城下町長府の文化—	長府博物館50年史編集委員会	長府博物館友の会	1983
	志水楠男と南画廊		美術出版社	1985
708	解説版 新指定重要文化財			
	1 〃 絵画Ⅰ	「重要文化財」編集委員会	毎日新聞社	1980
	2 〃 〃 Ⅱ	〃	〃	1981
	3 〃 彫刻	〃	〃	1981
	4 〃 工芸品Ⅰ	〃	〃	1981
	5 〃 〃 Ⅱ	〃	〃	1983
	6 〃 〃 Ⅲ	〃	〃	1982
	7 〃 書籍・典籍	〃	〃	1981
	8 〃 〃	〃	〃	1983
	9 〃 歴史資料	〃	〃	1984
	10 〃 考古資料	〃	〃	1981
	11 〃 建造物Ⅰ	〃	〃	1981
	12 〃 〃 Ⅱ	〃	〃	1982
	13 〃 〃 Ⅲ	〃	〃	1982
	中国の博物館			
	7. 河南省博物館	河南省博物館	講談社	1983
	8. 上海博物館	上海博物館	〃	1983
	国 宝			
	絵画Ⅰ	文化庁監修	毎日新聞社	1984
	〃 Ⅱ	〃	〃	
	〃 Ⅲ	〃	〃	
	彫刻Ⅰ	〃	〃	
	〃 Ⅱ	〃	〃	
	工芸品Ⅰ	〃	〃	
	〃 Ⅱ	〃	〃	
	〃 Ⅲ	〃	〃	
	書跡Ⅰ	〃	〃	
	〃 Ⅱ	〃	〃	
	書跡Ⅲ	〃	〃	
	考古	〃	〃	
	建造物Ⅰ	〃	〃	
	〃 Ⅱ	〃	〃	
	〃 Ⅲ	〃	〃	

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	韓国美術シリーズ			
	7. 韓国の石窟庵	黄 寿 永	近 藤 出 版 社	1983
	8. 新羅の十二支像	姜 友 邦	〃	1983
	9. 高麗の青磁	崔 淳 雨	〃	1983
709	昭和59年度文化行政の概要	山口県教育委員会	同 左	1984
709	文化経済学事始め —文化施設の 経済効果と自治体の施設づくり—	梅棹忠夫(監)	学 陽 書 房	1983
710	萩国際彫刻シンポジウム報告書 '81.9.11—11.15	シンポジウム運営委員会	萩 市	1982
	現代彫刻国際シンポジウム'84 びわこ現代彫刻展—環境と彫刻	びわこ現代彫刻展実行委員 会事務局		1984
	中日森の彫刻シンポジウム 第2回	中日新聞社	同 左	
	第3回	〃	〃	
	藤川勇造作品集	早川巍一郎・菊池一雄	中央公論社	1977
	藤川勇造作品集	香川県文化会館	同 左	1988
	赤堀信平彫刻作品集	赤 堀 光 信	赤 堀 光 弘	1983
	建築空間と造形	鈴木 禎・伊藤公象	西 村 画 廊	1983
	La Sculpture moderne en France depuis 1950	I.Jiarou, G.Xurigueta, A.Lordera	Arted Editions d'art (Paris)	1982
712.39	Constantin Brancusi— A study of the sculpture	Sidney Geist	Hacker Art Books(New York)	1983
718	日本彫刻史基礎資料集成			
	平安時代造像銘記編 (一)	丸尾彰三郎 他	中央公論美術出版	1966
	〃 (二)	〃	〃	1967
	〃 (三)	〃	〃	1967
	〃 (四)	〃	〃	1968
	〃 (五)	〃	〃	1970
	〃 (六)	〃	〃	1968
	〃 (七)	〃	〃	1969
	〃 (八)	〃	〃	1971
	平安時代重要作品編 (一)	〃	〃	1973
	〃 (二)	〃	〃	1976
	〃 (三)	〃	〃	1977
	〃 (四)	〃	〃	1982
721	画集 岸竹堂	シーグ社	ふたば書房	1984
	永平寺傘松閣天井絵	永平寺祖山傘松会	永 平 寺	1983

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	新編岡崎市史 第二章絵画	小林 忠	岡 崎 市	1984
	中村貞夫画集	中 村 貞 夫		1985
	八江菘絵図(全七冊)	木 梨 恒 充	吉 川 半 七	1892
721	花鳥画の世界			
	第十卷 中国の花鳥画と日本	戸田禎佐・小川裕充	学 習 研 究 社	1983
	第十一卷 花鳥画資料聚成	武田恒夫・辻 惟雄	〃	1983
	在外日本の至宝			
	第七卷	毎日新聞	毎日新聞社	1980
	第八卷	〃	〃	1980
	第九卷	〃	〃	1981
	第十卷	〃	〃	1981
721.3	雪舟画業聚成	中村溪男・金沢 弘	講 談 社	1984
721.4	狩野芳崖遺墨帖	岡倉秋水・本多天城	西 東 書 房	1911
721.6	堀 江 友 聲	島根県立博物館	同 左	1984
721.7	鉄斎研究総目録	鉄斎研究所	同 左	1983
721.8	近世風俗図譜			
	第二卷 遊楽	原田伴彦・山根有三	小 学 館	1983
	第三卷 洛中洛外(一)	林 屋 辰三郎	〃	1983
	第四卷 〃(二)	川嶋将生・辻 惟雄	〃	1983
	第七卷 遊女	切畑 健・磯 博	〃	1984
	第十卷 歌舞伎	林 屋 辰三郎	〃	1983
	第十一卷 公家・武家	岡本良一・脇坂 淳	〃	1984
	第十二卷 職人	網野善彦・石田尚豊	〃	1983
	第十三卷 南蛮	松田毅一・坂本 満	〃	1984
721.9	上村松園	山種美術館	同 左	1984
	御舟作品集—山種美術館蔵—	山種美術館	〃	1983
	速水御舟	河北倫明・吉田善彦	山 種 美 術 館	1984
	太田聰雨作品集	日本アートセンター	太 田 喜 多 子	1983
	福田翠光遺作集	福田翠光遺作集刊行会	同 左	1978
	岩橋英遠—道産子の眼—	奥 岡 茂 雄	北海道立近代美術館	1983
	現代の水墨 —墨の創造と可能性の展開—	小 林 格 史	大 日 本 絵 画	1983
722.2	中国絵画総合図録 第五卷	鈴 木 敬	東京大学出版会	1983
	古書画鑑定概論	徐 邦 达	文 物 出 版	1982
	漢代画像石	吴 曾 德	新 华 書 店	1984
	宋遼金画家史料	陳 高 华	〃	1984

分類	資 料 名	著 ・ 編 者	発 行	刊行年
	山東漢画像石研究	李 炭 林	齊 魯 書 社	1984
	画史叢書			
	第一卷 索引他	于 安 瀾	上海人民美術研究所	1963
	第二卷 宣和画譜他	〃	〃	1963
	第三卷 無声詩史他	〃	〃	1963
	第四卷 益州名画録他	〃	〃	1963
	第五卷 国朝院画録他	〃	〃	1963
723	Classici Dell'arte Rizzoli			
	Piero della Francesca		Rizzoli	1983
	Carajaggio			1983
	Piazzeta	R. PALLUCCHINI		1983
	Chardin	PIERRE ROSENBERG		1983
	世界の巨匠シリーズ			
	カラヴァッジオ	ALFRED MOIR (訳 若 桑 みどり )	美術出版社	1984
	ベックマン	STEPHAN LACKNER (訳 水 沢 勉 )	〃	1983
	ハルス	H. P. BAARD (訳 高 橋 達 史 )	〃	1983
	フェルメール	ARTHUR K. WHELLOCK JR (訳 黒 江 光 彦 )	〃	1984
	ユトリロ	ALFRED WERNER/SABINE REWALD (訳 幸 田 礼 雅 )	〃	1981
723.06	Dada and Surrealism, Reviewed	D. Ades	Arts Council of Great Britain	1978
	Futurist Art and Theory 1909—1915	M. Martin	Hacker Art Books	1978
	PARIS—BERLIN 1900—1933	W. Spies	Prestel Verlag	1979
723.1	松田正平画集	松 田 正 平	フォルム画廊	1983
	吉見庄助画集	吉見庄助画集刊行会	同 左	1983
	飛鳥の標をたずねて —井上正子自伝—	井 上 正 子	東洋デザイン	1983
	三岸好太郎筆彩素描集 蝶と貝殻	手 嶋 弘 道	北海道立三岸好太郎美術館	1983(復刊)
	須田国太郎画集	梅 田 画 廊	集 英 社	1975
	神田日勝—北辺のリアリスト—		北海道立近代美術館	1984
	寺田政明画集	愛 宕 山 画 廊	同 左	1972
	吉井 忠画集	〃	〃	1973
	大野五郎素描集	〃	〃	1980
	杉山寧ギリシャ・エトルリア素描	杉 山 寧	サカモト画廊	1984
	安藤信哉作品集	安藤信哉作品集刊行会	同 左	1984
	原田睦八十八歳自選画集	原 田 睦	原 田 麻 耶	1984

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	妹尾正雄画集 天地有情	妹尾正雄	同 左	1984
	埼玉の洋画人	松島光秋	四方宣画廊	1984
	私のシベリア (筑摩叢書290)	香月泰男	筑摩書房	1984
	新道繁松拾遺集	サロン・デ・ボザール	三国町郷土資料館	1983
	吉野純作品集	筑波大学芸術学系研究 報告編集委員会	筑波大学	1985
	松本竣介手帖	松本竣介	綜合工房	1985
723.35	Catalogue raisonnee MANET (1) Peintures ◇ (2) Pastel, Aquarelles et Dessins	D. Rauart, D. Wildenstein ◇		
	Theophile A. Steinlen "L'Oeuvre Grave et Lithographiede"	E. de Crauzat・Roger Marx	Alan Wofsy Fine Arts	1983
723.359	モンドリアン	赤根和生	美術出版社	1981
	抽象への意志 モンドリアンと〈デ・スタイル〉	H.L.C.マッフェ 赤根和生 (訳)	朝日出版社	1984
723.38	Wassily Kandinsky's Catalogne resonne of the Oil Painting I. 1900—1915 II. 1916—1944	Hans K. Roethel・J.K. Benjamin ◇	Cornell University Press ◇	1982 1984
723.53	Jackson Pollock	B. Noel・M. Butor	Centre Georges Pompidou	1983
724.1	技法入門シリーズ 4 日本画の描き方—花と静物—	中島千波	講談社	1983
725	近代日本洋画素描大系 2 3 4	小倉忠夫 富山秀男 岩崎吉一	講談社 ◇ ◇	1985 1985 1985
728.21	第10回九州・山口書道二十八 秀作品集	朝日新聞社	同 左	1985
	山口県の現代書道	田中江舟	昌平社	1984
730	原色浮世絵大百科事典 第三巻 様式・彫摺・版元	原色浮世絵大百科事典編集 委員会	大修館書店	1982
734	French Lithography 1860—1900 From Manet to Lautrec	F.Carey, A. Griffiths	British Museum Pudlication LTD	1978
751	THE WORLD OF CERAMICS Decorazione Ceramica American Porcelain:New Expressions in an Ancient Art 世界陶磁全集 9. 江戸 (四)	J. Neils Hoepli サントリー美術館 林屋晴三他	The Cleveland Museum of Art   小学館	1982 1984 1983

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	15. 清	佐藤雅彦他	小学館	1983
	16. 南海	長谷川楽爾	〃	1984
751.1	現代日本の陶芸			
	第四巻 現代陶芸の旗手	乾由明	講談社	1982
	第三巻 古典復興の名匠	林屋晴三	〃	1983
	第八巻 伝統と構造の意匠 II	吉田耕三	〃	1984
	第五巻 創作陶芸の展開 I	鈴木健二	〃	1984
	FAMOUS CERAMICS OF JAPAN			
	Vol.11 Hagi	KAWANO RYOSUKE	KODANSHA INTERNATIONAL LTD	1983
	萩焼人国記	朝日新聞山口支局	葦書房	1983
	茶碗 一楽二萩三唐津	林屋晴三他	淡交社	1983
	加守田章二作品集		弥生画廊	1984
	遠州と茶陶	小堀遠州顕彰会	講談社	1983
	昭和陶芸図鑑 西篇	黒田領治	光芸出版	1984
	見たことないもの作ろう! 視覚障害児の作品から学ぶ	西村陽平	偕成社	1984
	直方市文化財調査報告書第5集 古高取永満寺宅間窯跡	直方市教育委員会	同 左	1983
	薩摩焼年表	鹿児島県歴史資料センター 黎明館	同 左	1984
	江戸のやきもの	五島美術館	同 左	1984
	山川美術財団寄贈 茶道美術名品図録	石川県立美術館	同 左	1984
751.2	国際シンポジウム 新安海底引揚げ文物報告書	中国新聞社	同 左	1984
751.3	PETER VOULKOS	Rose Skiuka	New York Graphic Society	
9. 文学				
901.4	スターリン獄の日本人	内村剛介	中央公論社	1985
910.268	原民喜ノート	仲程昌徳	勁草書房	1983





---

# 組織等

---

美術館顧問

京都国立近代美術館長	河 北 倫 明
京都大学文学部教授	乾 由 明
山口県芸術祭運営委員長	三 好 正 直
陶芸家	三 輪 休 雪
山口県教育委員会教育庁	井 上 謙 治

(以上 昭和58・59年度)

美術品収集審査委員

東京国立近代美術館美術課長	浅 野 徹
大阪大学文学部教授	武 田 恒 夫
ジャパンアートコンサルタント社長	浦 上 敏 朗
山口大学名誉教授	友 近 琢 男
山口大学教育学部教授	服 部 碩 夫

(以上 昭和58・59年度)

## 美術館職員構成

館長 (事) 河野良輔  
副館長 (〃) 河村平八郎

### 総務課

課長 (〃) 松田隆行  
主任 (〃) 藤本正文 (58.8. 転出)  
〃 (〃) 内藤貴久 (58.8. 転入)  
(〃) 主事 中谷寧夫  
(技) 監視員 梅本三男  
兼運転士

### 学芸課

課長 (事) 足立明男  
専門学芸員 (〃) 高田美規雄  
(〃) 研究員 安井雄一郎  
(〃) 学芸員 菊屋吉生

### 普及課

課長 (事) 佐々木 蔚  
専門学芸員 (〃) 榎本 徹  
(〃) 学芸員 山本英男  
(下関市教育委員会派遣) 木本信昭  
(以上 昭和58年度)

館長 (事) 河野良輔  
副館長 (〃) 河村平八郎  
〃 (〃) 足立明男

### 総務課

課長 (事) 小林幹生  
主任 (〃) 内藤貴久  
(〃) 主事 中谷寧夫  
(技) 監視員 梅本三男  
兼運転士

### 学芸課

課長 (兼)(事) 足立明男  
主任 (〃) 榎本 徹  
専門学芸員 (〃) 高田美規雄  
(〃) 学芸員 菊屋吉生  
(〃) 〃 山本英男

### 普及課

課長 (兼)(事) 河村平八郎  
(〃) 研究員 安井雄一郎  
(〃) 学芸員 米屋 優  
(以上 昭和59年度)

## 職員の動静

58. 4 副館長、澄川一雄、転出（→山口県県民生活課長）  
同職に、河村平八郎、転入（←山口県衛生看護学院事務局長）  
◇ 浜本 聡、転入（←下関市立美術館）  
◇ 安井雄一郎、菊屋吉生、学芸課に転属（←普及課）  
◇ 榎本 徹、山本英男、普及課に転属（←学芸課）  
◇ 高田美規雄、学芸課専門学芸員に昇任（←学芸課学芸員）
58. 5 高田美規雄、イタリア共和国へ出張（58.5.24～6.11）
58. 8 総務主任、藤本正文、転出（→山口県教育委員会福利課長期給付係長）  
同職に、内藤貴久、転入（← 教職員課主任主事）
58. 9 足立明男、中華人民共和国へ出張（58.10.12～10.25）
59. 3 木本信昭、辞職（→下関市立美術館副館長）  
◇ 館長、河野良輔、退職（→非常勤館長）  
◇ 浜本 聡、転出（→下関市立美術館）
59. 4 館長（非常勤）河野良輔、任用  
◇ 学芸課長、足立明男、副館長兼学芸課長に昇任  
◇ 総務課長、松田隆行、転出（→山口県企業局総務課長補佐）  
同職に、小林幹生、転入（←防府林業事務所総務課長）  
◇ 普及課長、佐々木蔚、転出（→山口県視聴覚センター所長）  
◇ 副館長、河村平八郎、普及課長兼務  
◇ 榎本 徹、学芸課主任に昇任（←普及課専門学芸員）  
◇ 普及課学芸員として米屋 優、新規採用（←京都大学・学）  
◇ 山本英男、学芸課に転属（←普及課）  
◇ 安井雄一郎、普及課に転属（←学芸課）
59. 9 足立明男、榎本 徹、中華人民共和国へ出張（59.10.21～11.2）
60. 2 山種美術館に菊屋吉生、研修派遣（60.3まで）
60. 3 足立明男、榎本 徹、中華人民共和国へ出張（60.3.22～4.3）



---

発行／山口県立美術館

山口市亀山町3-1

Tel (0839) 25-7788(代)

発行日／昭和60年8月20日

印刷／株式会社丸二商行

Tel (0839) 25-1111(代)

---

